

水田文庫新収蔵記念

名古屋大学附属図書館  
2010年秋季特別展

# アダム・スミス と 啓蒙思想の系譜

2010年10月14日(木) - 11月11日(木)

名古屋大学附属図書館2010年秋季特別展

## アダム・スミスと啓蒙思想の系譜

発行日 2010年10月14日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B3-2(790)

TEL : 052-789-3667 FAX : 052-789-3693

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館

ISBN 978-4-903893-09-9

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室



## 2010年秋季特別展開催にあたって

名古屋大学附属図書館では、17世紀に活躍したイングランドの哲学者ホッブズの著作及び関連研究書を集めたホッブズ・コレクションや18世紀フランス自由思想家コレクションなど、近代西洋社会思想史関連の西洋初期刊本を精力的に購入してまいりました。また、2007年度には、急進改革主義、功利主義を中心とした近代イギリス経済学史・思想史関係の原典約600点を含む永井義雄名古屋大学名誉教授の蔵書をご寄贈いただき、さらに充実したところですが、2009年度末に、名古屋大学名誉教授で日本学士院会員である水田洋氏の蔵書の一部、経済学の父と言われるアダム・スミスの著作など約2000冊の原典を含む約7000冊を水田文庫として受け入れました。

本文庫は、スミスの著作の各版や各国語訳のみならず、スミスの先駆者、継承者、同時代の敵対者などの著作も体系的に集められているほか、書誌学等の関連分野も含まれています。また、スミスの著作内容は、哲学（倫理学、自然哲学）、政治学、経済学、修辭学と広範囲に亘っていますので、社会科学だけでなく、人文科学、ひいては自然科学の研究に役立つものと思われます。水田文庫の受入により、中央図書館が、近代西洋社会思想史研究のための日本で第一級の蔵書構成を誇る図書館となったと自負しており、今後西洋社会思想史研究の研究拠点の一つとして活用されることを期待しています。

今回の展示会「水田文庫新収蔵記念 アダム・スミスと啓蒙思想の系譜」によって、より広い分野の研究者・学生の方々に水田文庫の内容を知っていただき、ご利用いただけることを願っております。

最後になりましたが、本展示会の実質的な企画・助言をしてくださいました田中秀夫京都大学経済学研究科長、篠原久関西学院大学経済学部教授を始め、ご助力をいただきました名古屋大学経済学研究科、法学研究科、文学研究科の皆様及びご後援をいただきました各機関、関係者の皆様に対し、厚く御礼を申し上げます。

2010年10月 名古屋大学附属図書館長

松浦好治

# 目 次

2010年秋季特別展開催にあたって .....	1
はじめに .....	3
I. 自然法思想から啓蒙思想へ .....	4
ベラルミーノ (1)   リプシウス (2-3)   グロティウス (4)   ホップズ (5-7)	
パーカー (8)   ハリントン (9)   カンバーランド (10)   プーフェンドルフ (11)	
ハイネッキウス (12)	
II. スコットランド啓蒙思想 .....	15
フレッチャー (13)   デフォー (14-16)   スウィフト (17)   ケイムズ (18-20)	
フォーダイス (21-22)   タッカー (23-24)   レーナル (25-26)   シェリダン (27)	
ロバートソン (28)   ファーガスン (29-32)   スコッツ・マガジン (33)	
III. アダム・スミス思想体系の形成 .....	29
ハチスン (34)   マンデヴィル (35)   ヴォルテール (36)   ケイムズ (37)	
ヒューム (38)   スミス (39-45)   カラス事件関係 (46-50)	
IV. アダム・スミス思想の批判と継承 .....	42
オズワルド (51)   リード (52)   モンボド (53-54)   ブレア (55)	
ホーン (56)   キャップ (57)   ビーティ (58-59)   ミラー (60-62)	
アースキン (63)   コンドルセ (64)   ブルース (65)   ステュアート (66)	
コンスタン (67-68)   ミル (69)   バロン (70-71)	
おもな参考文献 .....	60

## はじめに

水田洋名古屋大学名誉教授・日本学士院会員は、1919年9月3日東京に生まれ、1941年12月東京商科大学（現一橋大学）を卒業、42年1月財団法人東亜研究所入所、同年11月より陸軍属（第16軍政監部付）となり南方諸島に従軍（43年1月16日-45年9月6日ジャワ軍政監調査官）、1946年6月復員、同年10月より東京商科大学特別研究生となり、1949年12月に30歳の助教授として名古屋大学法経学部（当時）に着任された。1958年2月に名古屋大学経済学部教授に就任、社会思想史および経済学史分野の充実に尽力、1966年10月より68年10月まで経済学部長を務めるなど、多大の足跡を残し、1983年4月に定年退職、名古屋大学名誉教授の称号を授与された。さらに、同年4月より93年3月まで名城大学商学部教授職にあり、1998年12月に日本学士院会員に選出され、91歳の今日まで衰えとは無縁の研究を続けておいである。

『近代人の形成』（東京大学出版会 1954年）以来、常に日本の思想史研究をリードし、経済学史学会、社会思想史学会、日本18世紀学会では創立時より中心的役割を担い、アダム・スミスの会では現在も会長職にある。日本学士院会員としては、社会思想史の分野で初めての選出であった。国際的には、主に国際18世紀学会の活動を通して、卓抜した業績によって尊敬を集め、日本の研究を国際的水準に引き上げることに大きく貢献した。自由平等な自己保存権を持つ近代的個人の成立を焦点化する独自の社会思想史の構想は、世界と日本の思想史研究の発展に圧倒的影響を及ぼし続けている。特に、トマス・ホップズとアダム・スミスの研究は、最高の評価を受け、2001年には *Lifetime Achievement Award, The Eighteenth-Century Scottish Studies Society*（国際18世紀スコットランド学会生涯業績賞）を受賞した。主要著作として、『アダム・スミス研究』（未来社 1968年）、*Adam Smith's Library* (Clarendon Press, Oxford, 2000) 『思想の国際転位』（名古屋大学出版会 2000年）、『新稿社会思想小史』（ミネルヴァ書房 2006年）、『アダム・スミス論集』（ミネルヴァ書房 2009年）を挙げるだけでも、60年以上の長期にわたり、第一線を維持する驚嘆すべき研究者の姿が浮かび上がる。

2009年度末に名古屋大学附属図書館が受け入れた水田文庫は、水田教授が約60年にわたる研究生活において収集した2万冊におよぶ蔵書のうち、ほぼ3分の1にあたるもので、19世紀初期までの思想史の古典からなる。このたびの展示会で基軸となるのは、トマス・ホップズの『リヴァイヤサン』（1651）とアダム・スミスの『道徳感情論』（1759）および『国富論』（1776）の諸版であって、空間的時間的にこれらにつながる著作群が、ホップズの提起した自己保存権を持つ自由平等な個人という理想をスミスが利己心を同感により相互規制する生産者の社会へと具体化するまでの思想的過程の壮大なドラマに連なり、多様な表情を見せ集合している。その意味で、本文庫はヨーロッパ啓蒙思想のコレクションであるが、ホップズやスミスに対する批判者の膨大な著作を含み、啓蒙の枠を超える思想が準備される過程を汲み取ることもできるという特色を持つ。本文庫に含まれ希少価値の高いスミスの著作の各国語への翻訳と受容をたどるだけでも、近代思想の転位がロマン主義などの19世紀思想を生み出していくコンテクストが出現してくるだろう。

水田文庫の全体は、本文庫以後の時代を現代に至るまで守備範囲としている。水田教授の研究が、ホップズからスミスへとという近代的社会観成立史を、カール・マルクス、マックス・ウエーバー、ジャン・ポール・サルトルなどの「近代個人主義、合理主義、あるいはラディカルな民主主義」を介して現代思想史につなぐ壮大な構想を持つように、これに対応する蔵書が研究者の訪問を待っているのである。今回の展示は、Ⅰ. 自然法思想から啓蒙思想へ、Ⅱ. スコットランド啓蒙思想、Ⅲ. アダム・スミス思想体系の形成、Ⅳ. アダム・スミス思想の批判と継承の四部構成とした。これを契機に、今回本学所収部分の意義を確認するのみならず、水田文庫の全体像を展望できれば、幸いである。

名古屋大学大学院経済学研究科教授・名古屋大学高等研究院副院長

安藤隆穂

## I. 自然法思想から啓蒙思想へ

17世紀は危機の世紀といわれるように、ヨーロッパ大陸でも、ブリテン島でも、政治と宗教（党派と宗派）が絡んだ内乱（Civil War）が長く続き、疫病も蔓延り、社会は荒廃し戦乱・無秩序・病によってひとびとは塗炭の苦しみをなめた。そうした内乱の時代の諸問題に根源的に取り組んだのは、誰にもまして自然法学者であった。しかし、キリスト教は言うまでもないが、ヨーロッパの共通の伝統としての共和主義もまた重要であった。

ハリントンは自然法学者というより、共和主義者と呼んだほうがよいし、リプシウスはストア哲学の復興者であったが、彼らもまた乱世をいかに克服するかについて異なる処方箋（力としてのヴァーチャーと平静としてのヴァーチャー）を示したのであった。宗教的寛容も課題であった。

この時代の圧倒的多数を占めた自然法学者は自然の状態の欠陥を自覚的に解決するための方法として、自然理性である自然法に導かれた社会契約によって、強固な秩序を作ることを目指した。しかし、自由を脅かすホブズの絶対主権論は批判を免れなかったが、それが克服されるためには、自然法思想の発展が必要であり、利己的・感性的な人間観が批判され、社会性あるいは社交性をもった存在として人間を定義し直すことが可能にならなければならなかった。それはグロティウス、プーフENDORF、ハチスンによって展開されることになる。社会性の哲学は人間本性の捉えなおしを意味した。それは権力による強制から自由主義への転回でもあれば、啓蒙思想への道でもあった。（田中秀夫）

### ベラルミーノ Bellarmino, Roberto Francesco Romolo, Saint, 1542-1621

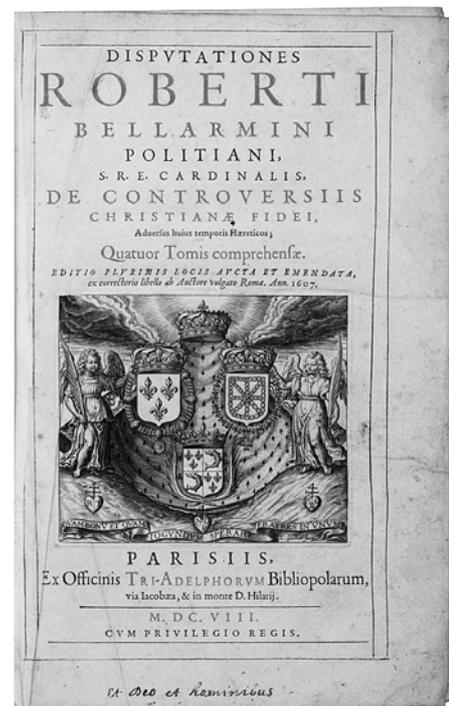
イタリアのイエズス会神学者。パドヴァ大学やカトリック側の反宗教改革運動の中心であったルーヴァン大学で学び、1570年からはルーヴァン大学の神学教授となる。1576年から88年まではローマ学院教授を務めた後、1592年には同学院長となる。1599年には枢機卿となり、まもなく異端審問担当枢機卿に任じられる。1602年にはカプア大司教となるが、1605年にはローマに戻る。1606年から1609年まで、英国国教会を支持するイングランド国王ジェームズ一世（スコットランド王ジェームズ六世）と、カトリック教徒迫害を非難するなど激しい論争を展開したほか、教皇権をめぐるヴェネツィア共和国やフランス教会との論争に参加した。

また、パウロ五世（Paul V, pope, 1552-1621）の命により、最初のガリレオ裁判（1616年）に関わることになり、ガリレオにコペルニクスの説を放棄するよう警告し、無罪の判決を下している。

著書は『異端反駁信仰論争』全3巻（1586-1593）であるが、他に『キリスト教教理詳解』（*Dichiarazione piu copiosa della dottrina cristiana*, 1598）、『教皇職の権威について』（*Tractatus de potestate summi pontificis in rebus temporalibus*, 1610）等がある。

#### (1) 『異端反駁信仰論争』 全4巻 パリ版 1608

*Disputationes Roberti Bellarmini politiani, s.r.e. cardinalis, de controversiis Christianae fidei, aduersus huius temporis hæreticos; quatuor*



『異端反駁信仰論争』

tomis comprehensæ. Editio plvrimis locis avcta et emendata, ex correctorio libello ab auctore vulgato Romæ. Ann. 1607. Parisiis, Ex Officio Tri-Adelphorum Bibliopolarum, 1608.

ベラルミーノがローマ学院神学教授時代に執筆したもので、初版は1586年から1593年にかけて、インゴルシュタットで3巻本として出版された。

ベラルミーノの代表作でプロテスタントとカトリックの論争における諸問題を体系的に著わし、ローマ教会の立場を擁護したもので、当時のヨーロッパに大きな影響を与えた。展示本は1608年にパリで発行された4巻（2巻合冊）本である。

### ユストゥス・リプシウス Lipsius, Justus, 1547-1606

リプシウスはブリュッセルに近い町で生れ、ルーヴァン大学で学び、1568年（21歳）に枢機卿グランヴェラのラテン語秘書としてローマに赴き古典研究にはげんだ。1571年に帰国したが、当時、オランダ解放戦争の始期にあたり、スペイン領低地地方総督（1567-1573）アルバ公の弾圧と恐怖支配を避けてウィーンへ脱出、翌年、ルター派のイエーナ大学で教授となった。この時、彼はカトリックからルター派へ改宗した。しかしイエーナ大学に永く安住できず、1574年以降、古典研究をつづけながら、1576年にはルーヴァン大学で法学の学位をとり、ルーヴァン大学の教授として古代史の講座を担当し、またローマ法の講義も行ない、大きな声望をえた。しかし1578年スペイン軍がネーデルラント軍に勝利し、フェリペ二世の異母兄弟ドンがネーデルラント総督になると、再びリプシウスは迫害を恐れて逃亡をよぎなくされた。実際、リプシウスの家はスペイン軍により略奪され、書物や手稿は奪われた。しかし翌年、友人の人文主義者ドウサ（Dousa, Janus [Jan van der Does], 1545-1604）の仲介で、レイデン大学の法学および歴史学の教授となった。その際、彼はカルヴィニズムに改宗している。この時代に彼の代表作である『タキトゥス年代記注解』（*Ad annales Corn. Taciti liber commentarius*, 1581）、『恒心論』（*De constantia*, 1584）、『政治学』（*Politica*, 1589）が次々と発表され、いずれもヨーロッパの各国語に翻訳されて一世を風靡するにいたった。こうしてリプシウスの著作は大きな影響力をもつに至ったのだが、しかし皮肉なことに彼の著作の中の宗教論が原因となって、再び都市レイデンを去らざるをえなくなり、やがて1592年、フェリペ二世の許可をえて、リプシウスは古代史およびラテン語の教授としてルーヴァン大学へ戻った。この時、彼はカトリック教会に復帰した。

以上の彼の略歴が端的に示すように、リプシウスの思想的な基本課題は、祖国ネーデルラントおよびヨーロッパの、内乱と戦争の時代のなかで、平和と秩序の再確立の方法を古典およびローマ史の研究を通じて明らかにすることにあつたし、特にこの時代において政治と宗教とが激しい緊張関係に陥っているので、両者のあるべき関係性を模索することにおかれた。改宗をくり返したりリプシウスは、しばしば、「カメレオン」というレッテルをはられるが、しかし改宗は単なる打算的なものではなく、政治と宗教との関連についての彼の独自の考え方に由来しているのかもしれない。

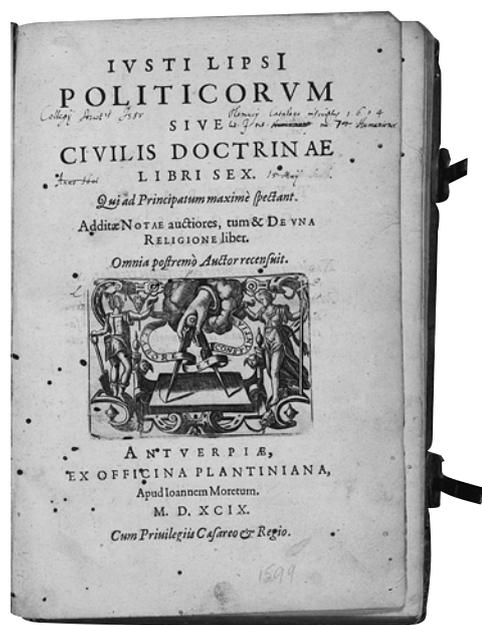
#### (2) 『政治学 六巻』 ラテン語版 [第4版?] 1599

*Iusti Lipsii Politicorum sive Civilis doctrinæ libri sex, qui ad principatum maxime spectant, additæ notæ auctiores, tum & De vna religione liber. Omnia postremò auctor recensuit.* Antverpiæ, Ex Officina Plantiniana, apud Ioannem Moretum, 1599.

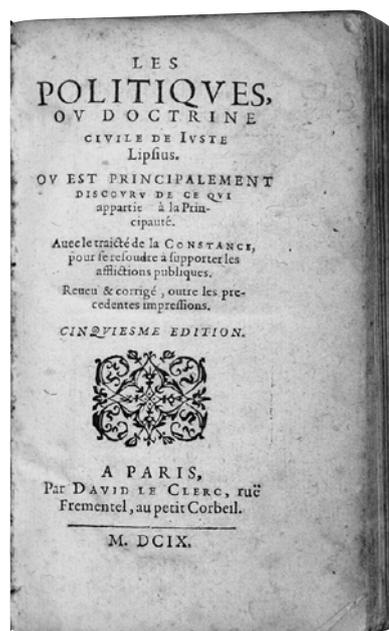
#### (3) 『政治学』 フランス語版 第5版 1609

*Les politiques, ov Doctrine civile de Ivste Lipsius. Ov est principalement discovro de ce qui appartient à la principauté. Auec le traicté de la Constance, pour se resoudre à supporter les afflictions publiques.* Reueu & corrigé, outre les precedentes impressions. Cinqviesme edition. A Paris, Par David le Clerc, 1609.

政治と宗教との関係としては、「一国家一宗教」の立場がとられているといわれ、ホッブズの国家・教会論やルソー（Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778）の市民宗教論などとの思想的な関連性（位置づけ）が問題となる。なお、本書は実践的な政治論をめざすため範例集（経験的知恵の集成）という体裁をとっているが、しかし全体の構成のなかにリプシウスの思想的独自性が表われているといわれる。その独自性は、ヨーロッパの危機に直面するなかで、ローマ帝国の古典の研究に沈潜し、それを彼の時代にいかそうとする努力から生れてくる。『政治学 六卷』の初版は1589年にレイデンで出版されたが、オランダ語版、フランス語版、英語版等の各国語版を含めて96版を重ね、同時代の政治思想家であるアルトジウス（Althusius, Johannes, 1557-1638）やボダン（Bodin, Jean, 1530-1596）の著作の版数をはるかにこえる。フランス語版（第5版）は『恒心論』（第5版）と一緒に製本出版された。



『政治学 六卷』



『政治学』

### フーゴー・グロティウス Grotius, Hugo, 1583-1645

オランダの法学者、政治家、神学者、古典学者。デルフトに生まれ、レイデン大学で学ぶ。15歳で使節として派遣されたフランスに1年余滞在し、オルレアン大学より法学博士号を授与される。1598年に帰国し、ハーグで弁護士として活躍する。1613年にイギリスに特使として派遣されて帰国したのち、官僚として活動するが、神学論争に巻き込まれて1618年に逮捕、幽閉される。1621年に脱出に成功して、フランスに亡命し、1631年には一時帰国するものの、赦免されず、ハンブルクへ逃れたのち、フランス駐在スウェーデン大使としてパリで外交官としての10年を過ごす。その後、スウェーデン政府に召還を願い、1645年に一旦ストックホルムに帰るが、スウェーデン政府に仕えることは固辞し、リューベック（ドイツ）に向かう途中のロストックで、1645年8月に客死する。

グロティウスの生きた時代は、オランダ独立戦争（1568-1648）及び三十年戦争（1618-1648）等があり乱世であったが、一方では、ガリレオやケプラーに代表されるような自然科学が発達したことにより、当時の哲学の方法論にも影響を与えていた。また大航海時代の後半にあたり、ヨーロッパ諸国が海外進出を行った時代でもあった。

著作にはこのような時代を反映した『捕獲法論』（*De jure praedae*, 1604-1605年執筆、1868年公刊）、『自由海論』（*Mare liberum*, 1609）、『戦争と平和の法』3巻（*De jure belli ac pacis*, 1625）、『キリ

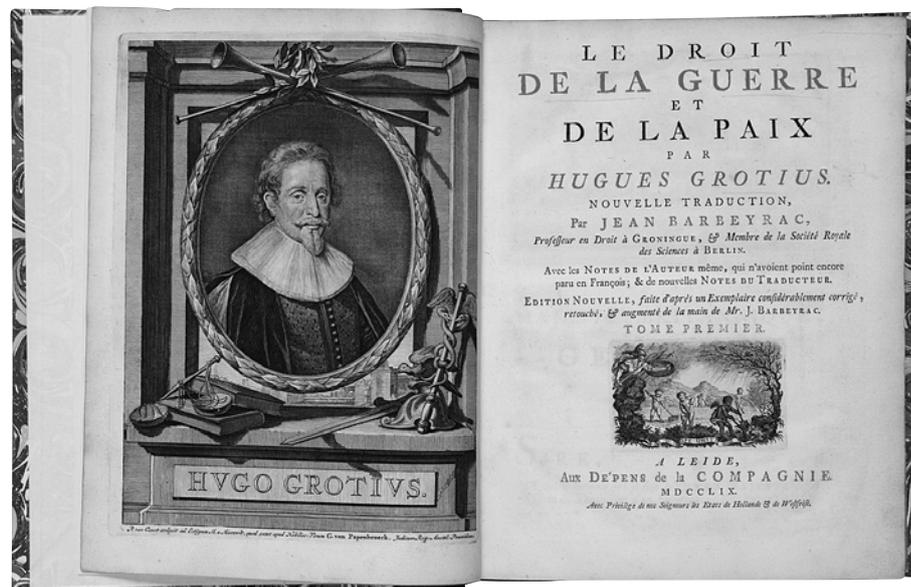
スト教の真理』(De veritate religionis christianae, 1627) などがあり、出版当時非常に名声を博した『戦争と平和の法』により、国際法の祖と呼ばれる。この書物の与えた影響としてハイデルベルク大学でプーフェンドルフ (Pufendorf, Samuel, Freiherr von, 1632-1694) が自然法と国際法の講座を担当したことに端を発し、スコットランドの大学でもグロティウスを必修とし、スミスは、自然法学を始めて本格的に体系化したのはグロティウスであると考え、『道徳感情論』(The theory of moral sentiments, 1759) で自らの自然法学を発展させようとする意図を示した。

#### (4) 『戦争と平和の法』 フランス語版 全2巻 1759

*Le droit de la guerre et de la paix.* Nouvelle traduction, par Jean Barbeyrac. Avec les notes de l'auteur même, qui n'avoient point encore paru en françois; & de nouvelles notes du traducteur. Edition nouvelle, faite d'après un exemplaire considérablement corrigé, retouché, & augmenté de la main de Mr. J. Barbeyrac. A Leide, Aux dépens de la Compagnie, 1759. 2 vols.

原書初版は、ラテン語 (*Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres*) で1625年にパリで出版されたが、これはグロティウスがフランス亡命中、三十年戦争の最中の1623年から書きはじめたもので、ルイ十三世への献辞がある。

本書は、法学者ジャン・バルベイヤック (Barbeyrac, Jean, 1674-1744) による4つ目の仏語訳で、バルベイヤックによる最初の仏語訳は1724年にアムステルダムで出版されたが、最初の仏語訳はクールタン (Courtin, Antoine de, 1622-1685) により1687年にパリで出版された。国際法に関する初めての体系的著作といえるもので、グロティウス自身も序論で著作の必要性として、戦争問題について、古代も近年にも体系だって書かれたものがないと言っている。



『戦争と平和の法』

#### トマス・ホブズ **Hobbes, Thomas, 1588-1679**

イングランドの哲学者。ウィルト州のマームズベリで、牧師の次男として生まれる。オクスフォード大学のモードリン・ホールで学び、卒業後はのちに第2代デヴォンシャー伯となったウィリアム・キャヴェンディッシュ (Cavendish, William, 2nd earl of Devonshire, 1590-1628) の家庭教師となった。これ以降、キャヴェンディッシュ家とホブズとの関係はほぼ生涯にわたってつづくこととなる。1629年に出版されたトゥキュデデス (Thucydides, c. 460/455 B.C.-c. 400 B.C.) の『ペロポネソス戦争史』の翻訳 (*Eight bookes of the Peloponnesian Warre*) には、彼の息子である3代目デヴォ

ンシャー伯への献辞がつけられている。

ホッブズは家庭教師として3度の大陸旅行に随行しており、旅行中の1630年にはユークリッド幾何学に出会って、理論の客観性について思想的転換を経験した。フィレンツェに、ガリレオ(Galilei, Galileo, 1564-1642)を訪問したのもそのころである。メルセンヌ(Mersenne, Marin, 1588-1648)、ガセンディ(Gassendi, Pierre, 1592-1655)、デカルト(Descartes, René, 1596-1650)などのフランスの知識人との交流もあり、『物体論』(De corpore, 1655)、『人間論』(De homine, 1658)、『市民論』(De cive, 1642)という三部作の構想は、1640年にはほぼできあがっていたようである。ところが、宗教問題、財政問題の争論の中で書いた『法学要綱』(The elements of law, natural and politic, 1640)で主権の絶対性を主張したことが、議会派の反感をかき、身の危険を感じてフランスへ亡命し、10年の亡命生活を送ることになる。フランスでは、デカルトとはすでに不仲であったが、メルセンヌやガセンディとの交友はとだえなかった。1646年にはイングランド皇太子(のちのチャールズ二世)の亡命宮廷がパリにできて、ホッブズは皇太子の数学教師となったが、宮廷の雰囲気はホッブズを無神論者として拒否した。

名著『リヴァイアサン』は亡命中に執筆され1651年に出版された。その年に帰国したホッブズは、『リヴァイアサン』を手土産にクロムウェル(Cromwell, Oliver, 1599-1658)に服従したといわれ、この非難は王政復活後もつづいて彼を悩ませた。忠誠(服従)問題へのかれの解答は、忠誠と保護は相関的であるから、保護がなくなれば忠誠も当然消滅するということであって、それは大義名分の問題ではないのである。

チャールズ二世はホッブズを宮廷に迎え入れたが、著書(たとえば『ビヒモス』(Behemoth, 1668)の出版はゆるさなかった。ホッブズは晩年になっても、ブラムホール(Bramhall, John, 1594-1663)との自由意思に関する論争や、ウォード(Ward, Seth, 1617-1689)、ウォリス(Wallis, John, 1616-1703)との数学論争などをくりひろげた。しかし新設の王立学会(Royal Society)は、彼とかわりを持とうとしなかった。

(5) 『リヴァイアサン』 初版(Head版) 1651

*Leviathan, or The matter, forme, & power of a common-wealth ecclesiasticall and civill.* London, Printed for Andrew Crooke, 1651.

(6) 『リヴァイアサン』 初版(Bear版) 1651

*Leviathan, or The matter, forme, & power of a common-wealth ecclesiasticall and civill.* London, Printed for Andrew Ckooke [sic], 1651.

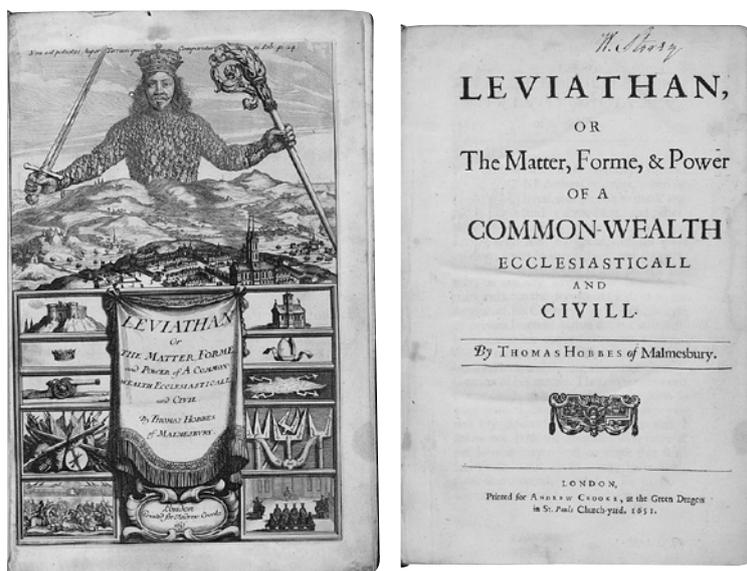
(7) 『リヴァイアサン』 初版(Ornaments版) 1651

*Leviathan, or The matter, form, and power of a common-wealth ecclesiastical and civil.* London, Printed for Andrew Crooke, 1651.

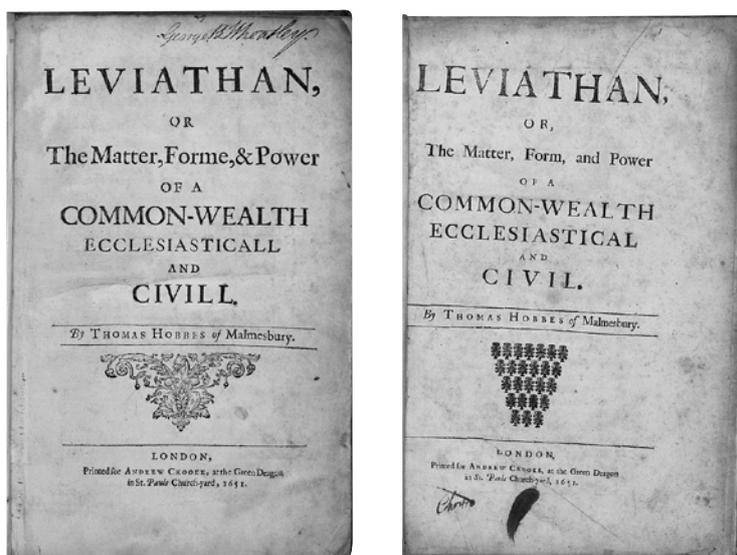
『リヴァイアサン』はホッブズがパリ亡命中に執筆され、初版は1651年にロンドンで出版された。4部で構成されており、前半の第1部「人間について」(Of man)で人間学、第2部「コモンウェルスについて」(Of commonwealth)で政治学をあつかい、後半の第3部「キリスト教のコモンウェルスについて」(Of a Christian commonwealth)、第4部「暗黒の王国について」(Of the kingdom of darkness)で宗教論(聖書解釈)をあつかっている。ホッブズは、心身の能力において平等な個々の人間は、自己保存のためにすべてのものを利用する権利を自然権として有するとした。しかしそうした人間の自然状態は「万人の万人に対する戦争」状態であり、生きるための殺しあいというこの矛盾から脱却するために、自然理性の戒律である自然法は、

平和を求め、そのために自然権を互いに放棄し、社会契約による絶対主権の設定を教えるとした。このような契約にもかかわらず、主権は個人の自然権を侵すことはできないという、抵抗問題がのこされている。

有名な扉絵“Leviathan”は、聖書に現れる巨大な海獣であるが、左手に笏（教会権力）、右手に剣（国家権力）を握る市民“public person”のすがたを象徴するという。「初版」とされるものに3つの版があり、出版社、出版年は同じであるが、タイトルページその他のかざりの図案の違い、ミスプリントや使用活字の違いから、異版であることがつきとめられており、タイトルページのかざり図案の違いから、それぞれ「Head版」「Bear版」「Ornaments版」と呼ばれている。実際の出版順序は調査により「Head版」が初出の真正版であり、後の2点が後から刊行された偽版とされるが、ホッブズへの政治的抑圧により『リヴァイアサン』の再版がゆるされなくなったとき、ひそかに印刷されたのではないかとされている。



『リヴァイアサン』 Head版

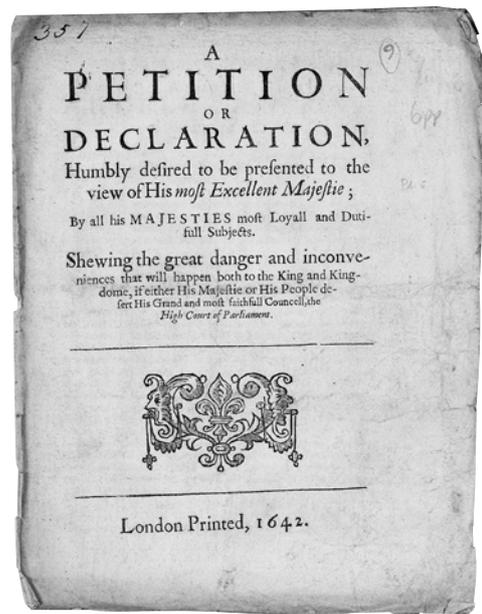


『リヴァイアサン』 Bear版

『リヴァイアサン』 Ornaments版

### ヘンリー・パーカー Parker, Henry, 1604-1652

イングランドの政治理論家。13世紀以来、サセックスのベクスヒルに所領をもつ旧家に生まれる。1625年にオクスフォード大学を卒業して、リンカーン法学院で学び、1637年に弁護士となった。しかし、イングランドでの政治情勢の緊迫は、弁護士にとどまることを許さなかった。はじめは長老派、のちに独立派の論客として活躍した。革命軍には参加せず、もっぱら文筆活動による国王攻撃を続けた。著書『国王陛下の最近の回答と発言に関する考察』(Observations upon some of his Majesties late answers and expresses, 1642)は、議会主権の擁護論として大きな影響を与えた。また、パーカーはクロムウェル指揮下のアイルランド遠征軍の書記となって、1649年にアイルランドへ渡った。クロムウェルのアイルランド、スコットランド征服を支持するパンフレットを著し、クロムウェルの帰国後も現地にとどまったが、1652年に病気で世を去った。



『請願あるいは宣言』

#### (8) 『請願あるいは宣言』 1642

*A petition or Declaration, humbly desired to be presented to the view of His most excellent Majestie; By all his Majesties most loyall and dutifull subjects. Shewing the great danger and inconveniences that will happen both to the king and kingdome, if either His Majestie or his people desert his grand and most faithful councell, the High Court of Parliament. London, [s.n.], 1642.*

パーカーは、兄とともに革命陣営に参加し、長期議会が招集された1640年11月に最初の著作『船舶税の根拠の簡単な考察』(The case of shipmony)を匿名で発表している。そこでは、国王の非合法的な課税権を激しく攻撃し、その翌年には、いくつかの論文において国教会に対して激しい攻撃を加えた。1642年に発表されたものには政治課題を扱ったものが多い。本書は、そのうちの一つである。

### ジェイムズ・ハリントン Harrington, James, 1611-1677

ハリントン家はノルマン征服以前から続く、由緒ある貴族の家系であった。とりわけジェイムズが属するラトランド州の分家は、16世紀以降、地方の名望家としてあっただけではなく当時の宮廷社会と密接な関係をもっていた。チャールズ一世が処刑されるまでのハリントンは、その意味では時代の典型的な宮廷人であった。彼は、1629年にオクスフォード大学に入学し2年ほどで退学するものの、31年末には6年間に及ぶ大陸旅行へと出発する。旅行中、各地の宮廷に出入りするなかで宮廷人の作法を身に付けていき、帰国後も宮廷社会と深く関わった。チャールズ一世に仕え始めるのはこの頃からであるが、その後、ピューリタン革命によって君主制国家が崩壊し、「事実上の」共和政へ至る歴史的場面に遭遇する。彼の代表的著作『オシアナ』(The commonwealth of Oceana, 1656)は、ブリテンにおける共和主義の思想的源流として評価される。ただし、宮廷人としてのハリントンの経験を踏まえ、彼の共和主義概念に同時代の共和主義者との異質性を指摘する声もある。

(9) 『オシアナとその他の作品集』 [第2版] 1771

*The Oceana and other works of James Harrington with an account of his life by John Toland.* London, Printed for T. Becket, T. Cadell, and T. Evans, 1771.

ハリントンの著作集は、トランド (Toland, John, 1670-1722) の編集で1700年版、1737年版、1771年版と出ているが37年版と71年版には、初版にはなかった小冊子類を含む21点と、ジョン・ホール (Hall, John, bap. 1627, d. 1656) の著作『君主政治の基礎と根拠』(*The grounds and reasons of monarchy*, 1651) が収録されている。主著『オシアナ』はホプズの『リヴァイアサン』とともに、当時の二大名著といわれるが、その特徴は高度な寓話性にあり、そもそも「オシアナ」という題がギリシャ神話に由来する「北海の美しい島」の寓意であった。作品の後半部分では立法者「アルコン」と50名からなる立法者会議による「オシアナ」の建国物語が叙述される。ハリントンの本書での意図は「真の共和政」を描くことにあったとされるが、革命の遂行や実現についてではなく、マキャヴェッリ的な「古代の慎慮」に基づいて内乱やアナーキーを終息させる「統治」と「制度」の問題が展開されている。本著作集ではそのほか、『民衆政治論』(*The prerogative of popular government*, 1658) や『立法論』(*The art of lawgiving*, 1659) などが収録されている。



『オシアナとその他の作品集』

リチャード・カンバーランド **Cumberland, Richard, 1631-1718**

イングランド王政復古期の英国国教会派の神学者、哲学者で、科学や医学の研究者でもあった。17世紀における先導的な自然法論者の一人。

1650年にケンブリッジ大学に入学し、1653年に学士を、1656年に修士を、1663年には神学士の学位をとる。ケンブリッジ大学のモードリン・カレッジで、神学者のバートン (Burton, Hezekiah, 1632-1681) や、日記で有名なピープス (Pepys, Samuel, 1633-1703) と親交を持つ。さらにモードリンの先輩、ブリッジマン (Bridgeman, Sir Orland, 1609-1674) の礼拝堂つき牧師となって以来、彼の庇護を受け、主著である『自然法論』(*De legibus naturæ*, 1672) を出版する。1691年から没するまでピーターバラの主教。

(10) 『自然法論』 英語版 1727

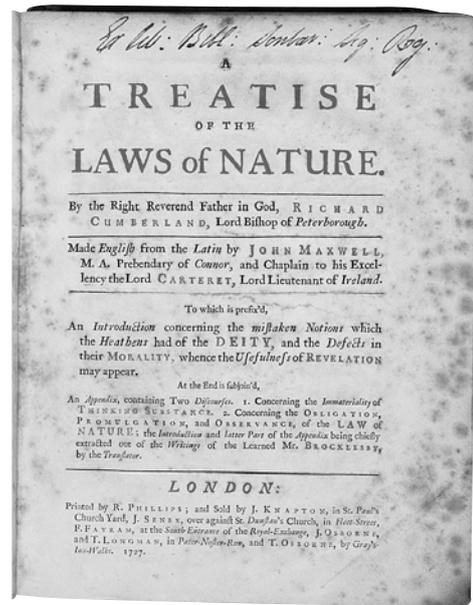
*A treatise of the laws of nature, ... Made English from the Latin by John Maxwell, ... To which is prefix'd, an introduction concerning the mistaken notions which the heathens had of the Deity, and the defects in their morality, whence the usefulness of revelation may appear.* At the end

is subjoin'd, an appendix, containing two discourses, 1. Concerning the immateriality of thinking substance. 2. Concerning the obligation, promulgation, and observance, of the law of nature; the introduction and latter part of the appendix being chiefly extracted out of the writings of the learned Mr. Brocklesby, by the translator. London: Printed by R. Phillips; and sold by J. Knapton, J. Senex, F. Fayram, J. Osborne, and T. Longman, 1727.

「利己心」について、カンバーランドは人間には利己的な性向だけではなく、自然的傾向として善意を持つと考え、ホッブズが『リヴァイアサン』(1651)で人間の本性は利己的なものであるとしたことに反論して書いたと言われる。

初版は、ラテン語 (*De legibus naturæ*) で1672年にロンドンで出版され、プーフェンドルフ (Pufendorf, Samuel, Freiherr von, 1632-1694) ドイツの法学者が『自然法と万民法』(*De jure naturæ*) の第2版 (1684) で取り上げるなど、国内外に影響を与えた。ラテン語版は版を重ね、1744年にはフランス語版も出版された。本書の随所で最大多数の幸福を追求していることにより、カンバーランドは英国功利主義の先駆者とされている。

マックスウェルによる英訳本には、ラテン語版の修正に関する序文と二つの論説よりなる付録がついている。



『自然法論』

### ザムエル・フォン・プーフェンドルフ Pufendorf, Samuel, Freiherr von, 1632-1694

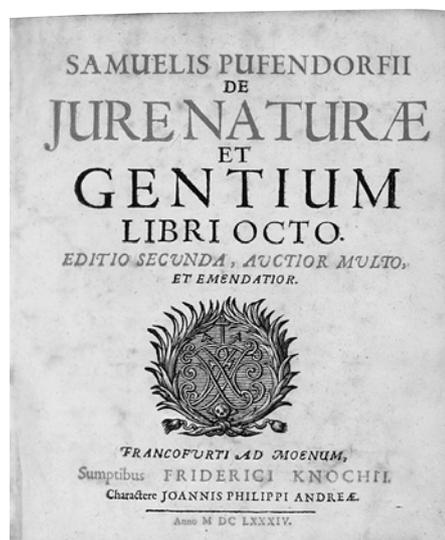
ザクセン選帝侯領のケムニッツで代々ルター派の牧師を務める家に生まれる。1650年にはライプツィヒ大学に入るが、ルター派内部の抗争で退廃していたライプツィヒの神学に見切りをつけ、イエーナ大学に移る。58年には、コペンハーゲン駐在のスウェーデン外交官の家の家庭教師となるものの、北方戦争のあおりを受けて捕虜となる。この間に『普遍法学原理』(*Elementorum jurisprudentiæ universalis*, 1660) を執筆した。同年、ハイデルベルク大学の万民法教授に就任。77年には、スウェーデン国王に招聘される形でレント大学法学部に自然法・万民法教授として着任する。この間、代表作『自然法と万民法』(*De jure naturæ et gentium*, 1672) とその要約である『自然法に基づく人間と市民の義務』(*De officio hominis et civis juxta legem naturalem*, 1673) が出版される。1677年、カール十一世により宮廷史料編纂官兼國務次官に任命され、以降、歴史学と宗教論に力を注いだ。その後、プロイセン大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム (Friedrich Wilhelm, 1620-1688) の招きで、ブランデンブルクの宮廷史料編纂官となり、晩年の6年間はベルリンで研究に取り組んだ。

プーフェンドルフの自然法学は、グラズゴウ大学道徳哲学教授カーマイケル (Carmichael, Gershom, 1672-1729) やその後任のハチスン (Hutcheson, Francis, 1694-1746) によってスコットランドに積極的に導入された。ホッブズやロック (Locke, John, 1632-1704) と異なり、彼の自然法学はグロティウス (Grotius, Hugo, 1583-1645) 同様、法規範としての体系性に加えて、現実的な法の問題にある程度対応可能な具体性を持っていたところにその特徴がある。

(11) 『自然法と万民法』 第2版 1684

*Samuelis Pufendorfii De jure naturæ et gentium libri octo. Editio secunda, auctior multo, et emendatior. Francofurti ad Moenum, sumptibus Friderici Knochii, 1684.*

プーフェンドルフの主著で、初版は1672年にルントで出版。彼の法概念は大きくは自然法と国法に分けられる。前者はまず、ホッブズの自然状態論の批判を通じ、理性によって人間の自然・状況・性向を観察することで見出されるものとされる。ここから導かれるのは人間の「微力さ」とそれを補完する「社会性」とであるが、その上位に神を配していることから、彼の自然法概念は自然神学によって支えられている（「絶対的自然法」）。次いで、「条件的自然法」として人々の合意が自然状態に導入した制度を前提とする法規範を論ずる。ここでは言語、私的所有、貨幣、人的支配などといった近代社会を支える基本構造が問題とされる。彼のいう「国法」とは、最高権力者の意志によって国家福祉のために発せられる法律のことであるが、最高権力者という上位者が前提とされているのは、彼の法概念、すなわち「法とは、服従者が自らの行為を上位者の指図に合致させるよう義務付けるための命令である」という定義そのものによる。



『自然法と万民法』

ヨハン・ゴットリーブ・ハイネッキウス Heineccius, Johann Gottlieb, 1681-1741

ドイツの法学者。ライプツィヒで神学を学び、ハレでは法学以外にも哲学や修辞学を学ぶ。ハレ大学は1694年新設の大学で、ドイツにおける初期啓蒙思想の拠点であった。そこで啓蒙思想の父と言われる経験的自然法学者であるトマジウス（Thomasius, Christian, 1655-1728）の弟子となるが、彼よりもドイツの法学者プーフェンドルフ（Pufendorf, Samuel, Freiherr von, 1632-1694）の影響をより受ける。フラネカー大学（1585-1811年に存在したネーデルラントの大学）、フランクフルト・アン・デア・オーデル大学、オランダのユトレヒト大学で教鞭をとるが、各大学での講義が名声を博し、ブランデンブルク・プロシア政府の要請によりハレ大学で教えるようになる。

著書に『自然法および万民法要綱』（*Elementa juris naturæ et gentium*, 1738）のほか、『古代ローマ史集成』（*Antiquitatum romanorum syntagma*, 1719）、『ユスティニアヌス法典の編成による市民法要綱』（*Elementa iuris ciuilis secundum ordinem institutionum*, 1725）、『ゲルマン法要綱』（*Elementa Juris Germanici*, 1735-1736）などがある。

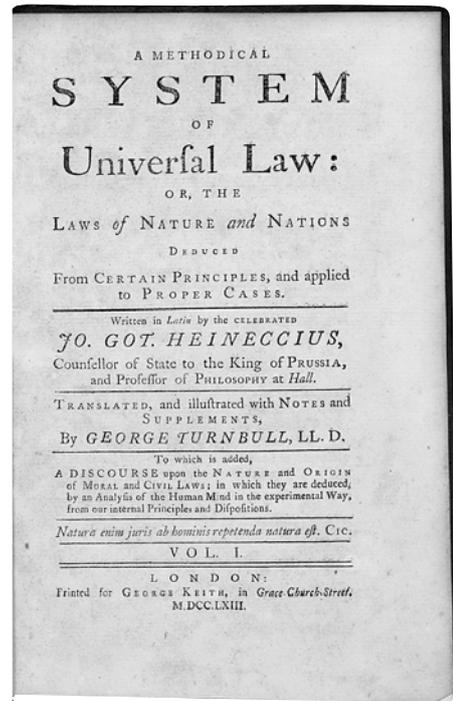
当時すでに確立していた、グロティウス（Grotius, Hugo, 1583-1645）、プーフェンドルフ、トマジウスらの近代ヨーロッパ自然法を展開し、18世紀のドイツにおいては最も著名な法学者の一人であった。

(12) 『自然法および万民法要綱』 英語版 [第2版] 全2巻 1763

*A methodical system of universal law: or, The laws of nature and nations deduced from certain principles, and applied to proper cases. Written in Latin by the celebrated Jo. Got. Heinaccius, ... Translated, and illustrated with notes and supplements, by George Turnbull, LL. D. To which is added, A discourse upon the nature and origin of moral and civil laws; in which they are deduced, by an analysis of the human mind in the experimental way, from our internal principles*

and dispositions. London: Printed for George Keith, 1763. 2 vols.

ハレ大学における一連の講義の産物が本書で、ハイネッキウス独自の自然法を展開したラテン語による原著 *Elementa juris naturæ et gentium* は、1738年にハレで出版され、5版を重ねた。スコットランド啓蒙の第一世代とされるターンブル (Turnbull, George, 1698-1748) による英訳本は、1741年と1763年にいずれもロンドンで出版された。ターンブルは、アバディーンのマーシャル・カレッジで、スコットランド常識学派の創始者トマス・リード (Reid, Thomas, 1710-1796) を教えた。原著の序文を訳出しなかったが、詳細な注や補遺「道徳及び市民法の本質と起源」(*A discourse upon the nature and origin of moral and civil laws*) で、近代自然法を概観し、イギリスでほとんど知られていない著者たちを紹介した。



『自然法および万民法要綱』

## II. スコットランド啓蒙思想

17世紀の自然法思想から18世紀のスコットランド啓蒙思想への展開は、実に興味深い思想的契機 (Moments) の連続であった。名誉革命をうけてのイングランドとスコットランドの合邦 (1707年) は、スコットランドの愛国者フレッチャーの反対をものともせず遂行され、大ブリテンという新しいネーションの鍛造に向かったが、その過程で、デフォー、スウィフト、マンデヴィルが参加したオーガスタン論争 (土地、商業、貨幣、軍事などを論点に巻き込んだ社会経済論争) を展開した。その総括として、英仏で社会思想は歴史的次元を包摂し、未開と文明 (ルソー)、あるいは野蛮から洗練へ (ケイムズ、ヒューム、スミス) の歴史が展望されるようになる。圧倒的な思想的著作はスコットランド人によって書かれた。その理由は、大学の道徳哲学講座の充実に求められたり、その他さまざまに研究されている。啓蒙と文明は賛美された。しかし、商業文明を手放して賛美することはスミスといえどもできなかつた。商業文明の危機意識 (腐敗と隷従) はファーガスンとルソーに濃厚に見られた。

スコットランド啓蒙は経済学という新しい学問体系を生み出すが、同時にまた社会発展の四段階理論を組み込んだ文明社会史 (ケイムズからロバートスンまで) をもたらした。ほぼ同じことは、少し程度は異なるけれども、フランス啓蒙 (テュルゴ、レーナル) やイタリア啓蒙 (ベッカリーア、ジェノヴェージ) でも起こっている。

スコットランドの道徳哲学は、ハチスンからヒュームの批判的継承、そのまたスミスによる批判的継承という系譜と、ヒューム批判として始まったトマス・リードとケイムズのコモン・センス学派の系譜とに大別される。アメリカにはハチスン、後にはリードとD.ステュアートのコモン・センス哲学が影響を与える。(田中秀夫)

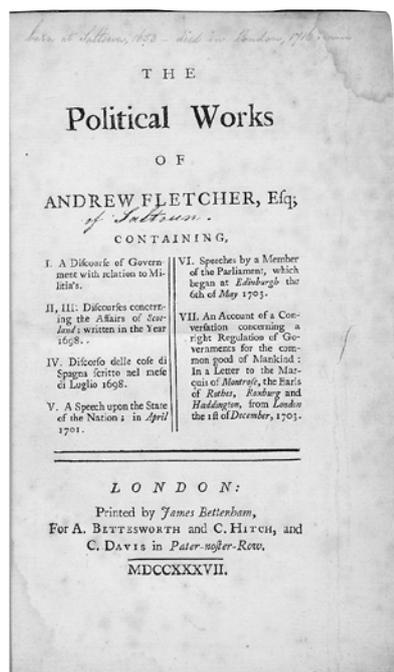
### アンドルー・フレッチャー Fletcher, Andrew, 1655-1716

スコットランドの愛国者、政治思想家、蔵書家。裕福な地主の長男として生まれたがどのような教育を受けたかはよくわかっていない。たびたびヨーロッパに旅行に出かけ、見聞を広めた。

1678年にスコットランドの代表会議のメンバーに選ばれ、反体制派として活動する。1683年から名誉革命が終わるまでの大半を大陸で過ごし、1688年にスコットランドに戻る。終始、経済発展に伴う腐敗や政治的従属に焦点をあて、絶対主義や専制政治を否定して、1707年のスコットランドとイングランドの合邦にも反対する。

#### (13) 『政治論集』 1737

*The political works of Andrew Fletcher, esq; containing, I. A discourse of government with relation to militia's. II, III. Discourses concerning the affairs of Scotland; written in the year 1698. IV. Discorso delle cose di Spagna scritto nel mese di Luglio 1698. V. A speech upon the state of the nation; in April 1701. VI. Speeches by a member of the Parliament, which began at Edinburgh the 6th of May 1703. VII. An account of a conversation concerning a right regulation of governments for the common good of mankind: in a letter to the Marquis of Montrose, the Earls of Rothes, Roxburg and Haddinton, from London the 1st of December, 1703.* London: Printed by James Bettenham, 1737.



『政治論集』

1698年から1704年までに発行されたパンフレット6点をフレッチャーの死後まとめて出版したもの。本書のほかに1732年にロンドンから、また1749年にはグラズゴウから出版されている。いずれの版も『民兵と常備軍に関する論文』(A discourse concerning militias and standing armies, 1697)は改訂版(1698)を使用している。巻頭にフレッチャーの人物描写とロックハート(Lockhart, George, 1673-1731)による回想が付されている。

これらは、専制政治をもたらずとして常備軍に反対し、富をもたらず民兵制度の採用を主張する論説、スコットランドの貧困化問題について、スペインの王位継承に関する分割相続を支持する論説、スコットランド合邦批判を主とした内容である。フレッチャーの持つこれらの課題は18世紀のスコットランド啓蒙思想家に影響を与えた。

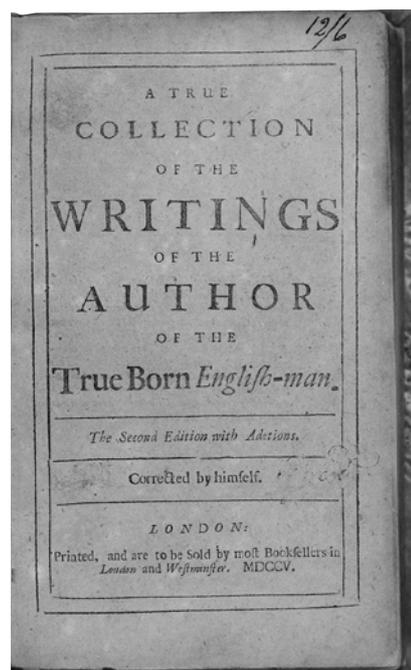
### ダニエル・デフォー Defoe, Daniel, 1661?-1731

ロンドン出身の小説家、ジャーナリスト。1660年、蠟燭職人ジェームズ・フォー(Foe, James, d. 1706)の第三子として生まれる。非国教徒としての教育を受けて聖職を目指す。1681年頃に商業の道に進むことを決意し、煙草やワインの輸出入業や煉瓦工場などを営む。政治活動にも関心が高く、1685年のモンマス公(Scott, James, duke of Monmouth and 1st duke of Buccleuch, 1649-1685)の反乱には自ら身を投じ、名誉革命後はウィリアム王を支持するパンフレットを執筆。1697年頃より本格的な執筆活動に入る。1702年には、国教会ハイ・チャーチ派の非寛容さを風刺した『非国教徒撲滅の早道』(The shortest way with the dissenters)を出版した罪で投獄されるが、トーリー党のロバート・ハーレー(Harley, Robert, 1st earl of Oxford, 1661-1724)の尽力によって救出される。以後、政府の秘密諜報員の職に従事し、1704年には『レビュー』(The review)紙を発行。1714年のジョージ一世即位後は、ホイッグ党の諜報員として活動を続けた。晩年は小説家として活躍し、『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe, 1719)や『モル・フランダーズ』(Moll Flanders, 1722)など18世紀英文学を代表する作品を執筆した。

#### (14) 『生粋のイギリス人の著者による真の著作集』 [第一巻] 第2版 1705

*A true collection of the writings of the author of the true born English-man. The second edition with additions. Corrected by himself. London: Printed, and are to be sold by most booksellers in London and Westminster, 1705.*

1705年に出版されたデフォーの著作集(初版は1703年)。イギリスの国民性、国教徒と非国教徒の間の緊張関係など、18世紀初頭のイギリスが抱える宗教問題や人種問題を風刺する作品などが収められている。冒頭を飾る『生粋のイギリス人』(The true-born Englishman)は1701年に出版された風刺詩で、自称「真のイギリス人」として出自や家柄に固執する人物たちの外国人排斥精神を批判するもの。1702年に出版された『非国教徒撲滅の早道』(The shortest way with the dissenters)は、非国教徒であったデフォー自らが身分を偽って執筆した扇情的なパンフレットで、投獄されるきっかけとなった著作。タイトルに「真の」がついている背景には、海賊版のデフォーの著作集が作者に無断で出版され



『生粋のイギリス人の著者による真の著作集』  
[第一巻]

ていたという事実がある。

(15) 『生粋のイギリス人の著者による著作集第二巻』  
[第2巻] 第2版 1705

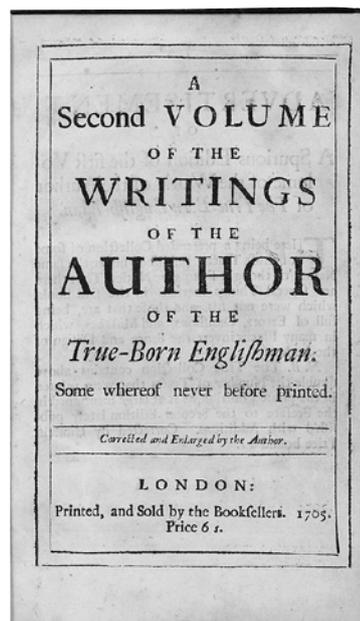
*A second volume of the writings of the author of The true-born Englishman. Some whereof never before printed. Corrected and enlarged by the author. London: Printed, and sold by the booksellers, 1705.*

1705年に出版されたデフォーの著作集第二巻。第一巻では一般的な非道徳を告発する風刺詩が掲載されていたが、第二巻は作者自身を風刺の対象とした自伝的な作品が多く収められている。1703年に執筆された「さらなる改革、作者自身に関する風刺詩」(*More reformation, a satyr upon himself*)、1704年の「生粋のイギリス人の作者への哀歌」(*An elegy on the author of the True-born English man*)は、自虐的な自己弁護としても読むことができる。この時期からデフォーの扱う主題が国家や国民性から「私」へと移行していたことは注目に値する。

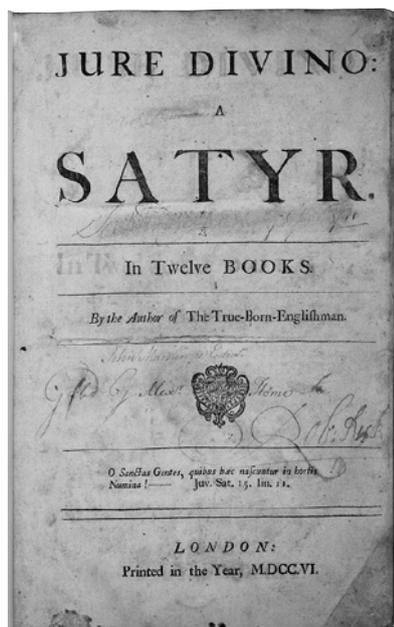
(16) 『神の掟—風刺詩』 全12巻 1706

*Jure divino: a satyr. In twelve books. By the author of the true-born-Englishman. London, [s.n.], 1706.*

1701年から5年の歳月を費やして書かれた全12巻にも及ぶ長編風刺詩。「神の掟—風刺詩」というタイトルどおり、王権神授説と王への絶対服従を教義とするハイ・チャーチ派を風刺する内容。この詩は「世界の第一の君主」である「理性」へと捧げられており、また第12巻の末尾には当時のアン女王への献辞が添えられている。



『生粋のイギリス人の著者による著作集第二巻』



『神の掟—風刺詩』

ジョナサン・スウィフト Swift, Jonathan, 1667-1745

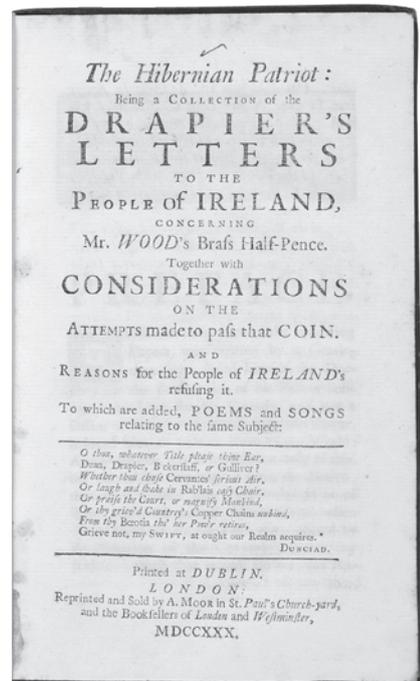
イングランド出身の法律家の息子として、アイルランドのダブリンに生まれる。1682年にダブリンのトリニティ・カレッジに入学し、86年に同校卒業。89年には、前年の名誉革命によってウィリアム王戦争が起こり、ダブリンが混乱したため、難を避けてイングランドに渡り、母の縁故で当時政界・外交界の大家であったウィリアム・テンプル卿 (Temple, William, 1628-1699) の邸宅に住み、彼の秘書となった。テンプルの死後、バークリー伯 (Berkeley, Charles, 2nd earl of, 1649-1710) の近づきを得て再びアイルランドへ戻り、聖パトリック教会の聖職禄を得て、1713年には首席司祭となる。だが彼は、1714年にアン女王が没し王党内閣が失脚するまで、俗界での栄達を求めてアイルランドとロンドンを幾度となく往復している。

彼の代表的作品は、風刺文学の傑作『ガリヴァー旅行記』(Travels into several remote nations of the world, 1726)であるが、初期作品にあたる『桶物語』(A tale of a tub, 1704)にすでに彼の批判精神が表れていた。『桶物語』の二つのテーマ、すなわち宗教と学術の腐敗を諷する内容は、宗教改革前後のキリスト教、および1690年代の新旧論争に対するものであり、総じて近代批判を旨とするものである。同時に出版された『書物合戦』(The battle of the books, 1704)と『精霊の機械作用についての講話』(A discourse concerning the mechanical operation of the spirit, 1704)は、それら二つのテーマに対応する。1714年以降は栄達の望みを完全に断たれしばらく沈黙を保ったが、1720年頃からすさまじい文筆活動を展開する。『ガリヴァー旅行記』を書き始めると同時に、アイルランド人の主張を擁護する活動を開始したのも、この頃からである。

(17) 『ドレイピア書簡集』 リプリント版 1730

*The Hibernian patriot: being a collection of the drapier's letters to the people of Ireland, concerning Mr. Wood's brass half-pence, together with considerations on the attempts made to pass that coin. And reasons for the people of Ireland's refusing it. To which are added, poems and songs relating to the same subject. London: Reprinted and sold by A. Moor..., 1730. "Printed at Dublin."-T.p.*

本書は、イギリス政府を糾弾する数々の匿名公開状からなる。ドレイピアとはdraper（反物屋）の異綴であり、この関係連想をもつ人名を選ぶことによって、スウィフトは自らを一市民商人に擬して政府攻撃に乗り出したものとみられる。その発端は、アイルランドに対するイギリス政府の抑圧的な貨幣製造制度にあった。アイルランドには固有の造幣局がなく、イギリス国王が私人に特許状を与え、それによって製造された貨幣がアイルランドに持ち込まれていた。ウィリアム・ウッド (Wood, William, 1671-1730) という鉄商人はこの特許状によって悪貨を製造したため、たちまちアイルランド側からの反対世論が沸き起こった。このさなか、1724年にダブリンで一冊のパンフレットが出版される。これが『ドレイピア書簡』の第一号であり、1724年だけでも7号を数えた(数え方については諸説がある)。彼の意図は貨幣問題にとどまるものではなく、長期にわたる植民地的収奪下にあったアイルランド国民の独立心を奮い立たせ、彼らの自由への意識を覚醒させることにあった。彼の筆は大変な反響を呼び起こし、一躍「アイルランド愛国者」として歓声を浴びることになったのである。



『ドレイピア書簡集』

ケイムズ卿 Kames, Henry Home, lord, 1696-1782

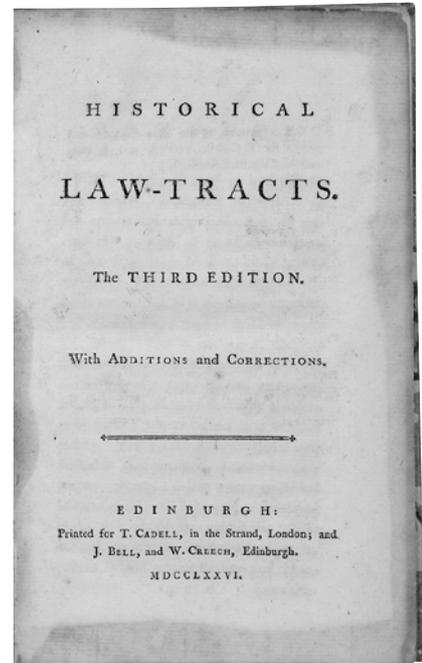
スコットランド啓蒙を代表する法曹知識人。スコットランドのベリック州に生まれる。1723年にスコットランド弁護士会に入会する。しかし、ジャコバイトの嫌疑をかけられたことや、有力なパトロンを持たなかったこともあって出世が遅れた。1752年にスコットランド高等民事裁判所常任判事となり、以後ケイムズ卿を名乗るようになる。哲学では、ヒューム (Hume, David, 1711-1776) の懐疑論に対抗し、その道徳論と認識論を批判した『道徳と自然宗教の原理』(展示図書(37)の解題参照)を著し、その議論はリード (Reid, Thomas, 1710-1796) のコモン・センス哲学に継

承されていった。そのほか、『法史論集』 (*Historical law-tracts*, 1758)、『衡平法の原理』 (*Principles of equity*, 1760) といった法学関係の著作だけでなく、美学に関する『批評の原理』 (*Elements of criticism*, 1762)、『人類史素描』 (解題参照) など多くの著作を著した。スマスに修辞学・文学および法学の公開講義の機会を与えてひきたてるなど、スコットランド啓蒙思想家の庇護者的な役割を果たした。また、限嗣封土権の廃止を訴えたり、リネン産業振興や農業改良運動に積極的に関与したりするなど、スコットランドの近代化に尽力した。

(18) 『法史論集』 第3版 1776

*Historical law-tracts*. The third edition. With additions and corrections. Edinburgh: Printed for T. Cadell; and J. Bell and W. Creech, 1776.

限嗣封土権について、それがいかに時代錯誤的なものであるかを歴史変動を通じて明らかにして、人間と社会にとってその不合理性を鋭く問題にした。イングランド法とスコットランド法の統一をめざすもので、1758年に初版が2巻本で同じ出版社から発行され、1792年の4版まで発行された。スマスやベンサム (Bentham, Jeremy, 1748-1832) のほか、アメリカのジェファスン (Jefferson, Thomas, 1743-1826) やフランクリン (Franklin, Benjamin, 1706-1790) などにも広く読まれた。1766年にはフランス語の部分訳ではあるが、『*Essais historiques sur les loix*』のタイトルで出版されている。

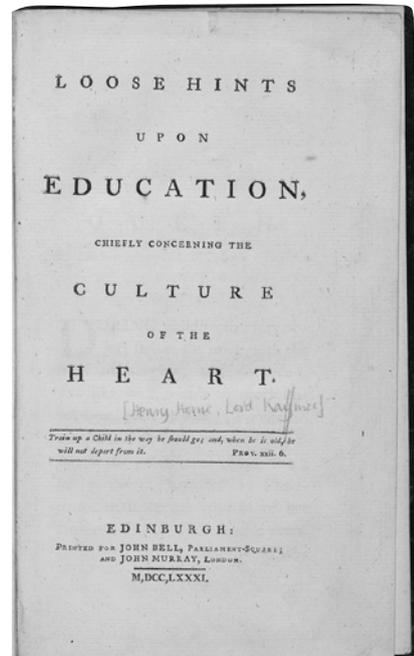


『法史論集』

(19) 『教育試論：特に心情の薫陶について』 1781

*Loose hints upon education, chiefly concerning the culture of the heart*. Edinburgh: Printed for John Bell, and John Murray, 1781.

ケイムズ卿が子供 (特に女子の) 教育に対する重要性を訴えた著作である。パブリック・スクールに批判的だった彼は、子供の教育には制度的な教育方法ではなく、個別的な教育をより重視する態度を示している。

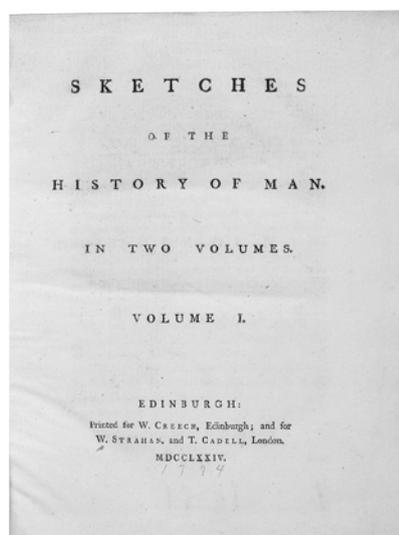


『教育試論：特に心情の薫陶について』

(20) 『人類史素描』 全2巻 1774

*Sketches of the history of man.* In two volumes.  
Edinburgh: Printed for W. Creech, and for W. Strahan  
and T. Cadell, 1774.

人類史を4つの段階に区別し、各段階において食料調達能力と人口増加に関して議論が展開される。特に食料欠乏の危機感が人間の創意工夫を生み出し、これが次の段階への移行を促進すると主張する。



『人類史素描』

デイヴィッド・フォーダイス **Fordyce, David, 1711-1751**

18世紀スコットランドの道徳哲学者。アバディーン近郊のブロードフォードに生まれ、アバディーン大学マーシャル・カレッジで哲学、数学、神学を修め、1742年に母校のリージェントに就任。大陸旅行から戻る際、オランダ沿岸で船が沈み死亡。父親はアバディーン市長を務めたジョージ・フォーダイス (Fordyce, George, 1663-1733) で、デイヴィッドは次男。

マーシャル・カレッジのリージェントというポストは、道徳哲学のほか、自然哲学、年代学、ギリシア・ローマの古典学、力学、光学、天文学に至るまで広範に扱うもので、フォーダイスは講義によって学識の深さを示した。著作家としては、『教育に関する対話』 (*Dialogues concerning education*, 1745) で名声を確立した。その後、ロンドンの出版者ロバート・ドズリー (Dodsley, Robert, 1704-1764) の勧めで、道徳哲学に関する論考を『プリセプター』 (*Preceptor*, 1748) に寄稿し、これは死後に『道徳哲学要論』 (*The elements of moral philosophy*, 1754) として出版された。

『教育に関する対話』『道徳哲学原理』とも18世紀を通じてよく読まれ、フォーダイスはスコットランド啓蒙の先駆といわれる。

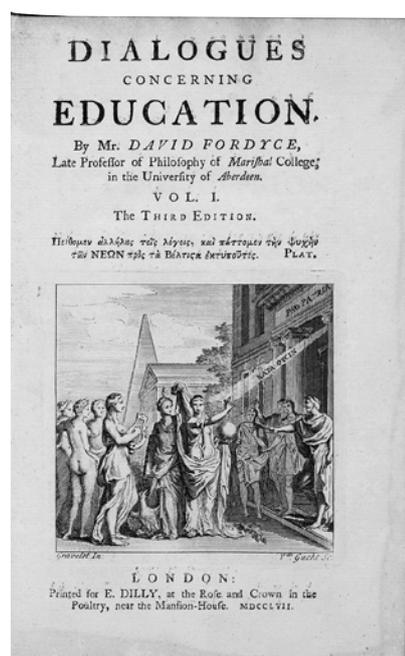
(21) 『教育に関する対話』 第3版 全2巻 1757

*Dialogues concerning education.* 3rd ed. London:  
Printed for E. Dilly, 1757. 2 vols.

初版は匿名で、第一巻は1745年、第二巻は1748年に発表された。出版者および印刷業者についても記載がないものの、ロバート・ドズリーがこれに関わっていたと推測されている。

物語は、語り手が架空の教育・学術施設「アカデミー」に到着するところから始まり、そこで出会った識者たちの教育に関する20の対話から構成される。扱われたテーマには、「マナーの洗練」「古代と現代の教育」「教育に関する誤り」「神の存在と摂理」「教育の起源・実践・目的」「女子の教育」「夢」「教育による精神の治療」などがある。

啓蒙思想が教育にもたらす効果を描いた点で、



『教育に関する対話』

ジャン＝ジャック・ルソー (Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778) 『エミール』 (Émile, ou, De l'éducation, 1762) の先駆とみなす見解もあるが、教育に関する様々な主題をひとりの人間の成長過程に織り込んで論じるルソーの作風との間には隔たりが認められよう。ちなみに、フォードイスの採用した対話形式は当時広く受け入れられていたが、スコットランドの事情は異なっていたといわれる。

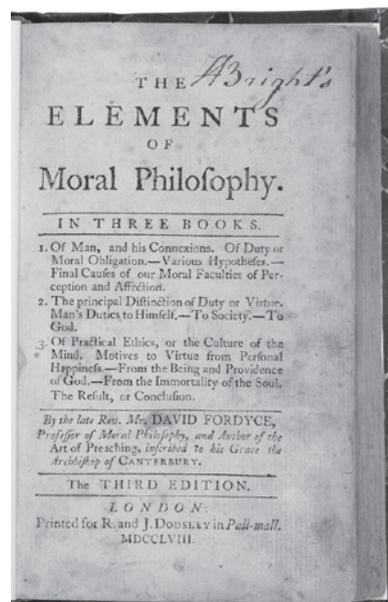
(22) 『道徳哲学要論』 第3版 全3巻 1758

*The elements of moral philosophy. In three books. 1. Of man, and his connexions. Of duty or moral obligation.— Various hypotheses. —Final causes of our moral faculties of perception and affection. 2. The principal distinction of duty or virtue. Man's duties to himself. —To society.—To god. 3. Of practical ethics, or the culture of the mind. Motives to virtue from personal happiness. —From the being and providence of god. —From the immortality of the soul. The result, or conclusion. The third edition. London: Printed for R. and J. Dodsley, 1758.*

初版は1754年。ロバート・ドズリー編『プリセプター』に執筆した道徳哲学に関する論考を、死後に改めて出版したもの。同書は青少年の教育およびマナーの入門書で、読み書き・会話・幾何学・地理学・天文学・レトリック・詩・論理学・倫理学・商業・統治などの主題をそれぞれ別の著者が執筆した。うち、序論はイングランドの文学者で『英語辞典』(A dictionary of English language, 1755)を編纂したサミュエル・ジョンソン (Johnson, Samuel, 1709-1784) による。

道徳哲学は、義務論と徳論から論じられる。義務論では、自身に対する義務、社会に対する義務、神に対する義務の3つにわけ、徳論では、自身の幸福のために発揮する徳、神の存在と摂理のために発揮する徳、魂の不滅性から発揮する徳の3つを説いた。本書は『教育に関する対話』と並ぶフォードイスの代表作で、大変な好評を博した。

編集・翻訳・出版の分野で有名なウィリアム・スメリー (Smellie, William, 1740-1795) が『エンサイクロペディア・ブリタニカ』(Encyclopædia Britannica, 1771)の項目「道徳哲学、あるいは道徳」を執筆するに際し、『プリセプター』に掲載されたフォードイスの論考を活用したといわれている。



『道徳哲学要論』

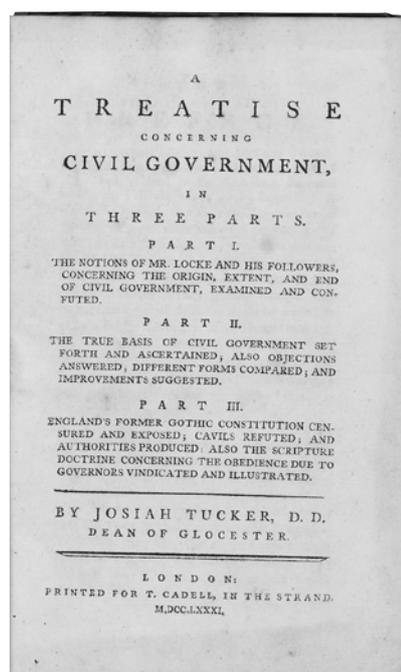
ジョサイア・タッカー Tucker, Josiah, 1712-1799

ウェールズのカーマーゼン生まれ。1733年、オクスフォード大学のセント・ジョーンズ・カレッジ入学、36年同校卒業。翌年、ブリストルのセント・ステイーヴンズ教会の副牧師となり、同じくブリストルのオール・セイントズ教会教区牧師などを経て、1758年にはグロスターの首席司祭となった。1740年代後半からの執筆活動は、ウィッグの立場から、政治・経済問題を論ずるものであった。彼の論説数は40以上に及び、スミスは彼の著作を多く所蔵していた。テュルゴ (Turgot, Anne-Robert-Jacques, baron de l'Aulne, 1727-1781) やヒューム (Hume, David, 1711-1776) と親しく文通したが、後者とは貨幣をめぐる論争になっている。リチャード・プライス (Price, Richard, 1723-1791) やプリーストリー (Priestley, Joseph, 1733-1804) といったロック (Locke, John, 1632-1704) の思想の継承者に対しては批判的であった。また、アメリカからロック主義が本国に逆流することを懸念して、植民地の分離独立を支持した。

(23) 『統治論』 1781

*A treatise concerning civil government, in three parts. Part I. The notions of Mr. Locke and his followers, concerning the origin, extent, and end of civil government, examined and confuted. Part II. The true basis of civil government set forth and ascertained; also objections answered; different forms compared, and improvements suggested. Part III. England's former gothic constitution censured and exposed; cavils refuted; and authorities produced: also the scripture doctrine concerning the obedience due to governors vindicated and illustrated.* London: Printed for T. Cadell, 1781.

本書は、タッカーの著書のなかで最も大きいものであり、スミスの蔵書に含まれていた。政治的急進主義に対するタッカーの批判は、バークの植民地論への批判の形で『バークへの手紙』(A letter to Edmund Burke, 1775)として現れていたが、彼のかねての意図は、政治的急進主義が理論的な拠り所としたロックの『統治論』(Two treatises of government, 1689)を批判し、保守主義の立場に立って、名誉革命の政治的理念を描き出そうとするものであった。論争的部分のみならず、積極的な歴史的叙述を含んだ本書によって、政治的急進主義に対抗する彼の理論的成熟を見て取ることができる。

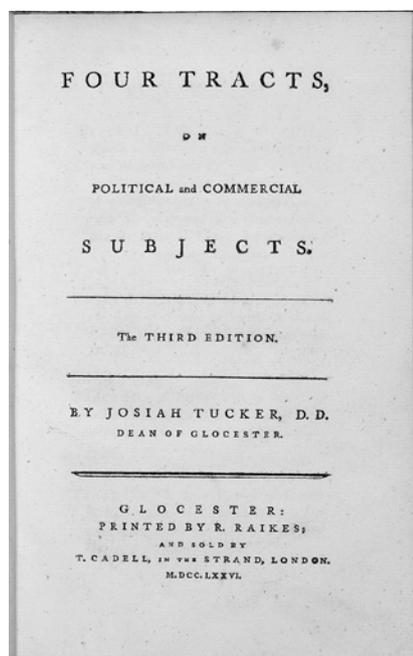


『統治論』

(24) 『政治経済問題四論』 第3版 1776

*Four tracts, on political and commercial subjects.* The third edition. Gloucester: Printed by R. Raikes, and sold by T. Cadell, 1776.

初版は『政治経済問題四論と二教説』(Four tracts, together with two sermons, on political and commercial subjects, 1774)である。1750年代後半から各論説が別々に発表され、後に一冊にまとめられた。第2版と第3版はこのうちの「二教説」が除外されたが、後者には1775年発表の論説が「第五論説」として加えられている。このなかで「第一論説」は経済理論であり、ヒュームの機械論的貨幣数量説および貿易理論を批判しつつ、保護主義的重商主義を脱却した自由貿易論を展開している。この「第一論説」は、北アメリカ植民地放棄を断言した「第四論説」までをまとめて1冊にする際、その理論的根拠としての意味をもつことになる。



『政治経済問題四論』

## ギヨーム＝トマ・レーナル Raynal, Guillaume-Thomas, 1713-1796

フランスの歴史家、哲学者。イエズス会のコレージュで学び、その後イエズス会に入会するが、1747年ごろ突然脱会し、パリへ出る。パリで説教師として生活しながら、一方で文芸ジャーナリストとしても活動した。『総督職の歴史』(L'histoire du stadhoudérat, 1747)、『イギリス議会史』(L'histoire du parlement d'Angleterre, 1748)を出版し、1750-1754年には『メルキュール・ド・フランス』(Mercure de France)の執筆、編集にたずさわり、ジャーナリズムの世界での地位を確立した。レーナルのもっとも重要な著作は『両インド史』(Histoire philosophique et politique, des établissements & du commerce des Européens dans les deux Indes, 1770)である。哲学者で百科全書編集者のデイドロ(Diderot, Denis, 1713-1784)の協力により著されたこの大著は、非常に評判となり大成功をおさめたが、教会や王制への辛辣な批判を含む内容のため、国外への逃亡生活を余儀なくされた。1789年には全国三部会議員に選出されたが、高齢を理由に辞職した。1791年には国民議会にあてた書簡のなかで、急進的政治を断固批判した。

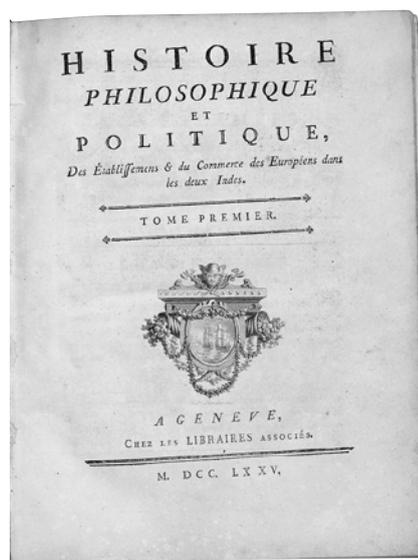
- (25) 『両インド史 (両インドにおけるヨーロッパ人の植民と貿易の哲学的・政治的歴史)』 フランス語版 第2版 全3巻 1775

*Histoire philosophique et politique, des établissements & du commerce des Européens dans les deux Indes.* A Genève, Chez les Libraires associés, 1775. 3 vols.

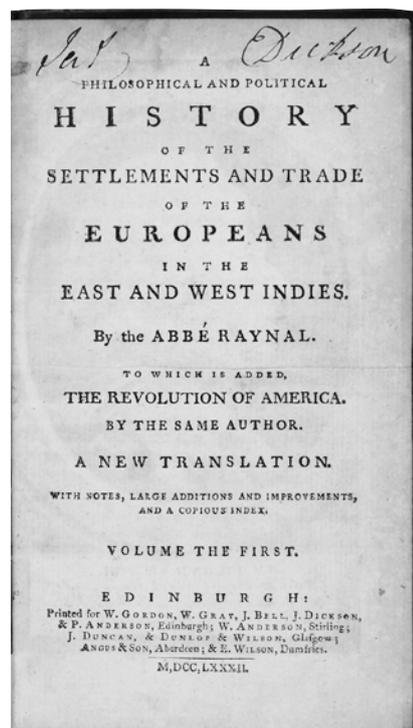
『両インド史』は、デイドロの協力を得て執筆されたレーナルの主著。喜望峰より東、日本にまで至る「東インド」と、喜望峰より西、アフリカ西海岸と南北アメリカ全域を含む「西インド」とヨーロッパとの関係を記述する国際関係史である。地理上の発見を起点とする近代ヨーロッパの対外進出の問題を、ヨーロッパを中心とする国際政治上の力関係の推移との相互規定をしていく中で、これまで対象とならなかった地域をとりあげ、網羅的かつ批判的に叙述したものである。キリスト教批判や専制君主制批判をふんだんにちりばめ、重商主義と植民地政策を非難したため、初版(1770)は断罪され、廃棄処分となったが、それにもかかわらず、弾圧をかいくぐって一大ベストセラーとなった。第2版(1774)は初版にさらに加筆修正を行い、アンシャン・レジムに対してさらに挑戦的なものとなっている。また、初版と第2版は匿名の出版であったが、第2版にはレーナルの肖像画が名入りで巻頭を飾っている。第2版も発売とほぼ同時に発禁処分とされた。水田文庫収蔵のものは、1775年にジュネーヴで再版されたもの。

- (26) 『両インド史』 英語版 全6巻 1782

*A philosophical and political history of the settlements and trade of the Europeans in the East and West Indies. To which is added, the revolution of*



『両インド史』 第2版 ジュネーヴ版



『両インド史』 英語版

*America*. By the same author. A new translation. With notes, large additions and improvements, and a copious index. Edinburgh: Printed for W. Gordon, etc., 1782. 6 vols.

『両インド史』 フランス語版第2版を底本として1782年にエディンバラで出版された英訳書。アメリカ革命の状況を反映させたフランス語版第3版第18篇から抜粋された『アメリカ革命』(*The revolution of America*, 1781) が追加されている。水田文庫にはフランス語版第3版を底本とし、ロンドンで出版された英訳書(1788)も収蔵されている。

### トマス・シェリダン Sheridan, Thomas, 1719-1788

シェリダンは、アイルランドの俳優であり、ダブリンのロイヤル劇場支配人、雄弁術の教育者。ダブリンで生まれる。ウェストミンスター・スクールで学ぶためロンドンへ渡るが、父の金銭的な困難のために、ダブリンへ戻らざるを得なかった。1739年にトリニティ・カレッジを卒業し、1743年にシェイクスピアの『リチャード3世』で俳優としてデビューした。彼はすぐに人気者になり、アイルランドで最も有名な俳優になった。また、1740年代に劇場の支配人になった。1758年、彼は家族とともにイングランドに移り、雄弁術の教育者になった。

トマスと同名の父(Sheridan, Thomas, 1687-1738)は、スウィフト(Swift, Jonathan, 1667-1745)と親友で、トマスの名付け親であった。父トマスは、スウィフトと共著で、週刊の*The intelligencer* (1728-1729)を出版し、トマスは、スウィフトの死後、彼の全集を改訂出版し(*The works of the rev. Dr. Jonathan Swift... arranged, revised, and corrected, with notes, by Thomas Sheridan. A new edition. [With Sheridan's life of Swift.]*, 1784. 全17巻)、自ら、その第一巻でスウィフトの生涯について書いた。

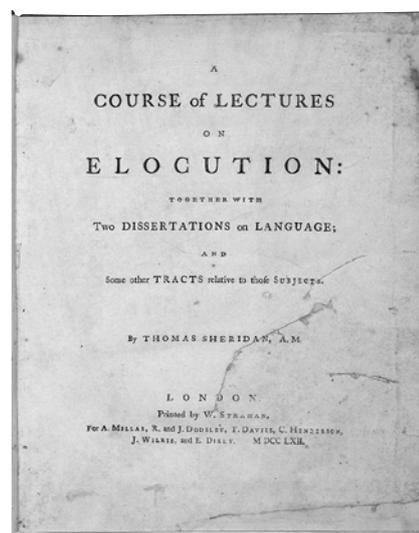
主著に、平易で恒久的な英語の標準的な発音を確立することを目的として書かれ、修辞学文典(A rhetorical grammar)を含む『総合英語辞典』全2巻(*A general dictionary of the English language. ... To which is prefixed a rhetorical grammar*, 1780)や『朗読術講義』(*Lectures on the art of reading*, 1775)がある。

1761年にシェリダンがエディンバラで話し言葉のイングランド語の公開連続講義に招聘されたことで、スコットランド人は、アイルランド人からイングランド語を学んでいると嘲笑された。イングランドとの合邦後、スコットランドではイングランド語を習得することが必要となっており、スコットランド人のアダム・スミスによるグラスゴウ大学での修辞学の講義が期待されたのである。

#### (27) 『雄弁術講座』 1762

*A course of lectures on elocution: together with two dissertations on language; and some other tracts relative to those subjects.* London, Printed by W. Strahan, For A. Millar, R. and J. Dodsley, T. Davies, C. Henderson, J. Wilkie, and E. Dilly, 1762.

シェリダンの最も有名な業績とみなされている。トーンの雄弁さが重要であることを彼は強調している。つまり、語の意味よりも語の発音を重視している。当時はそれほどに発音が重い課題であった。



『雄弁術講座』

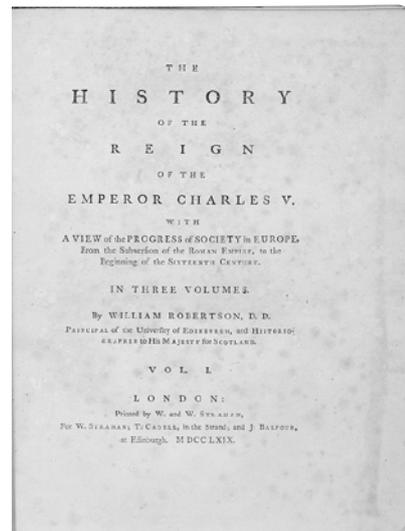
## ウィリアム・ロバートソン Robertson, William, 1721-1793

18世紀スコットランドの歴史家。リチャード・シャー (Sher, Richard B., 1948-) の研究によれば、スコットランド啓蒙思想の展開に重要な役割を果たしたとされる穏健派の中心人物の一人。ミドロージアのボーズウィックに生まれる。エディンバラ大学で神学を学ぶ。1744年、ハディントン長老会区のグラズムーア教区の牧師に任命される。1751年にスコットランド教会の教区牧師任命権に関する問題で名を上げたロバートソンは、1758年エディンバラのレディ・イエスター教会に赴任する。『スコットランドの歴史』(The history of Scotland, 1759) を出版し評判を得た彼は、ビュート卿 (Bute, John Stuart, 3rd earl of, 1713-1792) の支援のもと、1762年エディンバラ大学の学長に就任する。さらに翌年、スコットランド教会総会議長にも就任し、スコットランドにおける穏健派の代表者としての地位を確立した。彼は職務を遂行しながらも後に主著となる『カール五世治世史』(解題参照) を執筆し、1769年に出版した。しかし1778年から体調不良に陥り徐々に公務より退く。晩年になると体調を取り戻したため、エディンバラ大学の再建や自著の改訂に意欲的に取り組んだ。

### (28) 『カール五世治世史』 全3巻 1769

*The history of the reign of the Emperor Charles V. With a view of the progress of society in Europe, from the subversion of the Roman Empire, to the beginning of the sixteenth century. In three volumes. London: Printed by W. and W. Strahan, for W. Strahan; T. Cadell; and J. Balfour, 1769.*

歴史循環論を受容して、ヨーロッパを中心とした人類史を描く。ローマ共和制の確立までを第1革命、ローマ帝国崩壊までを第2革命として、それぞれの体制がなぜ崩壊したのか、古代と近代の文明社会＝市民社会は何が異なるのかを描いている。



『カール五世治世史』

## アダム・ファーガスン Ferguson, Adam, 1723-1816

1723年、スコットランドのパーズ州に長老派牧師の子として生まれ、セント・アンドルーズ大学およびエディンバラ大学で学んだ。従軍牧師の経験を経て、1759年にエディンバラ大学自然哲学教授、1764年に道徳哲学教授に就任し1785年まで務めた。スコットランド啓蒙を担う論客のひとりであり、1767年に発表した『市民社会史論』(An essay on the history of civil society) によって国内外で名声を博した。

道徳哲学講義に関しては、同時期にトマス・リード (Reid, Thomas, 1710-1796) が担当していたグラスゴウ大学より2倍近く多くの学生を集める人気ぶりであったといわれ、政治的には、名誉革命および合邦体制の支持、民兵制の擁護、アメリカ独立への反対という立場をとった。後年は大作『ローマ共和国盛衰史』(The history of the progress and termination of the Roman Republic, 1783) を執筆し、これの改訂に労力を惜しまなかった。

ファーガスンはスコットランド啓蒙の知識人のなかでは稀なハイランド出身者(首都エディンバラはローランド)で、ゲール語が堪能であったといわれる。

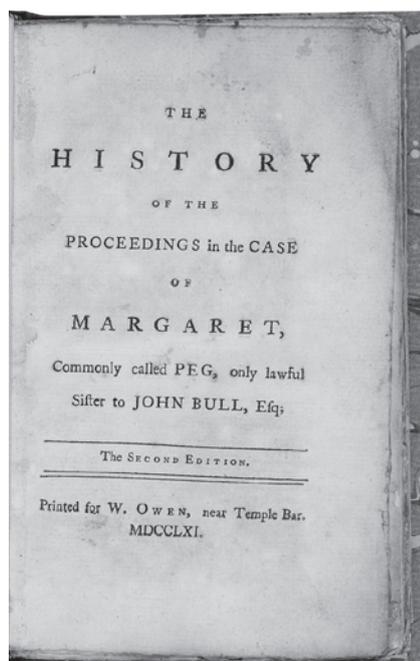
### (29) 『妹ペグ』 第2版 1761

*The history of the proceedings in the case of Margaret, commonly called Peg, only lawful sister to John Bull, esq. The second edition. [London], Printed for W. Owen, 1761.*

初版、第2版とも1761年出版。ジョン・アーバスノット (Arbuthnot, John, 1667-1735) 『ジョン・ブル物語』 (*The history of John Bull*, 1712) から着想を得て書かれた風刺作品。イングランドをジョン・ブルという人物に、スコットランドをその妹ペグとして擬人化する設定を引き継いだ。

アーバスノットとファーガスンでは、スコットランド合邦の説明が異なる。『ジョン・ブル物語』では、兄妹は不仲で、ジョンは財産の限嗣相続をするため同じ権利を有するペグと同居しようとしたと表現され、『妹ペグ』では、対立を避けてふたりが友好関係を維持する過程として描かれた。ファーガスンの作品では、以下のように語られる。

かつてジョンとペグは不仲で互いに別の法律家(国王)を雇っていたが、妹の法律家が兄のそれを兼ねるようになってから、ふたりの関係は改善された。次に、妹の会計事務所(スコットランド議会)を閉鎖しその使用人を兄の家に送り、兄妹の事務を兄の会計係(イングランド議会)と一緒に行うことになった。こうして名誉革命および合邦体制を支持するほか、フランスを象徴するルイス・バブーンの襲撃に対する備えとして民兵制度の必要が説かれた。



『妹ペグ』

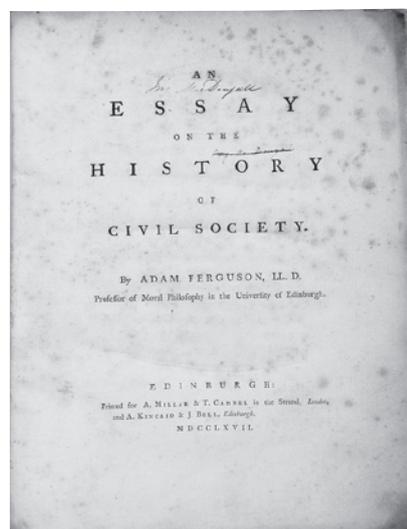
### (30) 『市民社会史論』 1767

*An essay on the history of civil society.* Edinburgh: Printed for A. Millar & T. Caddel, and A. Kincaid & J. Bell, 1767.

前政府状態から政治社会に移行する契機を「社会契約」に求めた作家たちの説明をフィクションとして論駁し、事実の収集に専念する博物学者の方法に倣い、人間および社会が野蛮状態から文明状態に移行する過程を叙述した代表作。著者の生存中に第7版まで数えるベスト・セラーとなった。外国語による初訳は1768年のドイツ語訳で、1791年にはイタリア語訳、1796年にはフランス語訳が出版された。

作品の構成は、1. 人間本性の一般的特質、2. 未開国民の歴史、3. 政策とアートの歴史、4. 市民的・商業的アートの進歩から生じる帰結、5. 諸国民の衰退、6. 墮落と政治的隷従となっている。

同作は国内外で好評を博し、当時の書評誌『マンスリー・レビュー』 (*The monthly review*) は、宗教と社会の関係について考察が十分でない点を指摘しつつも、ファーガスンが歴史的事実に基づき、人類と社会の壮大な記述を完成させた功績をたたえている。



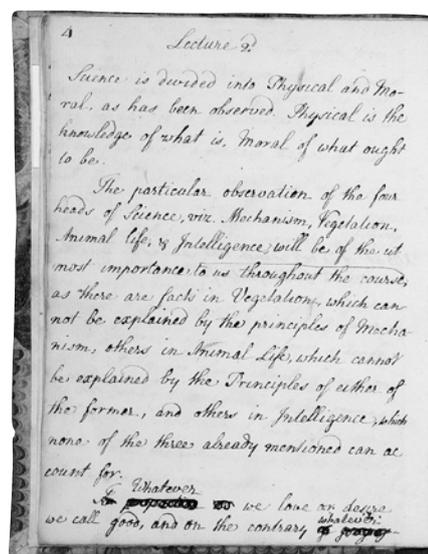
『市民社会史論』

(31) 『ファーガスン道徳哲学講義ノート』 手稿本 全2巻 1767-1776 ?

*Adam Ferguson Lectures. Manuscripts in 2 vols. n.d. 525 written sheets and 30 blanc.*

エディンバラ大学で行われた道徳哲学講義の受講ノートで、ロナルド・ミーク (Meek, Ronald L., 1917-1978) のメモによると、作成時期はジェイムズ・ステュアート (Steuart, James, Sir, 1712-1780) 『政治経済原理』 (*An inquiry into the principles of political oecconomy*, 1767) とアダム・スミス『国富論』(1776) の間と推定されている。同大学図書館所蔵のファーガスン自筆の講義ノート (1775-1785) によると、講義は11月に始まって翌年4月に終了し、この6か月間で『道徳哲学綱要』(1769) に書かれた内容を学生たちに教えていた。

構成は、1. 人間の自然誌、2. 精神に関する理論、3. 神に関する知識、4. 道徳法則とその適用、5. 法学、6. 決議論、7. 政治学となっている。政治学は、国家の資源に関する「パブリック・エコノミー」と、政治制度に関する「ポリティカル・ロー」に分かれるが、受講ノートの最終頁は第87講義で、ポリティカル・ローの部分欠けている。自筆講義ノート、受講ノートともに、「私」「昨日」等の語が登場することから、ファーガスンは読み上げ原稿として講義ノートを用意し、学生はそれを聞いて書き留めたものと思われる。前者は訂正箇所も多いが、後者は落ち着いたきれいな文字で清書されている。



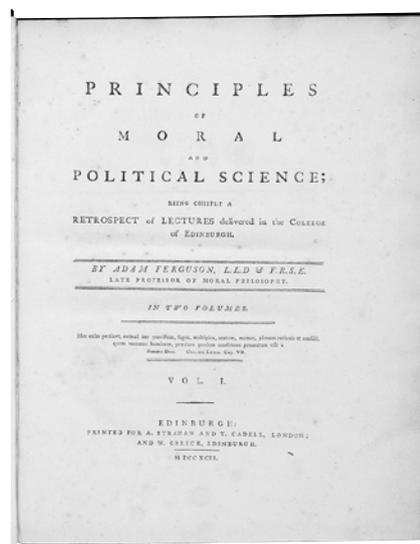
『ファーガスン道徳哲学講義ノート』

(32) 『道徳・政治科学原理』 全2巻 1792

*Principles of moral and political science; being chiefly a retrospect of lectures delivered in the College of Edinburgh.* In two volumes. Edinburgh: Printed for A. Strahan and T. Cadell, and W. Creech, 1792.

エディンバラ大学で行った道徳哲学講義の回顧録として、退任後に発表された著作。1769年にファーガスンは受講生に向けて『道徳哲学綱要』 (*Institutes of moral philosophy*, 1769) を出版しているが、それから20年以上も経て、2巻にわたって出版された本作は、彼の道徳哲学体系の集成と見なすことができる。本人は『道徳・政治科学原理』の前書きで、『綱要』との差異に関し、自身の道徳哲学講義は『綱要』出版以後も徐々に変化したこと、本作は広く一般向けの著作として教育的配慮を取り除いたことに言及している。

道徳の基本法則を人類愛に求めるという道徳哲学体系の要に変更はないが、人間の特質に関する記述に「存在の秩序」概念と「進歩の法則」が加えられたことは、意義深い。このふたつの考え方によると、自然界は鉱物、植物、動物から構成され、この3者のグラデーションのなか、人間は唯一知性を有し進歩する存在として最上位に位置すると理解される。



『道徳・政治科学原理』

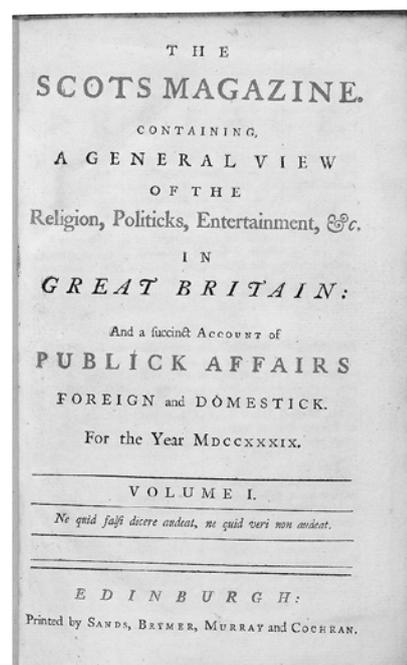
## スコッツ・マガジン The Scots Magazine

(33) 『スコッツ・マガジン』 1-65巻 1739-1803

*The Scots magazine. Containing, a general view of the religion, politicks, entertainment, &c. in Great Britain: and a succinct account of publick affairs foreign and domestick.* Edinburgh: Printed by Sands, Brymer, Murray and Cochran. Vol. 1-65 (1739-1803).

スコットランドで最古の文化総合誌。Gentleman's magazine(1731-1907)やそのライバル誌『ロンドン雑誌』(London magazine, 1732-1785)を範にとり、エディンバラで1739年に月刊で創刊される。Sands, Murray, and Cochran社の校正担当であったスメリ(Smellie, William, 1740-1795)が経営にあたる。1804年に、『エディンバラ評論』(Edinburgh review)を出版したスコットランドの出版家、書籍商のコンスタブル(Constable, Archibold, 1774-1827)が買収し、The Scots magazine, and Edinburgh literary miscellanyとして発行する。巻次は継承し、66-79巻(1804-1817)まで続く。1817年8月からはThe Scots magazine, and literary miscellany: a new series of the Scots magazineとして1-18巻(1826)まで発行されて休刊となる。

刊行理由として、Gentleman's magazineやLondon magazineはその発行地ロンドンがスコットランドから離れていることもあり、スコットランドの情報が少ないこと、政治論争に対してより偏見のない見解を持つ読者層を対象とすること、ヨーロッパの出来事を掲載すること、より早くより安価に提供することなどが序文に述べられている。



『スコッツ・マガジン』

### Ⅲ. アダム・スミス思想体系の形成

17世紀の大陸自然法学は18世紀にはスコットランド諸大学に取り入れられ、グラスゴウ大学ではカーマイケルとハチスンの「道徳哲学」講座において新たな展開が模索される。ハチスンの講義を受け、後にその講座を受け継ぐことになるアダム・スミスの思想形成もこの模索の延長線上に位置するが、主要なテーマは社会秩序形成における人間観の提示であった。フランスではヴォルテールとルソー、ブリテンではマンデヴィルとハチスンがそれぞれ対照的な人間像を提示していた。そのハチスンに『人間本性論』の道徳論草稿を送付したヒュームは、「徳性を支持する熱意がない」と批判されるが、自分は徳性を描写する画家ではなく、精神を分析する解剖学者の立場をとるのだと反論していた。

恩師ハチスンから「有徳（慈愛）の倫理学」を学んだスミスは、親友ヒュームの斬新な方法に惹かれつつ、後にパトロンとなるケイムズの『道徳・自然宗教論』での問題提起に接したあと、『道徳感情論』の冒頭で「哀れみ」と「同感」とを対比する。スミスは後者をコミュニケーション原理として提示し、状況に応じてのその多様な作動の仕方を分析することにより、「自己愛」から秩序を見いだそうとするヴォルテール、マンデヴィル、ヒュームの立場を継承することになった。社会での他人の同感を獲得したいという感情は、信じられたいという欲求を経て、説得本能のレベルにまで押し進められ、やがて『国富論』の「交換性向」として展開されることになるが、このコミュニケーション原理の提示は、スミスの学者としての出発点である「エディンバラ公開講義」での主要テーマでもあった。

この公開講義で提示された文体論（およびその展開としての性格論）は、その後の新しいレトリックの基盤となっただけでなく、『道徳感情論』最終版での実践道徳系に利用され、分析（解剖）を踏まえた次元での新たな「描写」としての「徳性の性格」論として生かされることになる。（篠原 久）

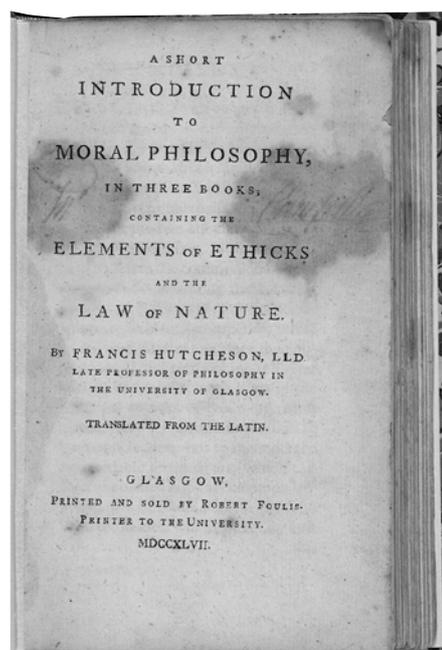
#### フランシス・ハチスン Hutcheson, Francis, 1694-1746

北アイルランドのダウン地区ドラマリグに生まれ、グラスゴウ大学で神学を学ぶ。その後、生地に戻り、ダブリンの非国教徒学校の校長を経て、1729年に、グラスゴウ大学道徳哲学教授となる。1737年から39年頃に著された『道徳哲学体系』（*A system of moral philosophy*, 1755）は死後出版され、1747年の『道徳哲学序説』はその縮約版である。彼の前任者であったカーマイケル（Carmichael, Gershom, 1672-1729）がオランダの法学者グロティウス（Grotius, Hugo, 1583-1645）やドイツの法学者プーフェンドルフ（Pufendorf, Samuel, Freiherr von, 1632-1694）らの大陸自然法を導入しており、ハチスンも彼らから多くを学びつつ、自身の道徳哲学を構想した。ハチスンはシャーフツベリ（Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper, 3rd earl of, 1671-1713）から受けた影響も大きく、なかでも行為の道徳的動機を感受しうるものとして「モラル・センス」という概念を継承し、それを独自に展開して人間に内在する仁愛性向を強調した。彼の法学には萌芽的ながら経済分析が含まれており、スミスの経済思想のひとつの源泉ともなった。上記以外の著作としては、『美と徳の観念の起源』（*An inquiry into the original of our ideas of beauty and virtue*, 1725）や『情念の本性と働き』（*An essay on the nature and conduct of the passions and affections*, 1728）などがある。

#### (34) 『道徳哲学序説』 英語版 1747

*A short introduction to moral philosophy, in three books; containing the elements of ethicks and the law of nature.* Translated from the Latin. Glasgow, Printed and sold by Robert Foulis, 1747.

ハチスンの道徳哲学のすべては、グラスゴウ大学の同僚であったウィリアム・リーチマン (Leechman, William, 1706-1785) による序文をつけて息子の手で死後出版された『道徳哲学体系』(A system of moral philosophy, 1755) に示されている。その縮約版である本書は倫理学、自然法学、政治学(経済学)の三部からなり、学生に向けられた序の部分には、自身の思想的源泉としてキケロ、アリストテレス、そしてプーフェンドルフに多くを負っていることが示されている。午前の英語によるパブリック(基礎的な必修の)の講義が『道徳哲学体系』のもととなったが、午後のプライベート(上級の)の講義はラテン語で行なわれており、これが『道徳哲学要綱』(Philosophiæ moralis institutio compendiaria, 1742)に結実したとみられる。



『道徳哲学序説』

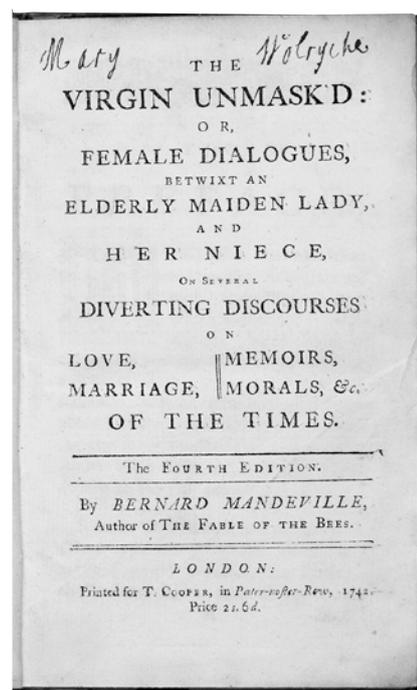
### バーナード・マンデヴィル Mandeville, Bernard de, 1670-1733

オランダのロッテルダムに生まれる。レイデン大学で医学と哲学を学び、1691年に卒業し医者となる。英語を学ぶためにロンドンへ渡り、イギリスに帰化した。主著『蜂の寓話』(The fable of the bees: or, Private vices, publick benefits, I: 1714 II: 1729)は、「個人の悪徳は、巧みな管理により公益に変えられる」という逆説的主張によって、当時のイギリス社会を風刺したものである。人間の利己心に基づく悪徳がなくなれば社会発展もまたなくなるという彼の市民社会論は、スミスの経済思想にも影響を及ぼした。しかし、富者による奢侈的消費の奨励と儉約の否定を軸とした有効需要論を採る彼の立場は、スミスの資本蓄積・再生産論とは明らかに異なっている。

#### (35) 『仮面を脱いだ乙女、または中年過ぎの未婚女性とその姪との対話』 第4版 1742

*The virgin unmasked: or, Female dialogues, betwixt an elderly maiden lady and her niece, on several diverting discourses on love, marriage, memoirs, morals, &c. of the times. The fourth edition. London: Printed for T. Cooper, 1742.*

初版は1709年。マンデヴィルがはじめて書いた対話形式の書物であり、二人の女性が登場する八つの対話からなる。前半部分では当時の愛、結婚、道徳などが論じられ、人間行動の社会心理学的分析が行われている。また徳と悪徳というのは、時と場所により異なる慣習に従って決まるという道徳の相対性がすでに主張されてもいる。後半部分は政治論であり、イギリス・フランス・オランダの政治・経済比較論が展開されている。



『仮面を脱いだ乙女、または中年過ぎの未婚女性とその姪との対話』

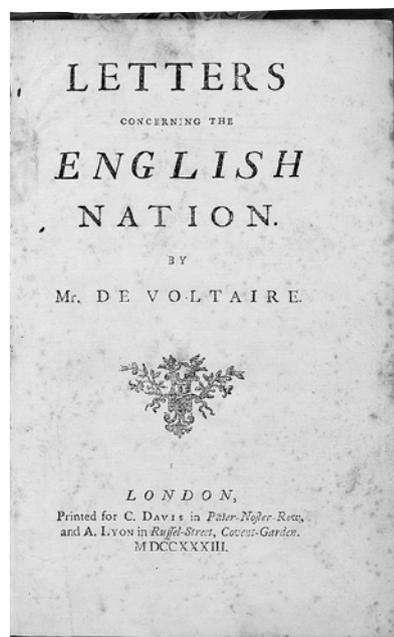
## ヴォルテール Voltaire, 1694-1778

フランス啓蒙思想を代表する文学者、思想家。本名はFrançois-Marie Arouet、ヴォルテールは名  
字Arouetのアナグラム(つづり字の入れ替え)といわれている。作品は戯曲、詩、歴史、小説、批評、  
科学、哲学と多方面であり、また生涯に4万通もの手紙を書いたとされ、プレイヤード版には15284  
通が収録されている。合理主義的で機知に富んだジャーナリスティックな感覚がいかにフランス  
的といえよう。若いころは摂政政府への風刺や貴族との衝突から一度ならずバスティーユに送り込  
まれる。1760年代からは、今回展示されているカラス事件 (p.37-41参照) をはじめとする具体的  
な冤罪事件に関与することで、宗教的な狂信にたいする寛容の主張をおこない、若きベッカリー  
ア (Beccaria, Cesare Bonesana, 1738-1794) 等の刑法制度改革を後押しした点も忘れないようにし  
たい。死後、フランス革命期の1791年に偉人を祭るパンテオン入りする。なお、小説『カンディー  
ド』 (*Candide ou l'optimisme*, 1759) は20世紀アメリカの作曲家バーンスタイン (Bernstein, Leonard,  
1918-1990) によりミュージカル化されている。

### (36) 『イギリス便り』 英語版 1733

*Letters concerning the English nation.* London, Printed for C. Davis and A. Lyon, 1733.

この書物は、ヴォルテールが貴族との争いでバスティーユに「投獄」されたあと、言わ  
ば、ほとぼりの冷めるまでという意味もあって、1726年から1728年にかけてイギリスに滞  
在したときのことをもとに書かれた。フランス語版の正式なタイトルは『哲学書簡 (*Lettres  
philosophiques*)』という。『イギリス便り』の名称は、フランス語版より1年早く、1733年に  
ロンドンで出版された、この英語版による。当時、書簡体の本が論争的な内容をもつ例とし  
てはモンテスキューの『ペルシア人の手紙』 (*Lettres persanes*, 1721) があるが、本書もフラン  
スの既存の権威をイギリスの視点から風刺批判して  
いる。その内容は宗教、政治、哲学、科学、文学等、  
多岐にわたるが、カラス事件との関係でいえば、主  
にクエーカー教徒などの諸宗派を取り上げて宗教的  
寛容を主張している部分が重要であろう。とりわけ、  
第5信では「イギリス人というのは、彼の好みの道を通  
って天国に行く」ことを冒頭に述べ、第6信末尾  
では「イギリスにひとつの宗教しかなかったなら専  
制は恐ろしく、ふたつなら互いにのどを切りあうこ  
とになるが、30もあるので幸い平和にくらしてい  
る」と記され、この箇所はスミス『国富論』第5編第  
1章にも同じようなフレーズで登場している。なお、  
本資料には、パスカル (Pascal, Blaise, 1623-1662) の  
『パンセ』 (*Pensées*, 1670) について述べた最後の第25  
信は収録されておらず、『スウェーデン王カール十二  
世の歴史』 (*Histoire de Charles XII*, 1730) の中で取り  
上げられていたハンブルク市の焚書をめぐるヴォル  
テールの短文がある。



『イギリス便り』

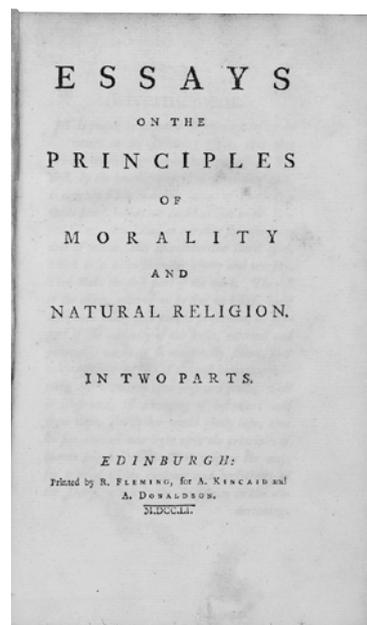
## ケイムズ卿 Kames, Henry Home, lord, 1696-1782

ケイムズ卿についての解説は本図録p.18参照

### (37) 『道徳と自然宗教の原理』 1751

*Essays on the principles of morality and natural religion.*  
In two parts. Edinburgh: Printed by R. Fleming, for A.  
Kincaid and Donaldson, 1751.

本著は匿名で出版され、1758年と1779年に改訂された。著者は「本書の主題は人間である」と述べる。道徳の原理とは、人間の本质である行動諸原理（欲望・情念・意向）をモラル・センスが統制するという構造であり、自然宗教とは、人間の自然の創造者の存在を確認する可能性が社会の文明化によって高まって行くに従い、自然の意図に基づく道徳的世界において、道徳的に責任ある存在として人間が社会生活を営んでいくことができることである、と述べている。



『道徳と自然宗教の原理』

## デイヴィッド・ヒューム Hume, David, 1711-1776

スコットランドのペリク州のナインウェルズ生まれ。1723年にエディンバラ大学に入学するが、当時の学生の大半がそうであったように、ヒュームも古典的教養を身に付けた後に大学を去った。故郷に帰った彼は、思想や文芸の書を大いに読むなかで心身症を患ってしまう。この時期のロック（Locke, John, 1632-1704）やクラーク（Clarke, Samuel, 1675-1729）の哲学の研究は、神概念への疑念を生じさせ因果律批判へと導くことになる。20歳の頃には心身の状態も好転し、1734年の春に、有力な砂糖商人への紹介状を持ってブリストルへ向かう。だが彼の商業生活は長続きしなかった。数ヶ月の後フランスへ渡り、ここで『人間本性論』（*A treatise of human nature*, 1739-1740）の執筆にいそしんだ。1739年にはその最初の二篇を世に送り出したが、自身で「印刷所から死産した」というほど当時の人々からは注目されなかった。その後の『道徳・政治論集』（*Essays, moral and political*, 1741-1742）や『政治（経済）論集』（*Political discourses*, 1752）は版を重ねたため、彼は『人間本性論』を解体再編しながら再び世に問うた。一方、歴史家としてのヒュームの名声を不動のものにしたのは、1754年から公刊された『イングランド史』全6巻である。

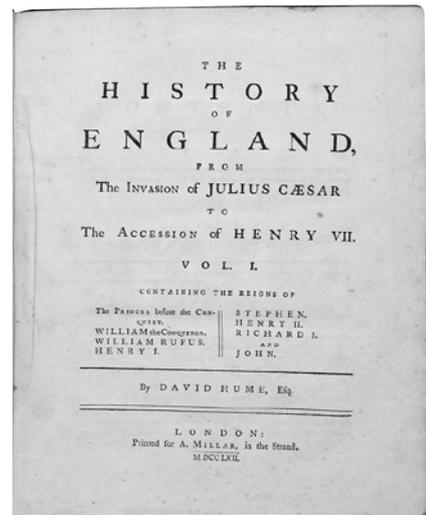
ヒュームは『人間本性論』によって、無神論者との批判を受けたため、エディンバラ大学にもグラスゴウ大学にも職を得ることができなかった。エディンバラ弁護士協会図書館長や駐フランス大使の秘書、国務次官などを務めた後、余生はエディンバラで過ごした。彼はスコットランド啓蒙の代表者と称されると同時に、イギリス経験論の代表者とも称される。哲学的には因果関係の客観性を否定し、懐疑論の立場をとった。ヒュームの同感論はスミスに受け継がれるが、正義論はスミスの批判を受けることになる。

### (38) 『イングランド史』 第一巻・第二巻 1762

*The history of England, from the invasion of Julius Cæsar to the accession of Henry VII.* London: Printed for A. Millar, 1762. 2 vols. Contents: Vol. I. Containing the reign of the princes before the Conquest. William the Conqueror. William Rufus. Henry I. Stephen. Henry II. Richard I. and John. Vol. II. Containing the reigns of Henry III. Edward I. Edward II. Edward III. Richard II. Henry IV. Henry V. Henry VI. Edward IV. Edward V. and Richard III.

『イングランド史』は、対象とする時代を遡りながら公刊された。1754年、1757年に公刊さ

れたものは、6巻本のうち第五巻と第六巻に相当し、内容的には17世紀史である。次いで1759年にテューダー王政を扱う2巻本（第三巻と四巻に相当）が、1762年に『イングランド史：ユリウス・カエサルの侵入からヘンリ七世の即位まで』（第一巻と二巻に相当）がそれぞれ公刊された。本書は、その最後のものにあたる。本書の末尾にはそれまでの記述とは区別されてヒューム自身によって小括が与えられており、そこには自由論を含む彼の総合的な歴史理解が示されている。



『イングランド史』

### アダム・スミス Smith, Adam, 1723-1790

スコットランドの道徳哲学者、政治経済学者。スコットランドのカーコーディで、関税監督官の次男として生まれる。1737年にグラスゴウ大学に入学し、道徳哲学教授ハチスン（Hutcheson, Francis, 1694-1746）の影響を受ける。1740年にオクスフォード大学に留学するが、大学の学問的沈滞に失望して、1746年に帰郷する。スコットランドの法律家ケイムズ卿（Kames, Henry Home, lord, 1696-1782）にエディンバラで修辞学・文学などの公開講演をする機会を与えられ、その成功によって母校の論理学教授に招聘された。翌年、道徳哲学講座に転じてからは、やがて『道徳感情論』（解題参照）に結晶する道徳哲学の本論のほかに、法学、修辞学・文学、天文学史の講義を毎年続けたようであるが、1763年末には政治家タウンゼンド（Townshend, Charles, 1725-1767）の要請により、彼が後見するバクルー侯（Scott, Henry, 3rd duke of Buccleuch and 5th duke of Queensberry, 1746-1812）の大陸旅行に付き添うために、大学を辞職することになる。そのとき限られた時間で行った法学の最終講義が、LJB（法学講義Bノート）手稿として残されている。大陸旅行中最も長く滞在したトゥルーズでは、カラス事件（p.37を参照）の名誉回復判決に出会い、ジュネーヴではその運動を指導した哲学者ヴォルテール（Voltaire, 1694-1778）に敬意を表することができた。かれはルソーとともに、現存する思想家でスミスが最も尊敬する人であった。パリでは、経済学者のケネー（Quesnay, François, 1694-1774）や唯物論哲学者のエルヴェシウス（Helvétius, 1715-1771）、ドルバック（Holbach, Paul Henri Thiry, baron d', 1723-1789）らと会って親交を結び、1766年に帰国した後は、『国富論』（1776）の執筆に専念する。

1778年には、スコットランド関税委員に任命されて住居をエディンバラに移し、著書の改定と彼なりの社交に勤めた。『道徳感情論』の最終第6版は初版の倍近い2巻本になったが、スミスは初版で約束したように「統治の一般理論」を書く努力を続けたいと書きのこして死んだ。

『国富論』（1776）はスミスにとっては、「統治の一般理論」の一部分であって、『道徳感情論』と並ぶ主著ではなかったのだが、世評はほとんど全く逆であった。

主著に『道徳感情論』『国富論』、遺稿集の『哲学論文集』（*Essays on philosophical subjects*, 1795）があるほか、初期『エディンバラ評論』（*Edinburgh review*, 1755-1756）への寄稿文があり、また、修辞学・文学講義や法学講義の学生による講義ノートが残されている。

スミスの不動産や蔵書は甥のダグラス（Douglas, David, 1769-1819）が相続する。スミスの蔵書については、ボナー（Bonar, James, 1852-1941）編による『アダム・スミス蔵書目録』（*A catalogue of the library of Adam Smith*. 初版1894、2版1932、水田洋による補遺版1967）があるが、水田洋編『アダム・スミスの蔵書：目録』（*Adam Smith's library: a catalogue*, 2000）は痕跡のあるかぎり全蔵

書1808点を記録する。

(39) 『道徳感情論』 初版 1759

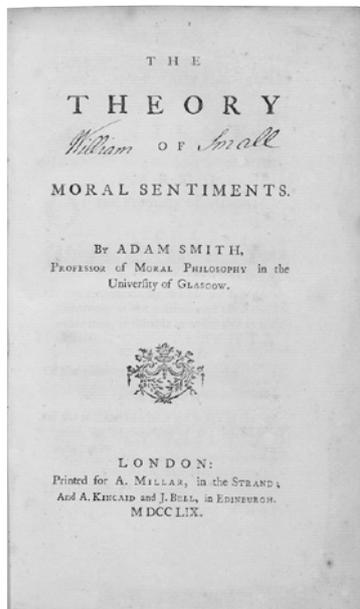
*The theory of moral sentiments.* London: Printed for A. Millar; and A. Kincaid and J. Bell, 1759.

(40) 『道徳感情論』 第6版 全2巻 1790

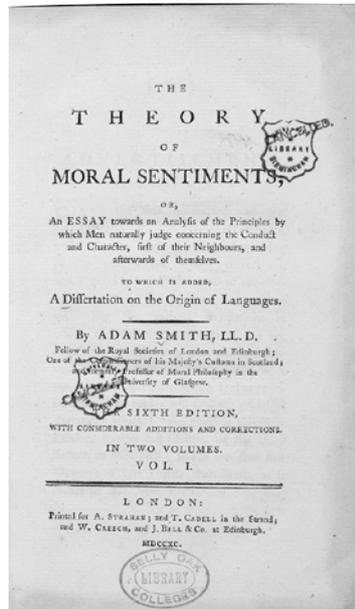
*The theory of moral sentiments; or, An essay towards an analysis of the principles by which men naturally judge concerning the conduct and character, first of their neighbours, and afterwards of themselves. To which is added, a dissertation on the origin of languages.* The sixth edition, with considerable additions and corrections. In two volumes. London: Printed for A. Strahan; and T. Cadell; and W. Creech, and J. Bell & Co., 1790.

(41) 『道徳感情論』 匿名訳 フランス語版 全2巻 1764

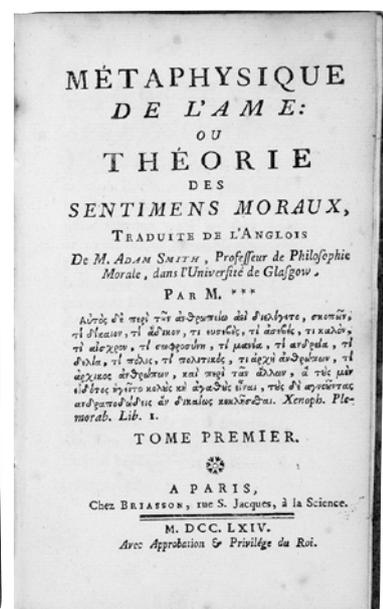
*Métaphysique de l'ame: ou Théorie des sentimens moraux,* traduite de l'anglois de M. Adam Smith, ... par M.\*\*\*. A Paris, Chez Briasson, 1764. 2 vols.



『道徳感情論』 初版



『道徳感情論』 第6版



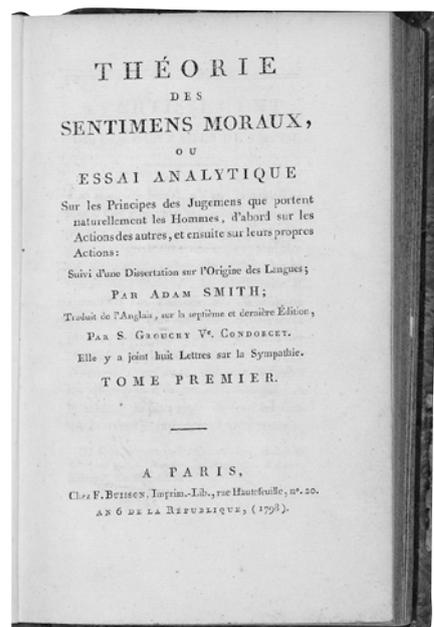
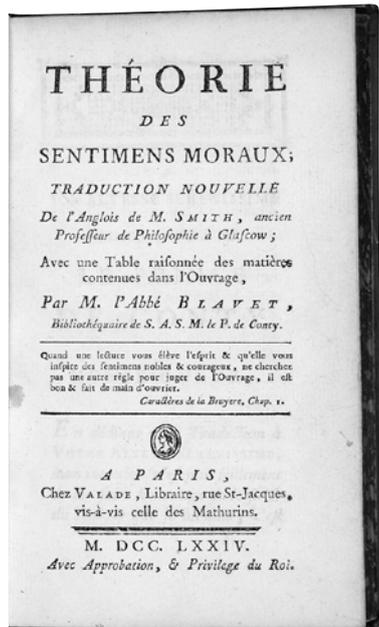
『道徳感情論』 匿名訳  
フランス語版

(42) 『道徳感情論』 ブラーヴェ訳 フランス語版 2巻1冊 1774-1777

*Théorie des sentimens moraux;* traduction nouvelle de l'anglois de M. Smith; avec une table raisonnée des matières contenues dans l'ouvrage, par M. l'abbé Blavet. A Paris, Chez Valde, 1774-1777. 2 vols. in 1.

(43) 『道徳感情論』 ソフィー・コンドルセ訳 フランス語版 全2巻 1798

*Théorie des sentimens moraux, ou, Essai analytique sur les principes des jugemens que portent naturellement les hommes, d'abord sur les actions des autres, et ensuite sur leurs propres actions: suivi d'une dissertation sur l'origine des langues;* Traduit de l'anglais sur la septième et dernière édition, par S. Grouchy V<sup>e</sup>. [sic] Condorcet. Elle y a joint huit lettres sur la sympathie. A Paris, Chez F. Buisson, 1798. 2 vols.



『道德感情論』 ブラーヴェ訳 フランス語版 『道德感情論』 ソフィー・コンドルセ訳 フランス語版

グラーズゴウ大学の教授時代に行った道德哲学講義の内容をまとめたもの。スミスが文明社会または商業社会とよぶ近代社会で、自由平等な諸個人がそれぞれに利益を追求して活動するなかで、相互同感の体系として自律的な社会秩序が成立持続することを解明した。スミスの同感概念は彼独自のもののように思われるかもしれないが、対等平等で冷静な人間関係においてなりたつものとして考えれば、きわめて当たり前のことである。かれは上方への同感即ち上流階級への賞賛を、道德感情の腐敗としてしりぞけ、下方への同感すなわち貧民への同情を、社会を飾るものではあるが、これがなくても社会は崩壊しないとして、視野の外に置く。平等であれば同感が成り立ちやすいとも言えるだろう。スミス自身は本書を自分の主著と考えて改定を続け、初版の2倍に近い2巻本の第6版を残して死んだ。友人たちも『国富論』より本書を高く評価したが、グラーズゴウ大学での後任、トマス・リード (Reid, Thomas, 1710-1796) がスミスの道德哲学を利己心の体系と批判したことが、名声に致命的な傷をつけた。これは『国富論』が産業革命の波に乗って売れ続けたのと対照的であった。フランスでは本書は初版以来、啓蒙の哲学に支えられて人気不衰、特に本書の第6版と『国富論』は、フランスの数学者、政治家、啓蒙思想家のコンドルセ (Condorcet, Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, marquis de, 1743-1794) とその夫人 (Condorcet, Marie-Louise-Sophie de Grouchy, marquise de, 1764-1822) によって始めて総合的に理解された。

『道德感情論』の仏語訳は、スミスが生前に出版されたものとして、訳者が匿名のもの (展示41) とブラーヴェ (Blavet, Jean Louis, 1719-1809) 訳 (展示42) の二つがある。また、死後出版されたコンドルセの夫人ソフィーが、英語版の7版 (1792) を訳したものがあり、この版にはフランスの医学者、哲学者で、生理学的心理学の創始者の一人、カバニス (Cabanis, Pierre Jean Georges, 1757-1808) に宛てた『同感についてのカバニスへの書簡』が付され、スミスの「同感」の考え方を自ら解説した。

(44) 『国富論』 初版 全2巻 1776 (特別出展 名古屋大学経済学図書室所蔵)

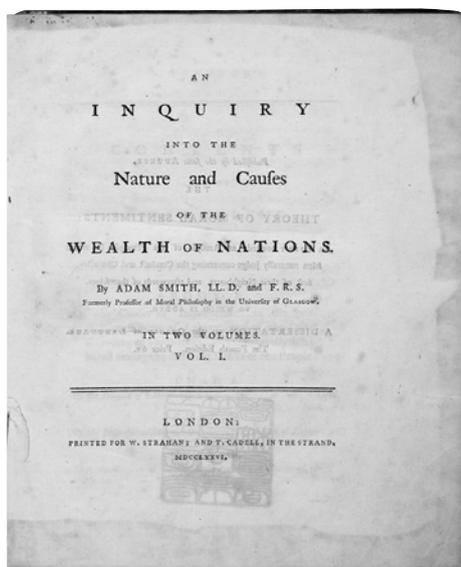
*An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations.* In two volumes. London: Printed for W. Strahan, and T. Cadell, 1776.

(45) 『国富論』 ブラーヴェ訳 フランス語版 ララン版 全4巻 1780-1781

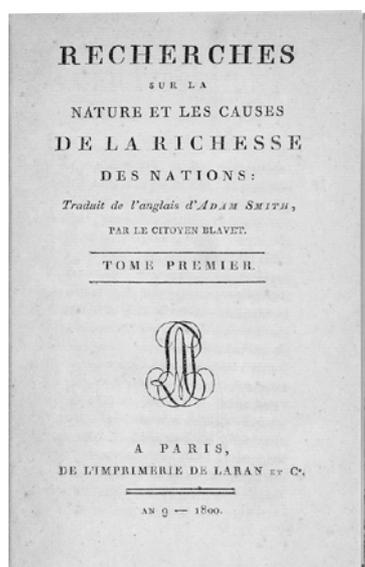
*Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations:* Traduit de l'anglais d'Adam Smith, par le citoyen Blavet. A Paris, Imprimerie de Laran et Co., 1780-1781. 4 vols.

『国富論』は先行したサー・ジェームズ・ステュアート (Steuart, James, Sir, 1712-1780) の『経済学原理』 (*An inquiry into the principles of political economy*, 1767) とともに最初の経済学体系として知られている。五編構成のうち第一篇は、分業による生産力の上昇に支えられた三階級社会 (地主・資本家・賃労働者) の理論であり、第二編はこの社会が存続するための再生産の理論であって、社会の発展に貢献する生産的労働とは何かが論じられる。以上2編が理論編だとすれば第三編は歴史であって、イギリス経済がその政策の誤りにもかかわらず、農民の耕作権の早い安定によって、現在の繁栄に達したことが強調される。第四編でこれまでの重商・重農両政策体系を批判して、第五編ではアメリカ植民地の放棄を含む政策提言が展開される。イギリス政府は長い間、汎大西洋帝国の幻想で国民をだましてきたという痛烈な言葉のほかに、この編には分業が労働者の人間形成をゆがめるとか、オクスフォードの大学教授は講義の真似をすることさえやめてしまっているとかの社会批判がちりばめられていて、経済学を知らなくても楽しめる

18世紀末までに出版されたフランス語版の『国富論』は、11種あり、一番早いものは匿名で、ラ・エから1779-1780に出版されている。展示本は元ベネディクト会修道士ブラーヴェ (Blavet, Jean Louis, 1719-1809) によって、最後に出版されたもの。それまでにブラーヴェ自身の訳が3つ、『農・工・商・財政雑誌』 (*Journal de l'agriculture, du commerce, des arts et des finances*, 1769-1781) に連載したもの (1779-1780)、これを6巻本としてスイス版 (1781)、及びこれに削除・修正を加えたパリ版 (1788) が刊行されている。ドイツでは原書刊行と同年にシラー (Schiller, Johann Friedrich, 1737-1814) による翻訳の出版が始まり、1794年からのガルヴェ (Garve, Christian, 1742-1798) 訳が続く。



『国富論』 初版



『国富論』 ブラーヴェ訳 フランス語版

## カラス事件関係

カラス事件とは、19世紀のドレフェス事件とならんで有名な、18世紀のフランスで起きた冤罪事件である。カラス家は南仏トゥルーズのプロテスタントの商家で、父ジャンと母アンヌ・ローズ・カビベルの間にマルク＝アントワヌ、ピエール、ルイ、ドナの4人の息子と2人の娘がいた。一家の運命が一変したのは1761年10月13日のことである。この日の夜、マルク＝アントワヌが首を吊って死亡したのが発見された。当時、自殺すること自体が犯罪とされていたため、カラスたちは、当初、自殺の可能性を否定することしか考えていなかった。しかし当局はプロテスタントへの偏見に基づく予断をもって、事件はカトリックに改宗しようとした息子を狂信的なプロテスタントの一家が殺害したという筋書きで展開した。1761年11月の一審は拷問を科すべしとの中間判決だったが、1762年3月9日、トゥルーズ高等法院（パルルマン法院）はジャンだけに死刑判決を下し、翌日の処刑前の拷問でこの有罪判決を正当化できると考えた。しかしジャンは拷問でも処刑台でも無実を主張したまま息絶えたのであった。

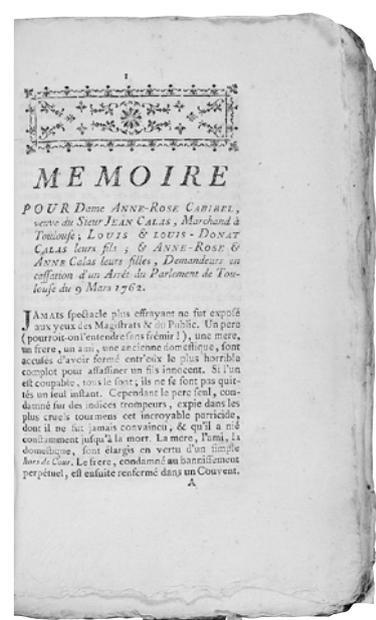
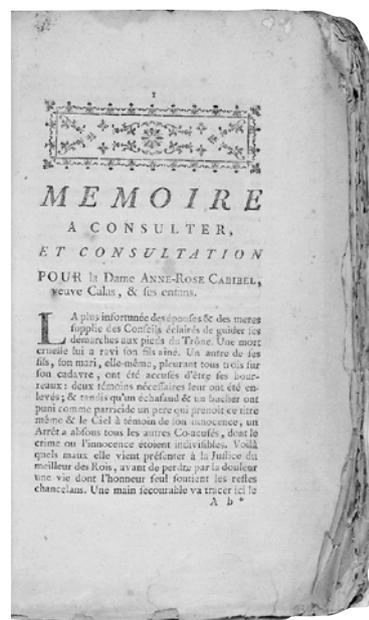
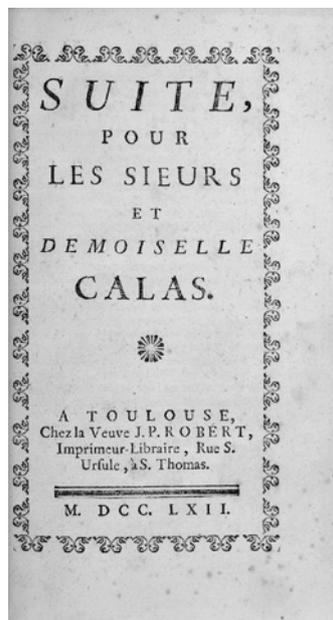
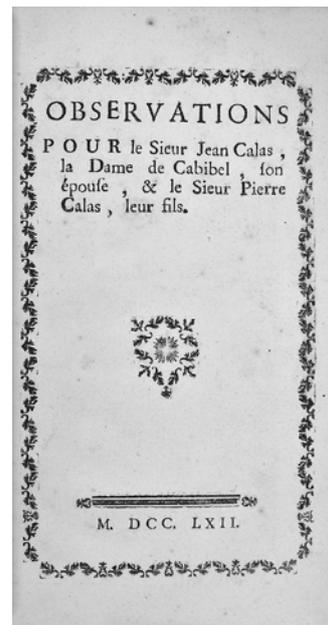
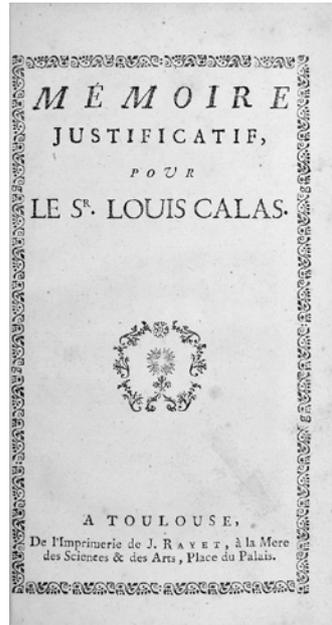
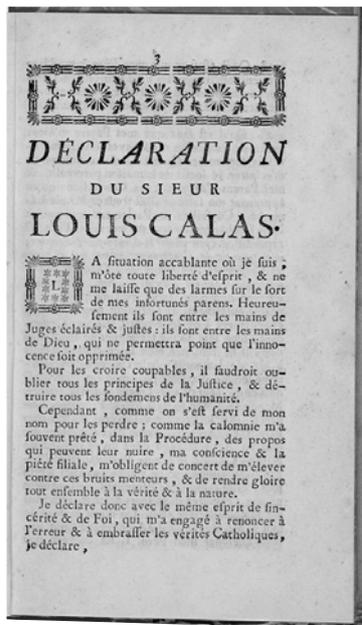
この事件に疑問を抱き、被告人たちのために立ち上がったのが啓蒙思想家ヴォルテール (Voltaire, 1694-1778) である。彼はカラス家の人びとと面会して、無実を確信し、手紙やパンフレットなどで世論を喚起するかたわら、パリの弁護士に依頼して原判決を破棄してもらうための訴訟趣意書を国王国務会議に出していくのである。

スミスとの関係でいえば、彼は1764年2月からのフランス滞在中の一年半をトゥルーズで過ごしていて（当時のイギリス人旅行者はこの南仏の町を好んだという）、事件が最終的に無罪とされるまでを見聞かしていたことになる。スミスの蔵書目録にはカラス事件関係の資料が十数点記載されており、『道徳感情論』最終版（展示40）にカラス事件への言及がある。

### (46) 『カラス事件関係資料』 6点 1761-1762

*Déclaration du sieur Louis Calas [2 décembre 1761].* [S.l., s.n., n.d.]. Bound with: *Mémoire justificatif pour le sieur Louis Calas.* A Toulouse, imp. de J. Rayet, [n.d.]; *Observations pour le sieur Jean Calas, la dame de Cabibel, son épouse, et le sieur Pierre Calas, leur fils.* [S.l., s.n.], 1762; *Suite, pour les sieurs et demoiselle Calas.* A Toulouse, Veuve J. P. Robert, 1762; *Mémoire à consulter et consultation pour la dame Anne-Rose Cabibel, veuve Calas, et pour ses enfants.* [Paris], impr. de Le Breton, 1762; *Mémoire pour dame Anne-Rose Cabibel, veuve du sieur Jean Calas, marchand à Toulouse, Louis et Louis-Donat Calas, leurs fils, et Anne-Rose et Anne Calas, leurs filles, demandeurs en cassation d'un arrêt du parlement de Toulouse du 9 mars 1762.* [Paris], imp. de Le Breton, 1762.

本資料は、複数の資料をそのまま一冊に製本したものである。すなわち、『ルイ・カラス氏の供述』（日付は1761年12月2日なので、カラス事件の一審判決後ということになる）、『ルイ・カラス氏のための訴訟趣意書』（1762）、トゥルーズ段階で出された『デュルー・フィス名義による意見書』（1762）と『シュードル弁護士の訴訟趣意書』（1762）、そして破棄申立て段階の『エリー・ド・ボーモン弁護士の訴訟趣意書』（1762）と『マリエット弁護士の訴訟趣意書』（1762）で、最後の2つは通しページになっていて、次の番号（展示47）に収録されているもののオリジナル版であろう。訴訟趣意書とは、刑事裁判では法廷内の弁護活動が原則的に認められていなかった当時、依頼人の言い分やその他の証拠に基づき弁護士が作成し、法廷に提出する書類で、刑事事件の弁護の手段として重要な意義を有していた。これは法廷の外でも一般に頒布されたので、スミスも、上記3人の弁護士の訴訟趣意書とデュルー・フィス (Duroux fils) 名義の意見書（作者はカラス有罪に疑問を抱いていたトゥルーズ法院裁判官）を蔵書に加えている。カラス事件の、とくにトゥルーズ段階での訴訟趣意書や意見書の現物は珍しい（その判型等にも注意しておきたい）。



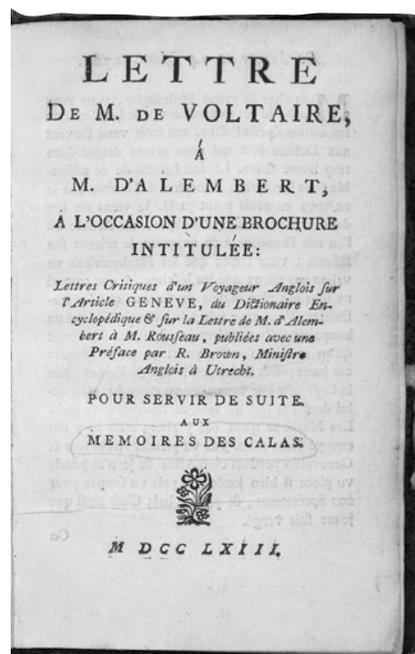
『カラス事件関係資料』

(47) 『カラス事件の訴訟趣意書および原資料集』1763

*Lettre de M. De Voltaire, à M. d'Alembert à l'occasion d'une brochure intitulée: Lettres critiques d'un voyageur anglois sur l'article Genève du Dictionnaire encyclopédique & sur la lettre de M. D'Alembert à M. Rousseau, publiées avec une Préface par R. Brown, Ministre Anglois à Utrecht. Pour servir de suite aux Mémoires de Calas. [S.l., s.n.], 1763.*

この一冊の書物には、冒頭に、カラス事件について言及した「ヴォルテール氏からダランベール氏への手紙」（日付は1762年3月24日とあるものの、プレイヤー版 *Mélanges* の註によれば、これは3月29日の誤りで、カラスの死刑から20日後の比較的初期の書簡である）が置かれている。続いて、破棄再審を求めて国王国務会議に提出された『エリー・ド・ボーモン弁護士』の訴訟趣意書（*Mémoire à consulter et consultation pour la dame Anne-Rose Cabibel, veuve Calas, et pour ses enfans*, 1762）と『マリエット』の訴訟趣意書（*Mémoire pour dame Anne-Rose*

*Cabibel, veuve du sieur Jean Calas, marchand à Toulouse, Louis et Louis-Donat Calas, leurs fils, et Anne-Rose et Anne Calas, leurs filles, demandeurs en cassation d'un arrêt du parlement de Toulouse du 9 mars, 1762.*）、さらにヴォルテールにより1762年6月末に出された『トゥルーズで下された判決とカラス氏の死にかんする原資料集』（*Pièces originales concernant la mort des sieurs Calas et le jugement rendu à Toulouse*）、以上が通しページで収められている。この『原資料集』は、プレヤード版などによれば、カラス家の当事者に代わってヴォルテールが書いたものとされている。『原資料集』には「カラス未亡人の手紙からの抜粋」「ピエール・カラスの供述」などがある。なお、本資料には1762年7月に出版された『エリザベス・カニングとジャン・カラスの物語』（*Histoire d'Elisabeth Canning et de Jean Calas*）も収録されている。

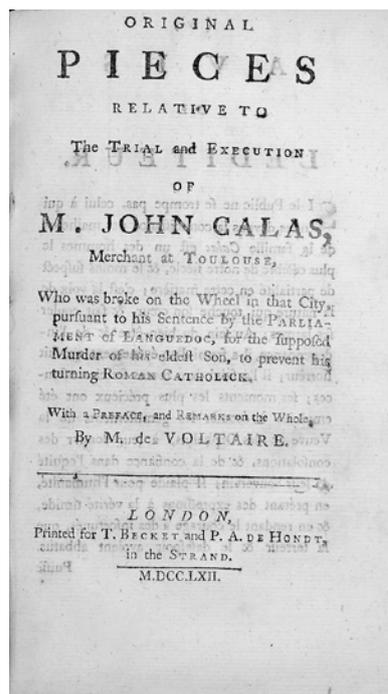
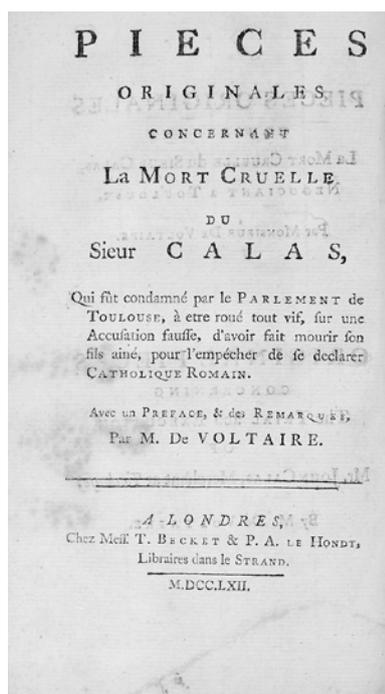


【カラス事件の訴訟趣意書および原資料集】

(48) ヴォルテール『カラス氏の残酷な死にかんする原資料集』 1762

*Original pieces relative to the trial and execution of M. John Calas, merchant at Toulouse, ... =Pièces originales concernant la mort cruelle du sieur Calas, ... With a preface, ... and remarks on the whole, by M. de Voltaire. London, Printed for T. Becket and P. A. de Hondt, 1762.*

本資料は、1762年6月末に出版された『トゥルーズで下された判決とカラス氏の死にかんする原資料集』を、見開きで左側ページはフランス語、右側ページは英語に訳されたものである。フランス語のオリジナル版が出版されたのと同じ年に、ロンドンで本資料は出版されていたことになる。展示図書(47)に収録されているのと同じ「カラス未亡人の手紙からの抜粋」「ピ



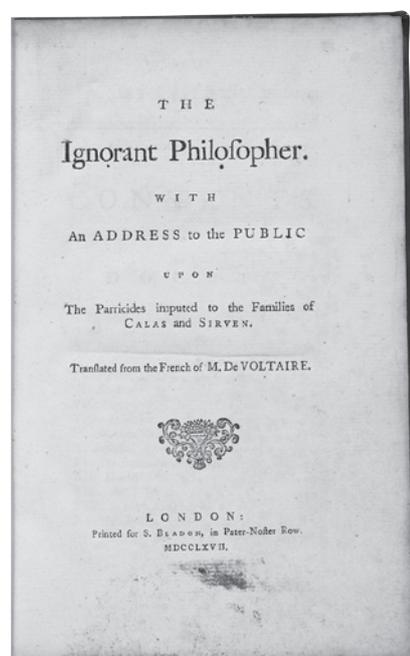
【カラス氏の残酷な死にかんする原資料集】

エール・カラスの供述」などが英訳されているのである。『エリザベス・カニングとカラス一家の物語』は、イギリスの事例との対比によりフランスの裁判制度を批判したものである。ただ、この『物語』のテキストにおいては、プレイヤー版などにある『物語』の最後に書かれている、裁判官を賞賛するパラグラフが欠落しており、その逆に、プレイヤー版には書かれていない、裁判官を批判する文が見られる点が興味深い。

(49) ヴォルテール『無知なる哲学者』 英語版 初版 1767

*The ignorant philosopher. With an address to the public upon the parricide imputed to the families of Calas and Sirven. Translated from the French of M. De Voltaire. London: Printed for S. Bladon, 1767.*

標題の作品は、無知を「自任」する作者が植物、動物、地球、惑星、宇宙、空間、時間、善、悪、自由、魂などなどを問いかけては思考していく『無知なる哲学者』の英語訳になっている。フランス語オリジナル (*Le philosophe ignorant*) の出版年は1766年で、この年にラ・バル事件 (宗教的行列にたいする不敬の罪で啓蒙思想かぶれの若者が斬首刑にされた事件) の処刑があり、ラ・バル (La Barre, Jean François Lefebvre, chevalier de, 1747-1766) の蔵書にあったヴォルテールの『哲学辞典』 (*Dictionnaire philosophique, portatif*, 1764) は焚書になり、この『無知なる哲学者』の本格的な販売普及は翌年以降と言われている。展示されている本資料には『カラス家とシルヴァン家に帰せられた親族殺にかんする公衆への意見』なども通しページで収められている。ここで出てくるシルヴァン事件とは、1762年1月に、場所もカラス事件と同じ南仏ラングドック地方なら、事件の概要もプロテスタントの家庭で娘が変死したことが、当局の同じような宗教的偏見のために、1764年、シルヴァン夫妻に死刑の判決が下された類似の事件である (ただし、シルヴァン一家はスイスに逃れて、欠席のままの裁判)。ヴォルテールがカラス事件の次に名誉回復の運動に立ち上がり、1771年に晴れて無罪の判決が言い渡されることになる。



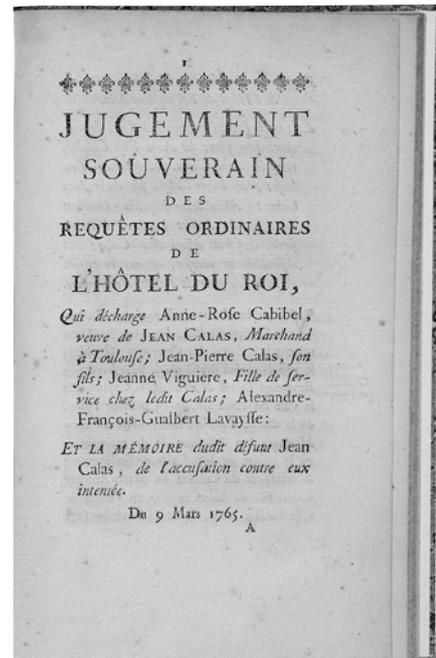
『無知なる哲学者』

(50) 『1765年3月9日の被告人全員に対する最終無罪判決』 1765

*Jugement souverain des requêtes ordinaires de l'hôtel de roi, qui décharge Anne-Rose Cabibel, veuve de Jean Calas, marchand à Toulouse; Jean-Pierre Calas, son fils; Jeanne Viguiere, fille de service chez ledit Calas; Alexandre-François-Gaulbert Lavaysse: et la mémoire dudit défunt Jean Calas, de l'accusation contre eux intentée. Du 9 Mars 1765. A Paris: De l'Imprimerie royale, 1765.*

カラス事件の名誉回復の道のりは比較的順調に推移したように思われる。1763年3月1日には、ヴォルテールの活動の甲斐あって、カラス事件有罪判決の破棄申立てが国王国务会議により全会一致で受理されることになり、翌年の6月4日に破棄が決定された。フランスでは破棄自判とはならないので、事件はトゥルーズ以外の法院に送られるのが一般的だったが、カラス事件の場合には宮廷訴願審査官法廷に送られた。1765年2月28日、事件の被告人だった4名はいったんパリのコンシェルジュリー監獄に入り、ジャン・カラスの死刑判決が言い渡されてからちょうど3年後の1765年3月9日に、40名の訴願審査官の全員一致で無罪が言い渡された。

本資料はその時の判決文であるが、生き残った家族だけでなく、刑死したジャンの名誉回復も同時になされていることがわかる。なお、スミスの蔵書目録にもこの判決文の資料がある。



『1765年3月9日の被告人全員に対する最終無罪判決』

## Ⅳ. アダム・スミス思想の批判と継承

アダム・スミスがヴォルテールやルソーをはじめとするフランス啓蒙思想から多くを学んでいることは『エディンバラ評論』への寄稿（1756年）によって明らかであるが、『国富論』と（カラス事件の回想をも含む）『道徳感情論』で展開されたスミス思想の総体は、コンドルセ夫妻とコンスタンによってフランスに輸入され、社会秩序および世論形成における人間像の探求が新たな次元のもとで続行される。他方、スコットランドで展開された啓蒙思想はヒューム懐疑論批判から出発したコモン・センス学派を生み出し、その代表者としてのトマス・リードは、スミスの後任者として教壇から前任者の倫理学を自愛心の洗練にすぎないとして批判するようになるが、このコモン・センス哲学は（徳性の描写に偏るオズワルドとビーティのものとは異なり）、D.ステュアートによる（分析に基づく）体系化を経てフランスとアメリカに輸出され、その地で講壇哲学として地位を獲得する。そのステュアートは、「レズリ論争」（1805）でスコットランド教会穏健派の墮落した現状を批判することにより、実践面においてもスコットランド啓蒙を総括することになった。

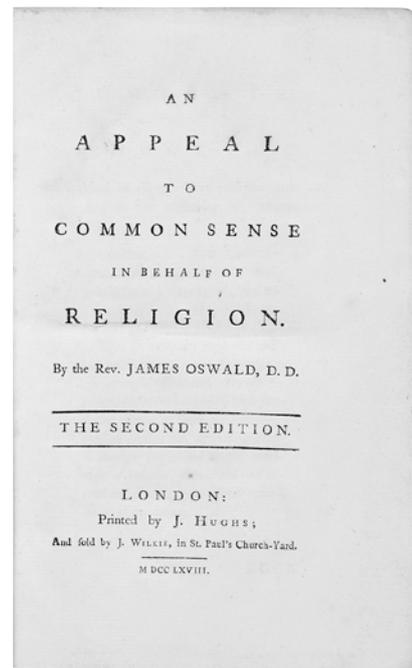
スコットランド啓蒙の担い手は教会人と大学教授であるが、大学人としてスミスを継承したのが、ミラー（グラズゴウ）、ブルース（エディンバラ）、ウォトスン、バロン（セント・アンドルーズ）で、ミラーは法哲学と歴史、ブルースは（自然哲学原理に基づく独自の）倫理学、ウォトスンとバロンは文体論を展開した。他方、穏健派教会人のブレアはエディンバラで初代レトリック教授に任命され、出版された講義録でスミスからの借用を表明し、スミスの教授時代にグラズゴウで勤務した非国教徒牧師のキャップは、「スミスの蔵書のなかに、唯一の説教としてふくまれていた」という小冊子のなかで、スミスのアメリカ革命論に近い（穏健派牧師のものとは異質の）見解を表明する。これに対してイングランド国教会牧師のホーンは、ヒュームの臨終の姿を称えたスミスを批判するが、その痛切に感じる「不当な非難」にスミスは黙殺という手段で耐えることになる。（篠原 久）

### ジェイムズ・オズワルド Oswald, James, 1703-1793

スコットランドの牧師、哲学者。スコットランド本島最北のダネット教区で父が牧師を務めていた時の子で、エディンバラ大学で学ぶ。父の死後ダネットの牧師になり、その後メトヴェンに転任した。ゲール語と英語で説教し高く評価されるが、教会内における穏健派の台頭により大学と教会での昇進を実質的に断たれる。議長を務めた1766年の長老派教会総会で穏健派を激しく糾弾する。神学に常識哲学を応用し、穏健派知識人の道徳哲学、ヒューム（Hume, David, 1711-1776）の懐疑論を批判した。また、ポーカー・クラブの運動に支えられて、G.エリオット（Elliot, Gilbert, 1722-1777）とスコットランド民法法案を議会に提出したが、否決された。主要著作は、『宗教擁護のための常識への訴え』（*An appeal to common sense in behalf of religion*, 1766-1772）である。

(51) 『宗教擁護のための常識への訴え』 第2版 1768

*An appeal to common sense in behalf of religion*. The second edition. London: Printed by J. HUGHS; and



『宗教擁護のための常識への訴え』

sold by J. Wilkie, 1768.

オズワルドは、当時の支配的な「穏健派」教会人の「企図による神の存在証明」に疑問を呈し、宗教と道徳の基本的心理は「コモン・センスと呼ばれる人間に独自の知覚・判断能力」によって直感的に把握されると主張した。ビーティ (Beattie, James, 1735-1803) は「アバディーン哲学協会」の主要なメンバーだったが、オズワルドは「協会」とは無関係であった。

ケイムズ卿 (Kames, Henry Home, lord, 1696-1782) のヒューム批判の枠組みから、「精神の力能 (機能) とその諸作用への注目」という厳密な方法を駆使したリード (Reid, Thomas, 1710-1796) を経て、常識哲学は確立された。だが、オズワルドとビーティはリードの「解剖学」の展開の方向には関心を示さず、もっぱら「懐疑論」批判と「宗教」の独断的擁護の方向への展開を行った。

### トマス・リード Reid, Thomas, 1710-1796

18世紀スコットランドの代表的な哲学者で、ケイムズ卿とともに「スコットランド常識哲学」の創設者とされる。1710年4月27日に、スコットランド北部キンカーディーン州に牧師の息子として生まれた。父ルイス・リードは代々牧師の家系の出自で、一族には幾人かの牧師や学者が数えられる。母マーガレット・グレゴリーは、天文学者デイヴィッド・グレゴリー (Gregory, David, 1659-1708) など優れた科学者を輩出し、数学的天才の家系として有名なグレゴリー一族の出身。アバディーンのマーシャル・カレッジでは道徳哲学者ジョージ・ターンブル (Turnbull, George, 1698-1748) から学び、14年間にわたるスコットランド教会の牧師生活の後、リードは1751年にアバディーンのキングズ・カレッジのリージェント (教員の一種) となり、翌年には同大学の哲学教授となった (両カレッジが現在のアバディーン大学)。ニュートン物理学を含む幅広い分野の講義を行うとともに、アバディーン哲学協会の設立や大学改革を推進し、「アバディーン啓蒙」の中心人物の一人となった。のちにアダム・スミスの後任としてグラズゴウ大学に移り、エディンバラ大学のアダム・ファーガスン (Ferguson, Adam, 1726-1816) とともに、スコットランドの代表的な道徳哲学の教授として、晩年まで教育にあたった。生涯スコットランド教会の信仰を保つとともに、牧師として勤めていた時期には救貧法行政に熱意を持って携わり、グラズゴウでも奴隷解放請願や寡婦年金の創設に加わり、病院の評議員を務め、フランス革命への賛同者となるなど、政治・社会問題にも関心を持っており、スコットランドの「ウィッグ急進派」の一人と呼ばれることもある。生前に出版されたのは3冊の著書など、哲学的な問題を扱ったものだが、数学から政治経済学にわたる膨大なノートを残した。現在エディンバラ版全集がそれらをもとに刊行されつつある。

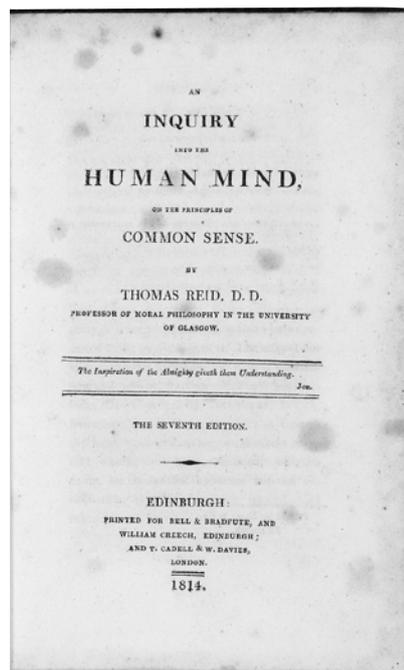
リードの哲学者としての経歴は、他の「スコットランド常識哲学」の担い手たちと同様、デイヴィッド・ヒューム (Hume, David, 1711-1776) の懐疑論批判から始まっている。この学派は有神論、経験主義、実在論、道徳的行為能力の肯定などを特徴とするが、その中でリードの哲学は自然科学全般、とくにニュートンの学説に対する専門的な知識を背景とし、緻密な思考力に基づいて体系化された高い学問性を持っている点に特徴がある。リード哲学はスコットランド哲学の代表的体系として大きな影響を与えた。その範囲はブリテンを超えてフランス、ドイツ、とくにアメリカ合衆国にまで及んでいる。近年ではカント哲学の親近性が指摘されたり、実在論哲学として現代的観点からの見直しなども行われている。

#### (52) 『コモン・センスの原理に基づく人間本性の一研究』 第7版 1814

*An inquiry into the human mind, on the principles of common sense.* The seventh edition. Edinburgh: Printed for Bell & Bradfute, and William Creech; and T. Cadell & W. Davies, 1814.

1764年に出版されたリードの主著。その中心的な論点は、ジョージ・バークリー (Berkeley,

George, 1685-1753) の観念論やデイヴィッド・ヒュームの懐疑論の礎石が古代哲学に起源をもち、ジョン・ロック (Locke, John, 1632-1704) の哲学の中核となった観念 (idea) の理論にあるとして、これを排除して人間の認識の説明を行うところにある。リードによれば、従来人間の思考の直接の対象は客観的に実在するものではなく、人間精神の内部にある観念だと考えられてきた。これに対して本書は、人間が経験的知覚によって理解するものは真の実在であるとする実在論哲学を樹立しようとする。「常識哲学」の主要著作の一つであるにもかかわらず、本書ではその論証が、広範な科学的知識と様々な哲学の学説の検討を通じて、詳細かつ緻密に展開される。それには「非ユークリッド幾何学」の端緒とされることもある、難解な視覚世界の幾何学なども含まれている。本書を書くにあたってリードは、講義でのように自分の学説を少数の原理からわかりやすく展開する「総合の方法」ではなく、一つ一つ証拠を挙げて読者に示していく「分析の方法」を採用した。そのため本書は論述が膨大になり、五感の理論の叙述で終わっている。このような性格の本書は、「ニュートンの方法を真に道徳哲学に応用した」(ドゥーガルド・ステュアート Stewart, Dugald, 1753-1828) とその学問性が評価される一方、ロック哲学を銜学趣味によって汚染したとジョゼフ・プリーストリ (Priestley, Joseph, 1733-1804) から激しく批判されることとなった。本書の刊行以後、リードは認知の理論を大著『人間の知的能力について』(*Essays on the intellectual powers of man*, 1785) で集大成し、倫理学の哲学的理論を『人間の積極的能力について』(*Essays on the active powers of man*, 1788) でまとめた。



『コモン・センスの原理に基づく人間本性の一研究』

### モンボド卿 Monbodo, James Burnett, lord, 1714-1799

18世紀スコットランド啓蒙思想家であるが、特に“奇人”として知られている。スコットランドのモンボドに生まれる。アバディーンのマーシャル・カレッジを卒業後、エディンバラ大学、フロニンゲンの大学で学ぶ。1737年スコットランド弁護士会に入会。1767年民事控訴院判事となる。主著は『言語の起源と進歩』(解題参照)。言語起源論が当時の流行的なテーマであったため、この著作は大きな反響があった。内容はルソー (Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778) の『人間不平等起源論』(*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les homes*, 1755) と酷似しているが、彼はルソーの熱心な支持者であり、ルソーとの思想的一致を喜ばしく考えていた。また後の進化論の先駆けと見られることもあり、エラスムス・ダーウィン (Darwin, Erasmus, 1731-1802, チャールズ・ダーウィン Darwin, Charles Robert, 1809-1882の祖父) などがこの著作に注目している。

#### (53) 『言語の起源と発達』 全6巻 1773-1792

*Of the origin and progress of language.* Edinburgh: Printed for A. Kincaid & W. Creech; and T. Cadell, 1773-1792. 6 vols.

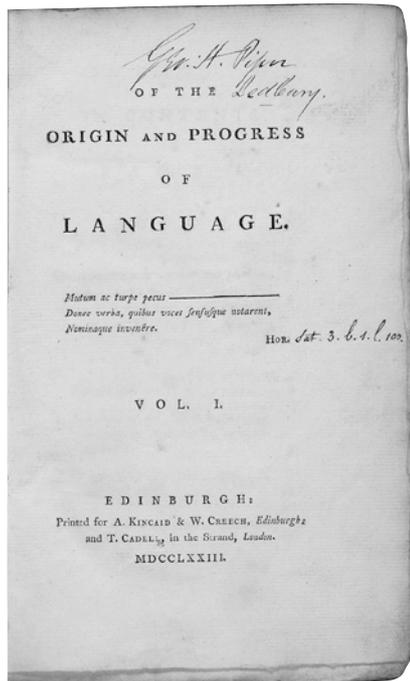
言語を人間の本性に基づくものではなく、発明されたものとする考えは可能であり、オランダ人が言語を使用しないのも偶然に過ぎないと主張し、サルと人間は共通の祖先を持つ

と述べた。進化論の先駆けと見られることもある。

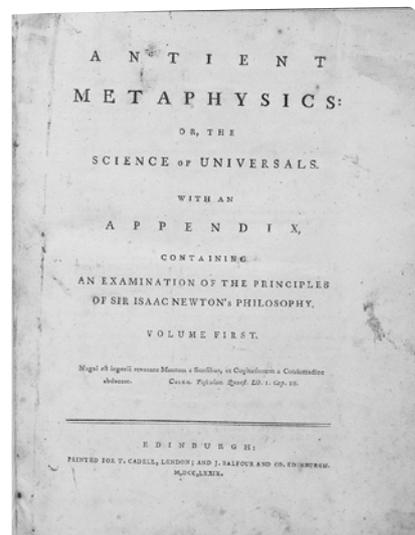
(54) 『古代形而上学』 全6巻 1779-1799

*Antient metaphysics: or, The science of universals. With an appendix, containing an examination of the principles of Sir Isaac Newton's philosophy.* Edinburgh: Printed for T. Cadell, and J. Balfour and Co., 1779-1799. 6 vols.

モンボドはアリストテレスの「不動の動者」概念を強く支持していた。本書はアリストテレス主義を用いて、ニュートン力学およびニュートン (Newton, Isaac, Sir, 1643-1727) を批判したものであるが、それはロック哲学に対する批判でもある。



『言語の起源と発達』



『古代形而上学』

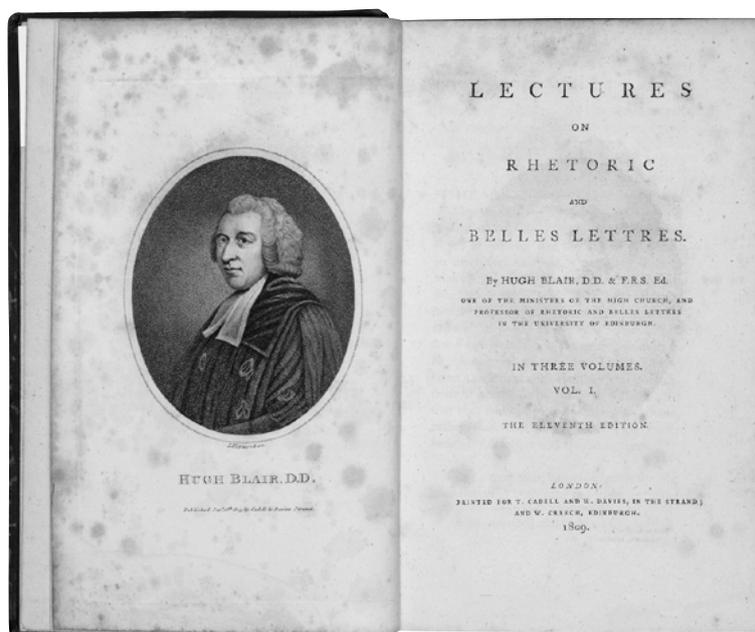
ヒュー・ブレア Blair, Hugh, 1718-1800

エディンバラで長老派の有名な家系に生まれる。彼の曾祖父ロバート・ブレア (Blair, Robert, 1593-1666)は、グラスゴウ大学の教授であり、長老派で指導的役割を果たした。1731年にエディンバラ大学に入学し、論理学教授ジョン・スティーブンスン (Stevenson, John, 1695-1775) の影響を受ける。1739年、同校卒業。1741年には長老派の牧師となり、キャノンゲート教会、レディ・イエスター教会などを経て、1758年に当時のスコットランドにおける牧師にとって最高の地位である、セント・ジャイルズのハイ・カーク教会の牧師となる。『説教集』全5巻 (Sermons, 1777-1801)は、それ以降の説教をまとめたものである。1748年から51年にかけてスミスは、エディンバラで修辞学と文体論を含む公開講義を3回行っており、ブレアはこれを聴いている。1759年からは、エディンバラでスミスとウォトソン (Watson, Robert, 1730?-1781) を引き継いで修辞学について講じ始め、翌年から1783年まで修辞学教授を務めた。スミスからの影響は大きく、自身の修辞学講義の着想をスミスの講義や草稿から得ているし、スミスの法学を『説教集』に活かしてもいる。『国富論』出版直後には、スミスに賞賛の手紙を送っている。

(55) 『修辞学・文学講義』 第11版 全3巻 1809

*Lectures on rhetoric and belles lettres.* In three volumes. The eleventh edition. London: Printed for T. Cadell and W. Davies; and W. Creech, 1809.

初版は1783年。6月にロンドンで、7月にエディンバラで2巻本で出版された。以降130版以上を重ねる。47項目からなる本書は、エディンバラ大学での講義がもとになっており、クインティリアヌス (Quintilian, c.35-c.100) やキケロ (Cicero, Marcus Tullius, 106-43 B.C.)、バーク (Burke, Edmund, 1729-1797) やケイムズ (Kames, Henry Home, lord, 1696-1782) などを扱う古代・近代の文体論、優れた話し手・書き手になるために必要な趣味や文体、雄弁術などについて論じられている。スミスの修辞学から多くを学んでいるブレアは、修辞学や文学 (文体論) を講ずることに、個人の社会性の向上、および、徳とモラルの涵養促進という二重の教育的意義を認めていた。



『修辞学・文学講義』

ジョージ・ホーン **Horne, George, 1730-1792**

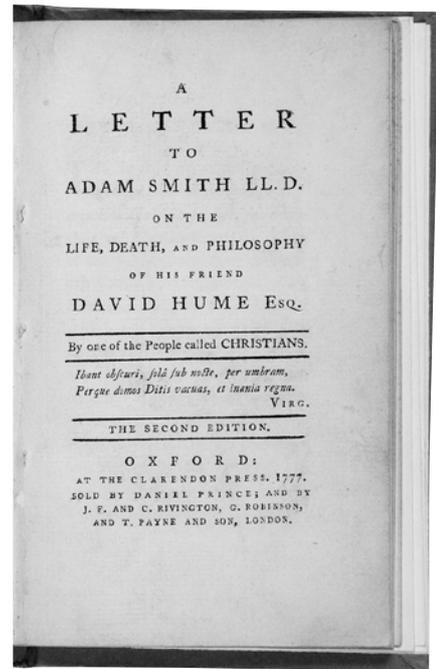
英国国教会のノリッジ主教。ケント州メイドストーンに教区教会牧師の長子として生まれる。1746年からオクスフォード大学に学び、1750年にはモードリン・カレッジの特別研究員となり、1764年には神学博士の学位を授与され、1776～1780年には、同大学の副学長を務める。この間に神学者ハチンスン (Hutchinson, John, 1674-1737) の影響を受け、またホーンの伝記を書いたジョーンズ (Jones, William, 1726-1800) とは生涯の友となった。1781年にカンタベリー主教座聖堂参事会長となり、1790年にノリッジ主教となる。

不信心を厳しく批判し、三位一体信奉者であった。また、ニュートン派の自然神学を批判するハチンスンを支持した。

(56) 『友人デイヴィッド・ヒュームの生涯・死・哲学について、アダム・スミス法学博士にあてた手紙』 第2版 1777

*A letter to Adam Smith LL.D. on the life, death, and philosophy of his friend David Hume esq.* By one of the people called Christians. The second edition. Oxford: at the Clarendon Press, 1777.

スミスが親友のヒューム (Hume, David, 1711-1776) の死に際して、ストラヘン宛に書いた1776年11月9日付けの手紙 (Letter from Adam Smith, LL.D. to William Strahan, Esq.) がヒュームの自伝 (*The life of David Hume: written by himself*. London, 1777) のp.[39]-62に印刷されている。ヒュームの病と死に至る様子を主治医ブラックの手紙の内容とともに紹介し、ヒュームの人柄をたたえている。これに対して、ホーンはヒュームの宗教思想を無神論者であるとして批判するとともに、無神論者がスミスが言うように安らかに死ぬるはずがないとして、スミスを批判した。匿名出版 (初版も1777年発行)。追伸 (後書き) として、ヒュームの哲学体系を要約している。スミスはこの手紙に対して返答を書いていない。



『友人デーヴィド・ヒュームの生涯・死・哲学について、アダム・スミス法学博士にあてた手紙』

### ニューカム・キャップ Cappe, Newcome, 1733-1800

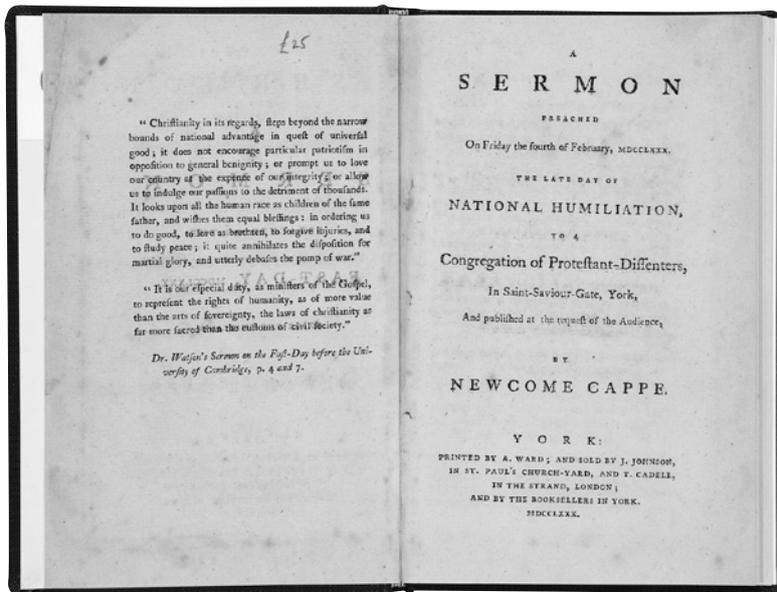
ヨーク州生まれの非国教会 (ユニテリアン派) の牧師。グラズゴウで、グラズゴウ大学神学教授のリーチマン (Leechman, William, 1706-1785) のもとでキリスト教について研究する (1752-1765)。この間にスミスらとの親交を結ぶ。その後はヨークで、非国教会の牧師となる。

アメリカ独立戦争中には、1776年、1780年、1781年、1782年に断食説教を行い、一貫してアメリカの独立を支持した。経済・政治改革にも参加し、非国教徒は公職につくことができないと定めた地方自治体法や審査律の廃止に貢献する。文筆家の妻キャサリン (Cappe, Catharine, 1744-1821) による伝記があり、スミスと親交があったことや、神学者・自然哲学者のプリーストリ (Priestley, Joseph, 1733-1804)、スミス、牧師のリーチマンらと書簡を交わしていたことが書かれている。

#### (57) 『アメリカ独立戦争について、ヨークの非国教徒集会でおこなった反戦平和の説教』 1780

*A sermon preached on Friday the fourth of February, MDCCLXXX. The late Day of National Humiliation, to a congregation of protestant-dissenters, in Saint-Saviour-Gate, York, and published at the request of the audience. York: Printed by A. Ward; and sold by J. Johnson and T. Cadell, and by the booksellers in York, 1780. Bound with: A sermon preached on the eighth of February, 1782, a Day of National Humiliation and again (by the assistant minister) on Wednesday, the 25th of Feb. 1795, the late Day of National Humiliation. To a congregation of protestant dissenters in St. Saviourgate, York. And now published by Newcome Cappe. York: Printed by Wilson, Spence, and Mawman: sold by Johnson..., [1795].*

本書はアメリカ独立戦争期間中の「国民ごんげの日」に行われた4回の断食説教のうち、1780年と1782年及び1795年の説教が合本製本されている。1782年の説教と1795年の説教は1795年に一緒に発行されている。但し、1795年の説教は同じ内容の説教をキャップ自身ではなく、牧師補が行っている。趣旨は、戦争が政府や支配者にもたらす事柄による危機を述べ、平和を願うもの。



『アメリカ独立戦争について、ヨークの非国教徒集会でおこなった反戦平和の説教』

### ジェイムズ・ビーティ Beattie, James, 1735-1803

スコットランドの詩人、道徳哲学者。ローレンスカーク生まれで、少年期から詩才を認められ、アバディーンのマーシャル・カレッジでギリシア語、道徳哲学を学ぶ。学校教師と教区教会書記を務めたのち、1760年に母校の道徳哲学および論理学教授に就任する。アバディーン哲学協会で交流したリード (Reid, Thomas, 1710-1796) らから影響を受ける。1760年代末から詩や散文を通して神学に常識哲学を応用した独自の哲学を展開。リードの確立した常識哲学を広く普及させる役割を果たした。ヒューム (Hume, David, 1711-1776) の懐疑論批判者として名声を博し、国王ジョージ三世より年金を賜る。晩年の政治的見解は保守的だったが、男女平等や人種の平等を唱え奴隷貿易に反対するなど社会問題についてはリベラルだった。私生活では自らの健康と妻の精神病に苦しみ、愛息二人が相次いで先立つと病が悪化しアバディーンで死去した。

#### (58) 『道徳科学原理』 全2巻 1790-1793

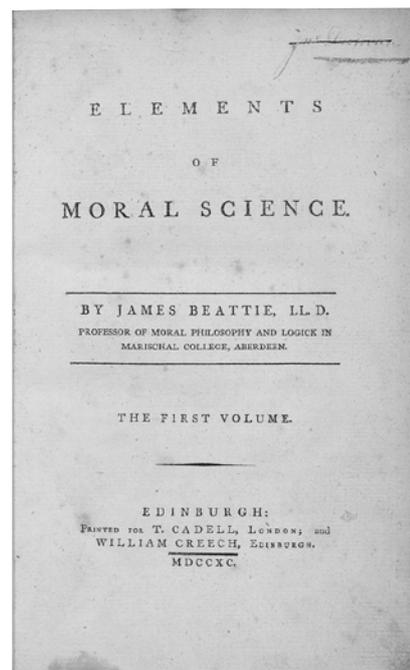
*Elements of moral science.* Edinburgh: Printed for T. Cadell, and William Creech, 1790-1793. 2 vols.

アバディーン大学マーシャル・カレッジの道徳哲学教授だったビーティの講義の内容は、心理学、倫理学、文芸批評、自然宗教と多岐にわたった。その内容の抜粋が『道徳科学原理』である。

#### (59) 『真理の性質と不変—詭弁と懐疑論への反論』 第3版 1772

*An essay on the nature and immutability of truth, in opposition to sophistry and scepticism.* The third edition. London: Printed for Edward and Charles Dilly; A. Kincaid and W. Creech, and J. Bell, 1772.

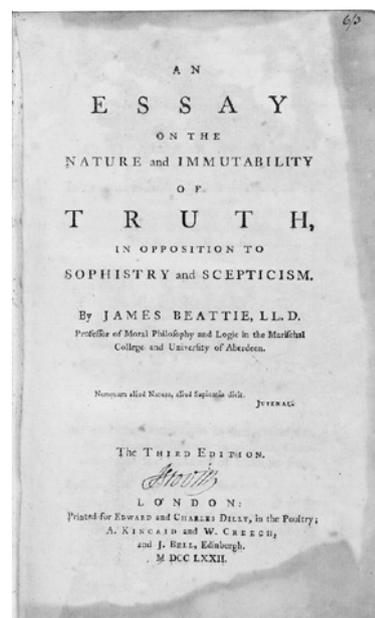
初版は1770年。ビーティは、知識の相対性に帰結するヒュームの議論をとりわけ痛烈に批判しつつ、真理の基準としての「常識」(コモン・センス)



『道徳科学原理』

を、「漸進的な論証によってではなく、瞬間的で直感的な衝動、教育や習慣にではなく自然に由来する衝動によって、真理を知覚し信念を呼び起こす精神の力能」と定義した。彼によればこの「力能」は、その対象が現れるときにはいつも、われわれの意志とは無関係に既存の法則に従って作用するので「センス」と見なしうるし、またすべての人類に「共通の」仕方で作作用するので「コモン・センス」と呼びうるものなのである。

リード、オズワルド (Oswald, James, 1703-1793)、ビーティの3人の著作を一括して批判の対象としたプリーストリ (Priestley, Joseph, 1733-1804) の著作や、カントの紹介により、この3人がスコットランド常識哲学の代表者だということの考えが定着した。しかし、「精神の解剖」を強調するリード哲学と、「常識」の権威を独断的に主張するオズワルドとビーティの思想とは、その傾向が著しく異なり、両者は峻別されるべきものである。このことを明確に指摘したのがステュアート (Stewart, Dugald, 1753-1828) であった。



『真理の性質と不変性—詭弁と懐疑論への反論』

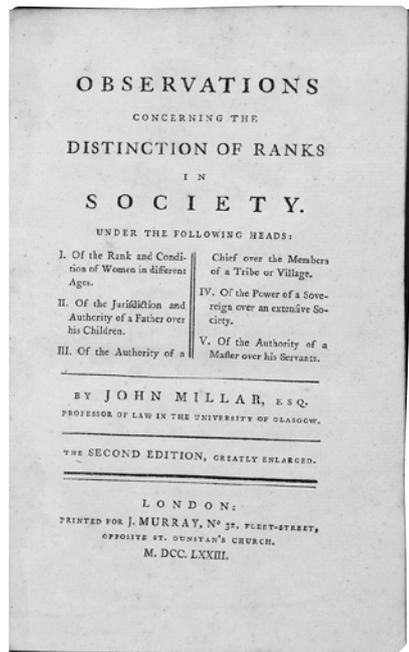
### ジョン・ミラー Millar, John, 1735-1801

スコットランド・ラナーク州に生まれる。幼少期からラテン語とギリシャ語を学び、両親から宗教教育も受けていた。1746年、11歳でグラズゴウ大学に入学し、歴史、法学、哲学、文学などの広範な知識を習得する。ミラーとスミスのお会いは、スミスが、1751年に論理学教授として着任した時であった。卒業後、スミスの仲介によってケイムズ (Kames, Henry Home, lord, 1696-1782) の家で二年間過ごしたが、ミラーはケイムズの良き弟子であり、議論相手でもあった。同時にミラーは、法律家になるための実務経験を積むなかで、すばらしい手腕を発揮したと伝えられている。1761年の夏、母校の市民法教授に就任し、そこでの講義が『階級区分の起源』 (*Observations concerning the distinction of ranks in society*, 1771)、および『英国統治史論』 (*An historical view of the English government*, 1787) としてまとめられた。また、ミラーの活動は大学を越え、市民の法律相談や訴訟の仲裁、あるいは奴隷貿易反対や議会改革の運動にも参加した。一方、道徳哲学講座にはスミスの後任にリード (Reid, Thomas, 1710-1796) が採用されたが、ミラーはリードと相容れることがなかった。

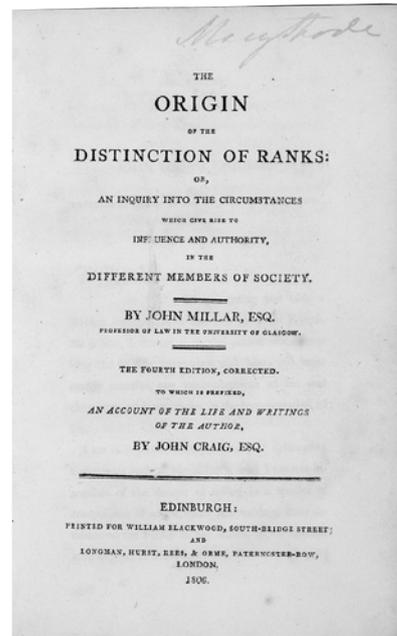
ミラーはスコットランド道徳哲学の伝統、ハリントン (Harrington, James, 1611-1677) 以来の共和主義的精神をとともに受け継ぐ。同時に、スミスの法学講義を基本的枠組みとする彼の法学は、理論的な法学の体系でも実定法の解釈でもなく、歴史的現実に基づいた法と統治の発展を描こうとするものであったといえるだろう。

#### (60) 『階級区分の起源』 第2版 1773

*Observations concerning the distinction of ranks in society.* Under the following heads: I. Of the ranks and condition of women in different ages. II. Of the jurisdiction and authority of a father over his children. III. Of the authority of a chief over the members of a tribe or village. IV. Of the power of a sovereign over an extensive society. V. Of the authority of a master over his servants. The second edition, greatly enlarged. London: Printed for J. Murray, 1773.



『階級区分の起源』 第2版



『階級区分の起源』 第4版

(61) 『階級区分の起源』 第4版 1806

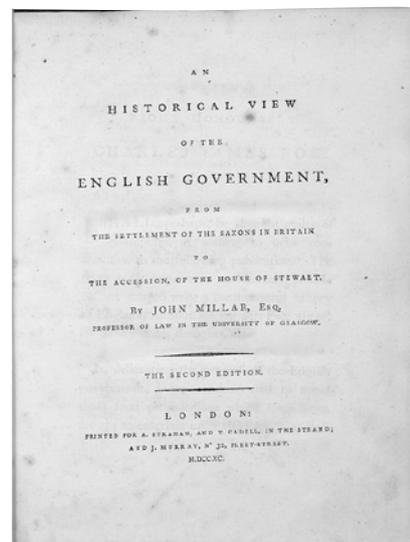
*The origin of the distinction of ranks: or, An inquiry into the circumstances which give rise to influence and authority, in the different members of society.* The fourth edition, corrected. To which is prefixed, an account of the life and writings of the author. Edinburgh: Printed for William Blackwood, and Longman, 1806.

本書は、初版が1771年に刊行され、その後、改訂増補を含んで第4版まで版を重ねた。第3版1779年以降に、『社会における階級区分に関する考察』から『階級区分の起源、すなわち社会の異なる成員に影響力と権利を生じさせる諸事情の研究』へと題名の変更がなされている。基本的構図はモンテスキュー（Montesquieu, Charles de Secondat, baron de, 1689-1755）を想起させるが、ミラーが彼と決定的に異なる部分は、歴史の固有性や特殊性をその普遍性や法則性へとただちに解消してしまわない点にある。ミラーは、人間の歴史に未開から文明における生活様式の変化を軸として捉え、なかでも人間社会の政治的・法的構造に着目する。女性の地位と境遇、父権的支配、族長権、主権者の権威、支配者と奴隷といった支配—従属関係の実証的考察は、それまでの自然法的伝統を越えた、ミラーの思想的独自性を示すものである。

(62) 『英国統治史論』 第2版 1790

*An historical view of the English government, from the settlement of the Saxons in Britain to the accession, of the House of Stewart.* The second edition. London: Printed for A. Strahan, and T. Cadell, and J. Murray, 1790.

『階級区分の起源』は4版まで版を重ねたが、この『英国統治史論』も同じ版数を重ねた。だが第3版（1803）以降は、ミラーの絶筆が甥と娘婿の手によって大幅に増補され、4巻本となっている。彼の



『英国統治史論』

本書での意図は、「イングランドの統治の発展」を「イングランド人の盲目の先入見」と「二大政党固有の偏見」を超越して描写することにあった。その思想的特徴は、名誉革命に結実した自由な国制が、さまざまな状況が絡み合う「意図せざる結果」の所産であったという主張にあらわれている。これはスコットランド啓蒙思想家に共通する論理である。

### デイヴィッド・ステュアート・アースキン (11代バハン伯)

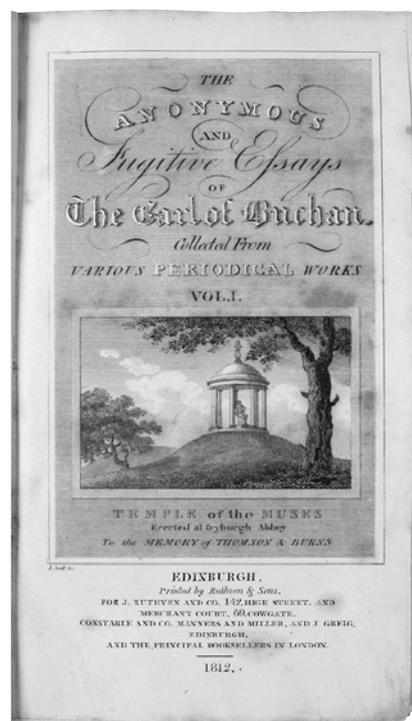
#### Erskine, David Stuart, 11th earl of Buchan, 1742-1829

エディンバラ生まれ。父は、第10代伯爵ヘンリ・デイヴィッド・アースキン (Erskine, Henry David, 10th earl, 1710-1767) であり、母は経済学者サー・ジェームズ・ステュアート (Steuart, Sir James, 1713-1780) の妹であった。弟に法律家のヘンリ (Henry, Erskine, 1746-1817)、政治家・法律家のトマス (Erskine, Thomas Erskine, baron, 1750-1823) がいる。初等教育は両親と、のちにグラズゴウ大学教授となるジェームズ・ブキャナン (Buchanan, James, fl. 1753-1773) とから受けた。1755年から59年まではセント・アンドルーズ大学で、60年から62年まではエディンバラ大学で、62年と63年はグラズゴウ大学で学んでいる。グラズゴウでは、デッサンやエッチングなども習った。1766年には、マドリードのイギリス大使館秘書に任命されるが辞退。1767年に伯爵となり、上院議員として選挙制度改革に尽力した。1780年にはスコットランド古事協会 (Society of Antiquaries of Scotland) を設立した。グラズゴウ大学におけるスミスの最後の学生のひとりとして、その回想記を残している。

#### (63) 『バハン伯の匿名による小論集：種々の定期行物より』 第一巻 1812

*The anonymous and fugitive essays of the Earl of Buchan. Collected from various periodical works. Edinburgh, Printed by J. Ruthven & Sons, for J. Ruthven and Co. [etc.], 1812.*

彼は歴史的・文学的主题、また古物収集について数多くの論考を書いて、『ジェントルマンズ・マガジン』 (*The gentleman's magazine*, 1731創刊) や『スコツ・マガジン』 (*The Scots magazine*, 1739創刊)、文芸誌『ザ・ビー』 (*The bee, or literary intelligencer*, 1759創刊) といった定期行物で発表した。彼はしばしば偽名を使ってそれらを発表していた。本書は、ほとんどが『ザ・ビー』に寄せたもので占められており、詩人のウィリアム・ドラモンド (Drummond, William, 1585-1649) の作品論評や、金匠で慈善活動家のジョージ・ヘリオット (Heriot, George, 1563-1624) らの生涯についての記述、そして、スミスの回想記が含まれている。第一巻が発行されたのみである。



『バハン伯の匿名による小論集：種々の定期行物より』

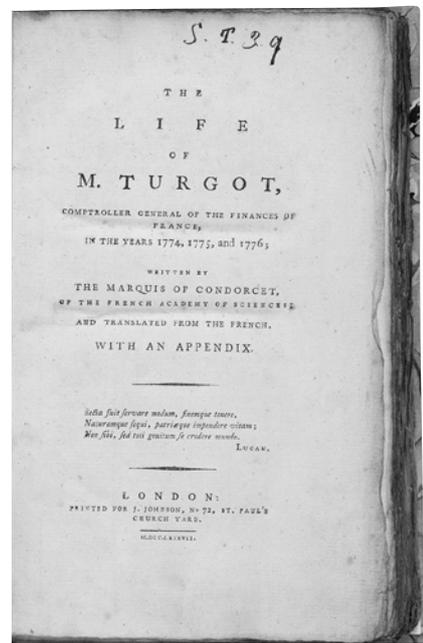
## コンドルセ Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, marquis de, 1743-1794

18世紀後半のフランスの思想家・数学者で、革命期には議会の議員として公教育制度の構想やジロンド憲法の草案に携わった。貴族の家系に生まれ、1769年、数学の業績で科学アカデミーの会員となり、政治や社会制度に数学の応用を目指すことになる（『多数決による決定の見込みに解析を適用する試み』 *Essai sur l'application de l'analyse à la probabilité des décisions rendues à la pluralité des voix*, 1785などが有名）。革命が急進化する1793年6月、ジロンド派はモンターニュ派との政争に敗れ、コンドルセにも逮捕状が出されて、自殺を選んだといわれる。合理的な政治制度の確立のほか、黒人奴隷反対や女性の参政権の主張など、啓蒙と革命のふたつの世界を生きた人物といえよう。1989年のフランス革命200周年に際して、パンテオン入りすることになる。今回、妻ソフィー・コンドルセ (Condorcet, Marie-Louise-Sophie de Grouchy, marquise de, 1764-1822) によるスミス『道徳感情論』の仏語訳が展示されているが（展示43）、夫のコンドルセはフランスにおけるスミス受容を、一方では『国富論』、他方では『道徳感情論』に注目するかたちで示し、今日のスミス再評価に通ずるものがある。

### (64) 『テュルゴ氏の生涯』 英語版 1787

*The life of M. Turgot, Comptroller General of the Finances of France, in the years 1774, 1775, 1776; written by the marquis of Condorcet, of the French Academy of Sciences; and translated from the French. With an appendix. London: Printed for J. Johnson, 1787.*

テュルゴ (Turgot, Anne-Robert-Jacques, baron de l'Aulne, 1727-1781) はルイ十五世没後、ルイ十六世治世開始期の1774年から1776年にかけて財務総監をつとめ、賦役や同業組合廃止などのテュルゴの改革で知られる開明的な行政官である。著者コンドルセは、財務総監時代のテュルゴの下で働いていて、この書物では、テュルゴの思想を紹介し、彼の、富の生成にかんする著作（題名は書かれていないが、おそらく『富の生成と分配にかんする考察』 *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, 1766であると考えられる）をスミス『国富論』の着想とみなすことができると述べている。また、テュルゴはかつて、カラス事件の最終無罪判決のときの訴願審査官であったが、本書でも彼の宗教的寛容にかんする思想が記されている。今回展示されている英語訳（オリジナルのフランス語版は1786年）には、「フランスの『百科全書』から引用されたテュルゴ氏の「財団」についての論考」「直接税から間接税への転換についてコンドルセ氏により表明された立場」「プライス博士とのテュルゴ氏の文通のきっかけ」「財産の相続についてのコンドルセ侯の覚書」「デュ・ポン騎士による『テュルゴ氏の生涯と著作についての覚書』と題された作品について」が補遺として収録されている。



『テュルゴ氏の生涯』

## ジョン・ブルース Bruce, John, 1745-1826

スコットランドの歴史家。エディンバラ大学で学び、倫理学助教授の職や、アダム・ファーガスン (Ferguson, Adam, 1723-1816) 不在時の道德哲学の非常勤教授を経て、1778年から1792年まで常勤の倫理学教授を務める。その講義は『哲学の第一原理』(First principles of philosophy, 1780) や『自然哲学の原理にもとづく倫理学要論』(Elements of the science of ethics, on the principles of natural philosophy, 1786) として出版された。

この『自然哲学の原理にもとづく倫理学要論』は、ブルースと同郷であるアダム・スミスの紹介でストラーン社 (A. Strahan) とカデル社 (T. Cadell) から出版されたが、スミスのカデルに宛てた手紙で、ブルースは “my very intimate and particular friend” と紹介されている。

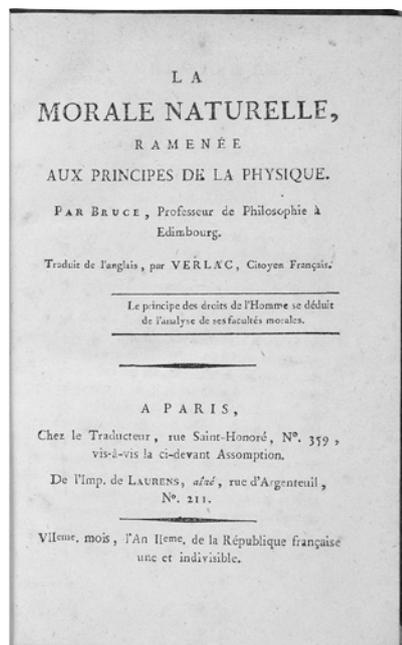
スコットランド出身の政治家ダンダス (Dundas, Henry, 1742-1811) ピット内閣で大臣を務める。初代メルヴィル子爵) の息子の家庭教師として成功したことや、『英領インド統治計画史論』(Historical view of plans for the government of British India, 1793) の執筆により、1793年には東インド会社の史料編纂官となる。その後、インド監督局の秘書官や下院の東インド会社委員会委員を務めるが、終始政府を支持した。スミスが『国富論』で批判していた貿易の独占を支持し、そのための執筆活動も行ったが、不成功に終わり、1814年に下院を辞す。その間の1810年には全3巻からなる『東インド会社年代記』(Annals of the honorable East-India Company, from their establishment by the Charter of Queen Elizabeth, 1600, to the Union of the London and English East-India Companies, 1707-1708) を出版する。その後エディンバラへ帰り、聖書出版に力を注いだ。

### (65) 『自然哲学の原理にもとづく倫理学要論』 フランス語版 1794

*La morale naturelle, ramenée aux principes de la physique. Traduit de l'anglais, par Verlac. A Paris, Chez le Traducteur. De l'imp. de Laurens. VII<sup>ème</sup>. mois, l'An II<sup>ème</sup>. de la République française une et indivisible [1794].*

原著のタイトルは *Elements of the science of ethics, on the principles of natural philosophy* で、1786年にロンドンから出版されている。本仏語訳はヴェラック (Verlac, Bertrand, 1757-1819) による。

本書は、I. 道德の歴史、II. 哲学の原理、III. 道德科学の3部からなり、第I部第2章第2節 科学としての現代道德についての中で、ホップズやヒューム (Hume, David, 1711-1776) 等とともにスミスの道德哲学について概説が書かれている (p.73-74)。



『自然哲学の原理にもとづく倫理学要論』

## ドゥーガルド・ステュアート Stewart, Dugald, 1753-1828

エディンバラ生まれの哲学者。エディンバラ大学道德哲学教授。エディンバラ大学でブレア (Blair, Hugh, 1718-1800) の修辞学・文学や、ファーガスン (Ferguson, Adam, 1723-1816) の道德哲学の講義を受ける。1771-1772年にグラスゴウ大学でリード (Reid, Thomas, 1710-1796) の講義を受け、スコットランド監督派教会の聖職者アーチボルド・アリスン (Alison, Archibald, 1757-1839) と親交を結ぶようになる。その後エディンバラに戻って、1778-1779年に渡米中のファーガ

スンの代わりに道徳哲学を教え、1785年にファーガスンが退職後はその後任となり、1810年まで勤める。1800-1810年には、スミスの道徳哲学から政治経済学を分離させて講義を行った。彼の講義の内容は、自著『道徳哲学概要』(Outlines of moral philosophy. 初版1793、2版1801、3版1808、4版1818)にまとめられている。ステュアートの受講者には『エディンバラ評論』(Edinburgh review, 1802-1929)の創始者の一人で、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』(Encyclopædia Britannica)の編集者でもあるネイピア(Napier, Macvey, 1776-1847)や功利主義哲学者ミル(Mill, James, 1773-1836)がいる。

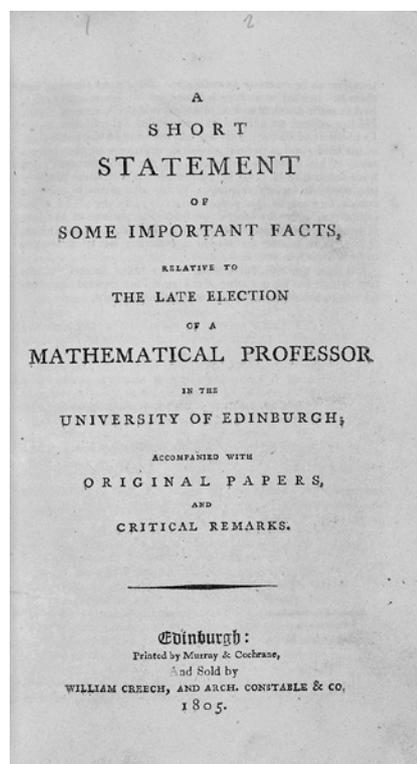
著書に『人間精神の哲学要綱』(Elements of the philosophy of the human mind, Vol.1-3, 1792-1827)、『人間の能動的・道徳的力能の哲学』(Philosophy of the active and moral powers of man, 1828)があるほか、歴史家でスコットランド国教会牧師のロバートスン(Robertson, William, 1721-1793)、スミス、およびリードの伝記を書いた。

(66) 『エディンバラ大学における最近の数学教授選考に関する重要な事実についての短い声明』 1805

*A short statement of some important facts, relative to the late election of a mathematical professor in the University of Edinburgh; accompanied with original papers, and critical remarks.* Edinburgh: Printed by Murray & Cochrane, and sold by William Creech, and Arch. Constable & Co., 1805. Bound with: *Report of the proceedings and debate in the general assembly of the Church of Scotland, respecting the election of Mr Leslie to the mathematical chair in the University of Edinburgh.* Second edition, Edinburgh: Printed for A. Constable and Co. and Ogle and Aikman, and Cadell and Davies, and John Murray, 1806. D. Stewart, *Postscript to Mr Stewart's short statement of facts relative to the election of Professor Leslie.* With an appendix, consisting chiefly of extracts from the records of the University, and from those of the city of Edinburgh. Edinburgh: Printed by Murray & Cochrane..., 1806. [Dr. John Inglis,] *An examination of Mr Dugald Stewart's pamphlet, relative to the late election of a mathematical professor in the University of Edinburgh.* By one of the ministers of Edinburgh. Edinburgh: Printed for Peter Bell, printer to the Church of Scotland, and for Longman, 1805. W.L. Brown, *Remarks on certain passages of "An examination of Mr. Dugald Stewart's pamphlet, by one of the ministers of Edinburgh;" relative to subjects nearly connected with the interests of religion and learning.* Aberdeen: Printed by J. Chalmers and Co. for W. Creech; A. Constable and Co. and A. Brown, 1806.

ステュアートの講義を聴講したことのある数学者のレズリ(Leslie, Sir John, 1766-1832)が、エディンバラ大学の数学教授職に応募するが、スコットランド教会穏健派がレズリは、ヒュームを支持する無神論者であるとして、自派の牧師を推薦した。その選考をめぐるステュアートらが反論し、辛辣な論争が起こった。このステュアートの『声明』は、業務不履行を招くとして教授と牧師との兼業反対および(ヒューム因果論解釈をめぐる)知的自由の擁護を争点として、レズリを弁護して書かれた。この問題はスコットランド教会総会にかけられ、ステュアートも弁護にたち、96対84で穏健派の告訴は却下される。この論争で、19世紀スコットランドでレズリを支持したスコットランド教会福音派が初めて穏健派に勝利したことにより、以後福音派の力が増すことになる。

本小冊子は、「レズリ論争」関連のパンフレット4点—『エディンバラ大学数学の職にレズリ氏を選



『エディンバラ大学における最近の数学教授選考に関する重要な事実についての短い声明』

考することについてのスコットランド教会総会における会議録及び論争報告』(2版 エディンバラ 1806)、D.ステュアート著『ステュアート氏によるレズリ教授選考に関する事実についての短い声明への後記』(エディンバラ 1806)、[ジョン・イングリス(穏健派牧師)著]『エディンバラ大学における最近の数学教授選考に関するドゥーガルド・ステュアート氏のパンフレットについての考察』(エディンバラ 1805)、W. L. ブラウン著『エディンバラの牧師の一人が書いたドゥーガルド・ステュアート氏のパンフレットについての考察』のある節についての意見：宗教と学問との諸利害と密接に関連のある主題について』(アバディーン 1806) —と合冊製本されている。

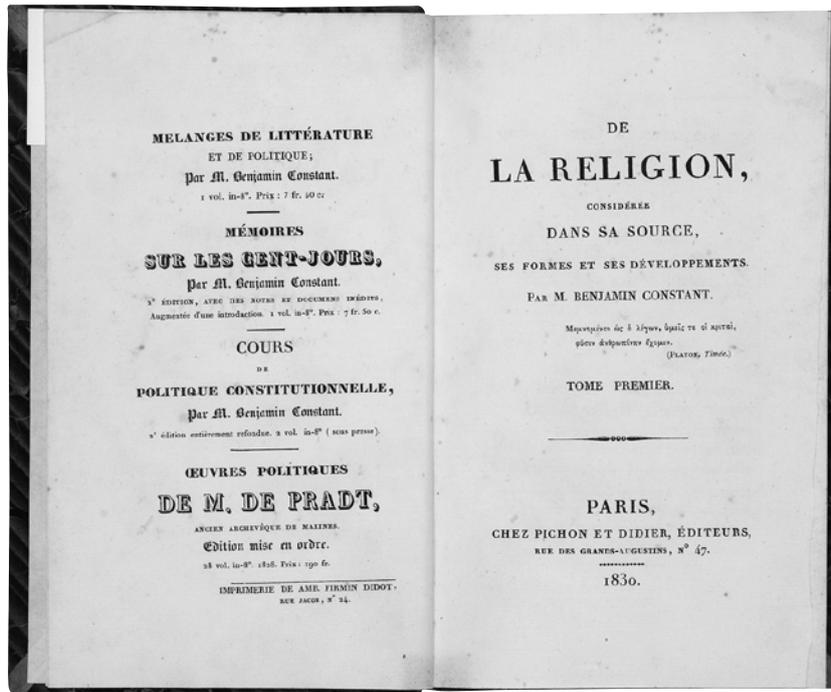
### バンジャマン・コンスタン **Constant, Benjamin, 1767-1830**

フランスの作家、思想家。スイスのロザンヌに生まれ、1782年2月から83年までエアランゲンの大学に学んだ後、同年7月から85年5月までエディンバラで留學生活を経験する(スミスと出会ったかどうかは不明)。1786年に帰国するが、1794年にスタール夫人(Staël, Madame de Anne-Louise-Germaine, 1766-1817)と出会い、フランス革命に参加し、以後行動を共にした。ブリュメールのクーデタ後1799年に法政審議院に入るが、ナポレオンと対立し1802年に追放される。亡命中はスイスのコベを拠点にスタール夫人とともにナポレオン批判の活動を続け、自由主義的政治原理を探求するとともに(代表作『政治の諸原理』*Principes de politique applicables à tous les gouvernements représentatives et particulièrement à la constitution actuelle de la France*, 1815)、ゲーテ、シラー、シュレーゲル兄弟(Schlegel, Karl Wilhelm Friedrich von, 1772-1829 および Schlegel, August Wilhelm, 1767-1845)などのドイツ文学思想を吸収し恋愛小説の傑作『アドルフ』(*Adolphe: anecdote trouvée dans les papiers d'un inconnu et publiée*, 1816)を生み出した。スミスの影響を強く受け、『政治の諸原理』には『国富論』(1776)からの援用が多くみられるし、『アドルフ』に『道徳感情論』(1759)の影響があることは水田洋が明らかにした。ナポレオンの百日天下(1814)時にはこれに協力し、変節と非難される中『憲法追加条項』を起草した。王政復古後追放される(1815-1816)が、帰国後は下院議員として自由主義的活動を展開した(1829-1830)。フランス自由主義の初期を代表する一人で、特に、古代との比較により近代の個人的自由の意味を論じた1819年のパリのアテネ・ロワイヤルでの講演は有名であり、これは『立憲政治論集』全4巻(*Collection complète des ouvrages publiés sur le gouvernement représentatif et la constitution actuelle de la France, formant une espèce de cours de politique constitutionnelle*, 1818-1820)に収録された。次第に功利主義の批判に転じ、モラルと文学と宗教への関心を深めた。大部の宗教論を構想し(『源泉、形式、発展において考察された宗教について』(*De la religion considérée dans sa source, ses formes et des développements*, 1824-1831)、晩年の独自の自由主義論考の集成として『文学政治雑論集』(*Mélanges de littérature et de politique*, 1829)を残した。

#### (67) 『源泉、形式、発展において考察された宗教について』 全5巻 1830-1831

*De la religion, considérée dans sa source, ses formes et ses développements.* Paris, Chez Pichon et Didier, 1830-1831. 5 tomes.

自由をそのモラルに結び付け考察したコンスタンは、スコットランドの道徳哲学(特にスミス『道徳感情論』1759)とフランス革命の教育思想(特にコンドルセ Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, marquis de, 1743-1794『人間精神進歩史』*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*, 1794)から多くを受容したが、1802年以降の亡命生活でドイツのロマン主義的文学に触れ、個人的恋愛体験での苦悩もあって、自由との関係において宗教感情の持つ意味に深い関心を寄せた。特に、ヘルダー(Herder, Johann Gottfried, 1744-



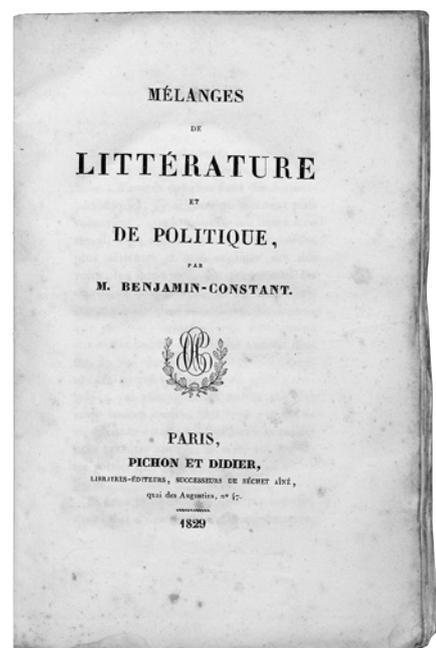
『源泉、形式、発展において考察された宗教について』

1803)の『人類の歴史哲学考』(*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, 1784-1791)に感銘を受け、宗教的思索を深め、その集大成として本書全5巻を生み出した。本書は、1824より Tome I, Paris, Leroux, 1824; Tome II, Paris, Béchét, 1825; Tome III, Paris, Béchét, 1827; Tome IV-V, Paris, Pichon et Didier, 1831 というように、出版社を変えて刊行され、最終巻 Tome IV-V 刊行時には、当該出版社がそれまでの刊行部分を含め作品全体を出版した。水田文庫は、この最終巻刊行時の版全体を所収しているのである。本作品においてコンスタンは、宗教について、その形式および諸制度と宗教感情を厳格に区別し、両者の関係を論じながら、古代の多神教から一神教の成立と発展に至る宗教感情の展開を考察している。プロテスタンティズムの宗教感情が自由のモラルの発展に寄与したとされるが、信仰についての判断に踏み込んではいない。本書は、宗教論という形をとったコンスタンの近代的自由論でもある。コンスタンは、エディンバラ留学時代(1783年7月-85年5月)から、多神教と古代の自由およびキリスト教と近代の自由の関係に着目していたが、本書において、コンドルセ的進歩史観にヘルダー的思考を合成し、自由論と宗教論の総合を試みたのである。

(68) 『文学政治雑論集』 1829

*Mélanges de littérature et de politique*. Paris, Pichon et Didier, 1829.

コンスタンの生前に刊行された最後の著作。政治思想において功利主義批判が強化され、自由の発条としての文学が重視される傾向が色濃く示されている。スタール夫人およびドイツ文学についての論考にはロマン主義への接近が明らかであり、デュノワ



『文学政治雑論集』

イエ（Dunoyer, Charles, 1786-1862）についての議論に功利主義批判の態度がはっきりと表明されている。ただし、スタール夫人の作品を批評する中で示される「道徳小説」の概念は、アダム・スミスの道徳哲学のコンスタンによる再編であって、コンスタンの思想は、ロマン主義への屈折を拒否する自由主義的政治哲学の枠組みの中にとどまるものである。

### ジェイムズ・ミル Mill, James, 1773-1836

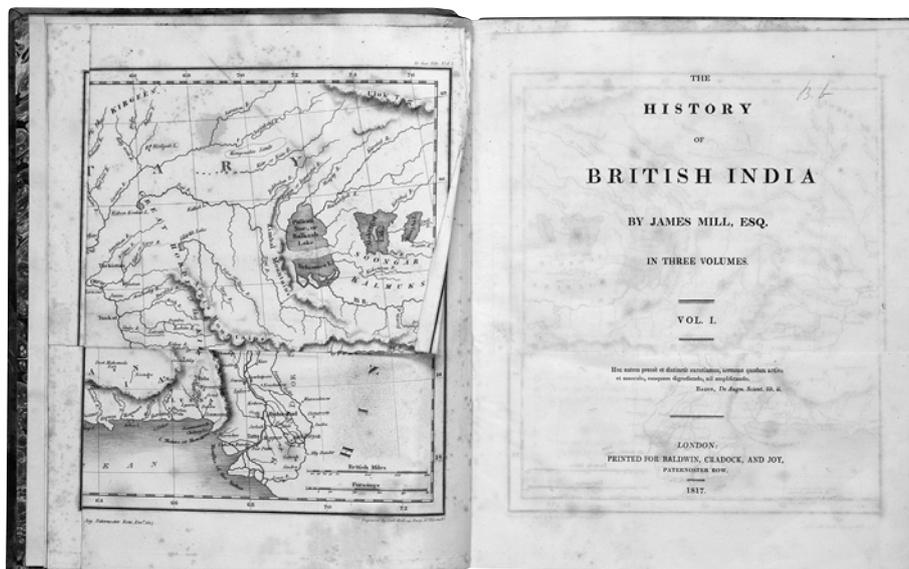
スコットランドの哲学者、歴史家、経済学者。イングランドの哲学者、経済学者であるジョン・ステュアート・ミル（Mill, John Stuart, 1806-1873）の父。スコットランド東海岸のモントローズ近郊、ノースウォーター・ブリッジ生まれ。エディンバラ大学に進学してギリシア古典などを学び、神学課程を修了して牧師の資格を取得。1802年にロンドンに出て文筆活動を始めた。1808年にベンサム（Bentham, Jeremy, 1748-1832）に出会って功利主義を信奉するようになり、その原理の応用としての社会改革を目指す「哲学的急進派」の指導者として活躍した。『リテラリ・ジャーナル』（*The literary journal*, 1803-1806）、『セント・ジェイムズ・クロニクル』（*St. James chronicle*）、『エディンバラ評論』（*Edinburgh review*, 1802-1929）などに多数の論説を執筆、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第4、5、6版補遺（*Supplement to the fourth, fifth and sixth editions of the Encyclopædia Britannica*, 1824）にも政治や法律、教育などの論説を寄稿した。とくに政治に関する論説は、1820年代に世論に非常に大きな影響をあたえ、1832年の第一次選挙法改正に結びついた。ジャーナリストとして活動するかたわら、10年あまりかかって執筆した『英領インド史』（*The history of British India*, 1817）が評判となって東インド会社に就職し、1830年には幹部職であるインド通信審査部長まで昇進した。

他の著書として、『経済学綱要』（*Elements of political economy*, 1821）、『人間の精神現象の分析』（*Analysis of the phenomena of the human mind*, 1729）などがある。

#### (69) 『英領インド史』 全3巻 1817

*The history of British India*. In three volumes. London: Printed for Baldwin, Cradock, and Joy, 1817.

『英領インド史』はインドに関する体系的な最初の著述であり、インドについて「ヨーロッ



『英領インド史』

パ人が実質的に関心を持つすべての情報を網羅すること」をめざして執筆された大著である。インドの社会、政治、法律、租税、宗教、慣習、文学、芸術の歴史であり、イギリスのインド支配の叙述でもあるといえる。ミルによれば、「批判的歴史」を書くために必要なのは、主題についての直接的、限定的な知識ではなく、断片的な観察をもとに事実を判定するために必要な「人間性の諸法則に関するこの上なく深い知識」と「人間社会の諸原理に関する最も完全な理解」を備えていることが重要であると強調する。事実、ミル自身インドを訪れたこともなければ、現地の多くの言語のいずれをも修得したこともないといい、スコットランド啓蒙思想の哲学的な歴史方法論と、ベンサム功利主義による分析をくわえて叙述されている。

### ウィリアム・バロン Barron, William, d. 1803

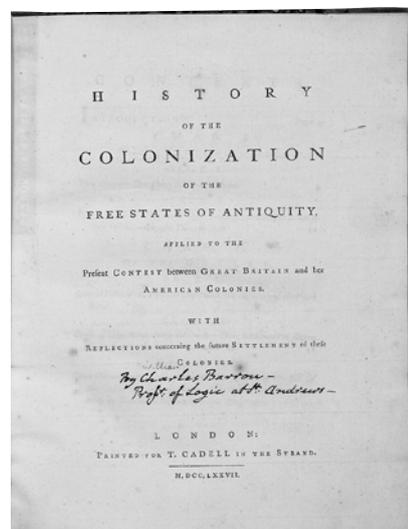
歴史家。1757年からグラスゴウ大学で、スミスに学ぶが卒業せず、1761年からはセント・アンドルーズ大学で学ぶ。1762年から教区牧師の職につく。1778年にはセント・アンドルーズ大学で、ウォトスン (Watson, Robert, 1730?-1781) の後任として、論理学・修辞学・形而上学教授に選考され、亡くなるまで勤める。近年まであまり研究されていないが、スミスとの関連が深い人物ではないかとされる。アダム・スミスの蔵書目録には、展示図書 (70) のほか、2冊が含まれている。

#### (70) 『古代自由国家の植民地化史』 1777

*History of the colonization of the free states of antiquity, applied to the present contest between Great Britain and her American colonies. With reflections concerning the future settlement of these colonies.* London: Printed for T. Cadell, 1777.

古代の帝国主義国家の原理を英国とアメリカ植民地との関係に応用して、その危機を理解したうえで、アメリカにイギリス議会への代表権を認めるとして、スミスの『国富論』を批判する内容も含まれており、匿名で出版された。

その翌年にはユトレヒトで仏語訳 (*Histoire de la fondation des colonies des anciennes républiques: adaptée à la dispute présente de la Grande Bretagne avec ses colonies américaines*) が出版される一方、ケンブリッジ大学のシモンズ (Symonds, John, *bap.* 1728, d. 1807) が批判して *Remarks upon an essay, intituled, the history of the colonization of the free states of antiquity, applied to the present contest between Great Britain and her American colonies* をロンドンで出版した。



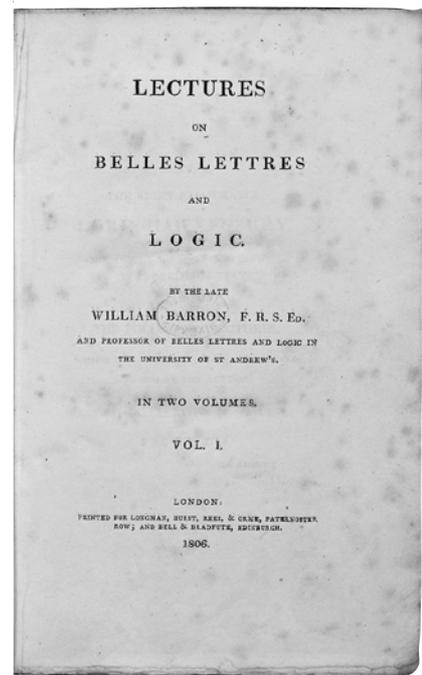
『古代自由国家の植民地化史』

#### (71) 『文学論理学講義』 全2巻 1806

*On lectures on belles lettres and logic.* In two volumes. London: Printed for Longman, Hurst, Rees, & Orme, and Bell & Bradfute, 1806.

セント・アンドルーズ大学の論理学・修辞学・形而上学教授として、1781年に講義要綱 *Synopsis of lectures on belles lettres & logic read in the University of St Andrews* を書いているが、本書はこれにもとづいて匿名でバロンの死後出版され、18世紀半ばにスミスやブレア (Blair, Hugh, 1718-1800) らが新しく導入し、スコットランドの各大学で実施されている修辞学研究について改めて明確にしたものである。この中で、スウィフト (Swift, Jonathan, 1667-1745)

の文体を評価していることから、スミスの影響を受けているといえるのではないかとされる。



『文学論理学講義』

## おもな参考文献

- Mizuta, Hiroshi (Ed. with an introduction and notes) *Adam Smith's library: a catalogue*. Oxford: Clarendon Press, 2000.
- The new encyclopædia Britannica*. 15th ed. Chicago; Tokyo: Encyclopædia Britannica, c1989.
- Oxford dictionary of national biography*. Oxford: Oxford University Press, 2004. 60 vols. (Online edition <http://www.oxforddnb.com/>)
- 浅沼和典著『近代共和主義の源流：ジェイムズ・ハリントンの生涯と思想』人間の科学新社 2001
- 天羽康夫著『ファーガスンとスコットランド啓蒙』勁草書房 1993
- 安藤隆穂著『フランス啓蒙思想の展開』名古屋大学出版会 1989
- 安藤隆穂著『フランス自由主義の成立：公共圏の思想史』名古屋大学出版会 2007
- 石井三記著『18世紀フランスの法と正義』名古屋大学出版会 1999
- 今村仁司、三島憲一、川崎修編集『岩波社会思想事典』岩波書店 2008
- ヴォルテール著 中川信訳『カラス事件』富山房 1978 (富山房百科文庫)
- ヴォルテール著 林達夫訳『哲学書簡』改版 岩波書店 1980 (岩波文庫)
- 梅田百合香著『ホッブズ政治と宗教』名古屋大学出版会 2005
- A. J. エア著 篠原久訳『ヒューム』日本経済評論社 1994
- マイスター・エックハルトほか著 澤田昭夫ほか訳『カトリック改革』教文館 1994 (宗教改革著作集 13)
- マイケル・オークショット著 中金聡訳『リヴァイアサン序説』法政大学出版局 2007 (叢書・ユニベルシタス)
- フランク・B. ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典』改訂版 TBSブリタニカ 1988
- 京都大学経済学部上野文庫運営委員会編『上野文庫解題目録』一般部門1 京都大学経済学部 1962
- 『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局 1986
- L. クリーガー著 倉島隆訳『プーフェンドルフの政治思想』時潮社 1984
- グローチウス著 一又正雄訳『戦争と平和の法』第1~3巻 巖松堂 1950-1951
- ジェームズ・サザランド著 織田稔、藤原浩一訳『『ロビンソン・クルーソー』を書いた男の物語：ダニエル・デフォー伝』ユニオンプレス 2008
- ジョルジョ・ド・サンティリャーナ著 一瀬幸雄訳『ガリレオ裁判』岩波書店 1973
- 篠原久著『アダム・スミスと常識哲学：スコットランド啓蒙思想の研究』有斐閣 1986 (関西学院大学経済学研究叢書 20)
- 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』全5巻 研究社1996-2009
- 『集英社世界文学大事典』全6巻 集英社 1996-1998 (オンライン版Japan Knowledge <http://na.jkn21.com/stdsearch/displaymain>)
- 鈴木信雄著『アダム・スミスの知識 = 社会哲学：感情の理論を視軸にして』名古屋大学出版会 1992
- ジョナサン・スウィフト著 中野好之、海保真夫訳『スウィフト政治・宗教論集』法政大学出版局 1989 (叢書・ユニベルシタス)
- アダム・スミス著 水田洋訳『道徳感情論』上、下 岩波書店 2003 (岩波文庫)
- アダム・スミス著 杉山忠平訳 水田洋監訳『国富論』全4巻 岩波書店 2000-2001 (岩波文庫)
- Adam Smith 著 水田洋、松原慶子訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』名古屋大学出版会 2004
- 妹尾剛光著『コミュニケーションの主体の思想構造：ホッブズ・ロック・スミス』増補3訂版 北樹出版 2007 (現代思想選書)

- 高橋真司著『ホッブズ哲学と近代日本』未来社 1991
- ジョサイア・タッカー著 大河内暁男訳『政治経済問題四論』東京大学出版会 1970 (初期イギリス経済学古典選集 12)
- 田中一郎著『ガリレオ：庇護者たちのなかで』中央公論社 1995 (中公新書)
- 田中正司編著『スコットランド啓蒙思想研究：スミス経済学の視界』北樹出版 1988
- 田中正司著『アダム・スミスの自然法学：スコットランド啓蒙と経済学の生誕』第2版 御茶の水書房 2003
- 田中秀夫著『スコットランド啓蒙思想史研究：文明社会と国制』名古屋大学出版会 1991
- 田中秀夫著『啓蒙と改革：ジョン・ミラー研究』名古屋大学出版会 1999
- 田中秀夫著『原点探訪アダム・スミスの足跡』法律文化社 2002
- 田中敏弘著『マンデヴィルの社会・経済思想：イギリス十八世紀初期社会・経済思想』有斐閣 1966 (関西学院大学経済学研究叢書 8)
- 田村秀夫、田中浩編『社会思想事典』中央大学出版部 1982
- 堤林剣著『コンスタンの思想世界：アンビヴァレンスのなかの自由・政治・完成可能性』創文社 2009
- 堂目卓生著『アダム・スミス：『道徳感情論』と『国富論』の世界』中央公論新社 2008 (中公新書)
- W.B.トッド、K.E.カーペンター、大河内暁男著『書誌的にみたスミス『国富論』の形成とその国際的伝播：刊行200年記念ファクシミリ版アダム・スミス著『国富論』解説』雄松堂書店 1976
- ツヴェタン・トドロフ著 小野潮訳『バンジャマン・コンスタン：民主主義への情熱』法政大学出版局 2003 (叢書・ユニベルシタス)
- 長尾伸一著『ニュートン主義とスコットランド啓蒙：不完全な機械の喩』名古屋大学出版会 2001
- 長尾伸一著『トマス・リード：実在論・幾何学・ユートピア』名古屋大学出版会 2004
- 中野好夫著『スウィフト考』岩波書店 1969 (岩波新書)
- 日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』研究社 2007
- 日本基督教協議会文書事業部・キリスト教大事典編集委員会企画・編集『キリスト教大事典』改訂新版 教文館 1968
- 『日本大百科全書』全26巻 小学館 1984-1994 (オンライン版Japan Knowledge <http://na.jkn21.com/individualsearch/displaymain>)
- フランシス・ハチスン著 田中秀夫、津田耕一訳『道徳哲学序説』京都大学学術出版会 (近代社会思想コレクション 03)
- 半澤孝磨著『ヨーロッパ思想史における「政治」の位相』岩波書店 2003
- 廣松渉ほか編『岩波哲学・思想事典』岩波書店 1998
- ファーガスン著 大道安次郎訳『市民社会史』上, 下 白日書院 1948
- 藤原保信、佐藤正志著『ホッブズ リヴァイアサン』有斐閣 1978 (有斐閣新書)
- J.G.A. ポーコック著 田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房 1993
- ホッブズ著 水田洋訳『リヴァイアサン』改訳 全4巻 岩波書店 1992 (岩波文庫)
- ホント、イグナティエフ編著 水田洋、杉山忠平監訳『富と徳：スコットランド啓蒙における経済学の形成』未来社 1990
- 前田俊文著 久留米大学法学会編『プーフェンドルフの政治思想：比較思想史的研究』成文堂 2004 (久留米大学法政叢書12)
- 三浦謙著『炎の軌跡：ジョナサン・スウィフトの生涯』南雲堂 1994
- 水田洋著『近代人の形成：近代社会観成立史』東京大学出版会 1954
- 水田洋著『アダム・スミスの蔵書』一橋大学社会科学古典資料センター 1989 (一橋大学社会科学古典資料センター Study series no.19)

- 水田洋、杉山忠平編『アダム・スミスを語る』ミネルヴァ書房 1993 (Minerva21世紀ライブラリー 7)
- 水田洋著『アダム・スミス：自由主義とは何か』講談社 1997 (講談社学術文庫)
- 水田洋著『アダム・スミス研究』新装版 未来社 2000
- 水田洋著『アダム・スミス論集：国際的研究状況のなかで』ミネルヴァ書房 2009
- 山内進著『新ストア主義の国家哲学：ユストゥス・リプシウスと初期近代ヨーロッパ』千倉書房 1985 (成城大学法学部研究叢書 3)
- 山崎怜著『アダム・スミス』研究社 2005 (イギリス思想叢書 6)
- 山下重一著『ジェイムズ・ミル』研究社出版 1997 (イギリス思想叢書 8)
- トマス・リード著 朝広謙次郎訳『心の哲学』知泉書館 2004
- ジョン・レー著 大内兵衛、大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店 1972
- ギヨーム＝トマ・レーナル著 大津真作訳『両インド史』東インド篇 上巻 法政大学出版局 2009
- I. S. ロス著 篠原久、只腰親和、松原慶子訳『アダム・スミス伝』シュプリンガー・フェアラーク 東京 2000

名古屋大学附属図書館  
附属図書館研究開発室

館長・室長 松浦 好治  
研 究 員 中井えり子

事務担当

情報サービス課長 増田 晃一  
同課長補佐 黒柳 裕子

展示協力

名古屋大学大学院経済学研究科

名古屋大学附属図書館2010年秋季特別展

水田文庫新収蔵記念 「アダム・スミスと啓蒙思想の系譜」

会期：2010年10月14日（木）～11月11日（木）（平日・土曜日のみ開室）  
9:30～17:00

会場：名古屋大学中央図書館展示室

主催：名古屋大学附属図書館・名古屋大学附属図書館研究開発室

共催：名古屋大学大学院経済学研究科

後援：社団法人キタン会

愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市の各教育委員会

経済学史学会、社会思想史学会、日本18世紀学会、日本イギリス哲学会、

アダム・スミスの会

〈講演会〉

日時：2010年10月30日（土曜日）13:30～16:30

場所：名古屋大学中央図書館5階多目的室

講師：水田 洋氏（名古屋大学名誉教授、日本学士院会員）

「はく思想形成と蔵書形成」

田中秀夫氏（京都大学大学院経済学研究科長）

「自然法、共和主義、スコットランド啓蒙－水田文庫と私の研究」

篠原 久氏（関西学院大学経済学部教授）

「アダム・スミス思想体系と啓蒙思想の遺産」

司会：安藤隆穂氏（名古屋大学大学院経済学研究科教授）

展示解説：水田洋氏

図録の監修、執筆者担当項目

水田 洋 解題監修、スミス； 田中秀夫 I・II コラム解説； 篠原 久 III・IV コラム解説；安藤隆穂 コンスタン；  
長尾伸一 リード； 石井三記・福田真希 ヴォルテール、カラス事件関係、コンドルセ； 磯部 隆 リブシウス； 大  
塚雄太； ハリントン、プーフェンドルフ、スウィフト、タッカー、ハチスン、マンデヴィル、ヒューム、ブレア、ミラー、アー  
スキンの； 大石和欣・三原大地 デフォー； 松波京子 ケイムズ、モンボド、ロバートスン； 福田名津子 フェーガスン、  
フォーダイス； 梅澤一晴 パーカー、シェリダン、オズワルド、ビーティ； 中井えり子 ベラルミーノ、グロティウス、  
カンバーランド、ハイネッキウス、フレッチャー、スコッツ・マガジン、ホーン、キャップ、ブルース、ステュアート、  
バロン； 黒柳裕子 ホップズ、レーナル、ミル